仙台市文化財調査報告書第223集

高屋敷遺跡ほか

調査報告書

1997年3月

仙台市教育委員会

仙台市文化財調査報告書第223集

高屋敷遺跡ほか

調査報告書

1997年3月

仙台市教育委員会

序　文

仙台市には約700ヵ所の遺跡が存在し、年間にそれらの遺跡に関係する開発、建築が350件以上あります。それらの行為に対しては文化財保護法の定めにより、それぞれの工事内容を審査したうえ、立会調査や発掘調査の対応をすることになっております。

本調査には時間がかかり、調査着手を待っておられる申請者も多い状況ですが、当教育委員会文化財課では一日でも早く調査に着手できるよう、また一件でも多く調査が終了するように努めておりますので、今後ともご理解とご協力をお願い申し上げます。

平成８年度は71遺跡93ヵ所の確認調査、本調査を実施しましたが、前段で触れましたように、調査の効率化を図るための調査体制の見直しを行ったうえでの実施となりました。具体的には小規模調査は別に調査班を組み、機動的な対応をすることにしたものであり、相当の効果をあげたものと考えております。

その小規模調査班の担当した調査のうち、10件をまとめてここに報告することになりました。

ここで報告しなかったものを含め、仙台市の各区で確認調査、本（小）調査を実施しました折り、多くの皆様のご協力、ご指導を受けましたことに対しまして、心より感謝申し上げます。

小調査の報告ではありますが、各地域の情報を提供しておりますので、ぜひ参考資料としてご活用していただければ幸いです。

1997年３月

仙台市教育委員会
教育長　堀　籠　克　彦

例　言

1　本書は、仙台市関連事業に関わる高屋敷遺跡（２次）・中在家南遺跡（２次）・安養寺配水場前窯跡と、民間開発事業に関わる杉土手（３次）・北前遺跡（５次）・押口遺跡（２次）・平治遺跡・高柳遺跡（２次）・富沢遺跡（100次）・安久遺跡（４次）の発掘調査と陸奥国分尼寺跡の確認調査報告書である。

2　本書の作成は、仙台市教育委員会文化財課　篠原信彦・工藤哲司・竹田幸司が担当し、下記のとおり分担した。

本文執筆	高屋敷遺跡	工藤	中在家南遺跡	工藤
	安養寺配水場前窯跡	篠原	杉土手．北前遺跡	工藤
	押口遺跡	篠原	平治遺跡	工藤
	高柳遺跡	篠原	富沢遺跡	竹田
	安久遺跡	竹田	陸奥国分尼寺跡	篠原
遺構図作成		工藤		
遺物写真撮影		竹田		

3　本書に関わる整理作業には、下記の参加を得た。

秋葉泰徳・石船清隆・加藤美紀・小玉寿江・佐藤悦子・佐藤由美子・佐藤麻弥・鈴木美代子・只野宗一
中里とわ子・山並明夫・米森博子

4　本書に関わる図面・写真・遺物は、仙台市教育委員会が保管している。

凡　例

1　本書で使用した土色は、『新版標準土色帖』（小山・竹原：1976）に準拠している。

2　図中で使用した座標値は、平面直角座標系Ｘを基準としている。

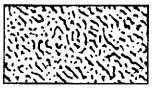
3　調査地点については、遺跡地図に★印で示した。

4　遺構については、次の略号を使用した。

建　　物：ＳＢ	溝　　跡：ＳＤ	土　坑：ＳＫ
竪穴（住居）：ＳＩ	その他の遺構：ＳＸ	ピット：Ｐ

5　遺物の登録は、次の略号を使用した。

Ａ：縄文土器	Ｂ：弥生土器	Ｃ：ロクロ不使用の土師器	Ｄ：ロクロ使用の土師器
Ｅ：須恵器	Ｇ：平瓦・軒平瓦	Ｋ：石器・石製品	

6　遺構図における  は、撹乱を示す。

7　土師器内面の網目は、黒色処理を示す。

目　次

Ⅰ　高屋敷遺跡（2次）調査報告書

1　調査要項 …… 1
2　遺跡の位置と環境 …… 1
3　調査方法 …… 1
4　基本層位 …… 2
5　第2次調査西区発見遺構と出土遺物
　1）遺物包含層 …… 3　　2）竪穴住居跡 …… 3
　3）土坑 …… 7　　4）溝跡 …… 7
　5）その他の遺構 …… 8
6　第2次調査東区発見遺構と出土遺物 …… 8
　1）掘立柱建物跡 …… 8　　2）溝跡 …… 9
7　調査成果のまとめ …… 9

Ⅱ　中在家南遺跡（2次）調査報告書

1　調査要項 …… 14
2　遺跡の位置と環境 …… 14
3　調査方法 …… 16
4　基本層位 …… 17
5　発見遺構と出土遺物 …… 17
　1）方形周溝墓 …… 17　　2）溝跡 …… 24
　3）ピット …… 25
6　調査成果のまとめと考察 …… 25
　1）発見遺構の総括 …… 25　　2）中在家南遺跡の方形周溝墓について …… 26

Ⅲ　安養寺配水場前窯跡調査報告書

1　調査要項 …… 33
2　遺跡の位置と環境 …… 33
3　調査方法と基本層位 …… 34
4　発見遺構と出土遺物 …… 34
5　出土遺物の検討 …… 38
6　調査成果のまとめ …… 38

Ⅳ　杉土手（3次）・北前遺跡（5次）調査報告書

1　調査要項 …… 43
2　調査に至る経過 …… 43
3　遺跡の位置と環境 …… 43
　1）地理的環境 …… 43　　2）歴史的環境 …… 43

4　過去の調査経過 …… 45
5　調査方法 …… 46
6　基本層位 …… 47
7　杉土手の調査 …… 47
1）調査前の現状 …… 47　2）積土断面と規模 …… 48
3）積土上部の遺構 …… 50
8　北前遺跡の調査 …… 50
1）基盤層上面検出遺構 …… 50　2）基盤層（火山灰層）の調査 …… 51
3）出土遺物 …… 53
9　調査成果のまとめ …… 53
1）杉土手の構築年代について …… 53　2）北前遺跡の調査成果 …… 54

Ⅴ　押口遺跡（2次）調査報告書

1　調査要項 …… 58
2　遺跡の位置と環境 …… 58
3　調査方法と基本層位 …… 61
4　発見遺構と出土遺物 …… 61
5　調査成果のまとめ …… 62

Ⅵ　平治遺跡調査報告書

1　調査要項 …… 64
2　遺跡の位置と環境 …… 64
3　調査方法 …… 65
4　基本層位 …… 66
5　トレンチと発見遺構の概要 …… 66
1）トレンチの状況 …… 66　2）発見遺構と出土遺物 …… 67
6　調査成果のまとめ …… 67

Ⅶ　高柳遺跡（2次）調査報告書

1　調査要項 …… 70
2　遺跡の位置と環境 …… 70
3　調査方法 …… 72
4　基本層位 …… 72
5　発見遺構と出土遺物 …… 75
1）遺物包含層 …… 75　2）溝跡 …… 75
3）土坑 …… 75
6　調査成果のまとめ …… 76

Ⅷ　富沢遺跡（100次）調査報告書

1　調査要項 …… 82
2　遺跡の位置と環境 …… 82
3　調査概要 …… 83
4　調査成果のまとめと考察 …… 84
1）水田耕作土 …… 84　　2）まとめ …… 85

Ⅸ　安久遺跡（4次）調査報告書

1　調査要項 …… 87
2　遺跡の位置と環境 …… 87
3　調査方法 …… 88
4　発見遺構と出土遺物 …… 88
5　調査成果のまとめと考察 …… 91
1）ＳＩ－１及び出土遺物の年代 …… 91　　2）まとめ …… 91

Ⅹ　陸奥国分尼寺跡確認調査報告書

1　調査要項 …… 94
2　遺跡の位置と環境 …… 94
3　調査方法と基本層位 …… 95
4　発見遺構と出土遺物 …… 95
1）掘立柱建物跡 …… 95　　2）その他の遺構 …… 97
5　調査成果のまとめ …… 97

図　版　目　次

Ⅰ　高屋敷遺跡（2次）調査報告書

第１図　高屋敷遺跡と周辺の遺跡 …… 2
第２図　調査地点と周辺の地形 …… 3
第３図　第１次・２次調査検出遺構合成図 …… 4
第４図　西区遺構配置図 …… 5
第５図　西区北壁土層断面図 …… 5
第６図　ＳＩ－１竪穴住居跡 …… 6
第７図　ＳＩ－１竪穴住居跡出土遺物 …… 7
第８図　土坑・溝跡・その他の遺構 …… 7
第９図　東区遺構配置図 …… 8
第10図　ＳＢ－１掘立柱建物跡実測図 …… 9
第11図　西区ＳＤ－１断面図 …… 9

Ⅱ　中在家南遺跡（2次）調査報告書

第12図　調査地点と周辺の地形 …… 14
第13図　遺構配置図 …… 15
第14図　ＳＤ－１（２号方形周溝墓）土層断面図 …… 16
第15図　ＳＤ－２（４号方形周溝墓）土層断面図 …… 16
第16図　ＳＤ－３・４土層断面図 …… 16
第17図　出土土器 …… 18
第18図　出土石器１ …… 19
第19図　出土石器２ …… 20

第20図　出土石器３ …… 21
第21図　出土石器４ …… 22
第22図　出土石器５ …… 23
第23図　１次・２次調査検出遺構合成図 …… 24

Ⅲ　安養寺配水場前窯跡調査報告書

第24図　調査地点と周辺の地形 …… 33
第25図　出土遺物１ …… 35
第26図　出土遺物２ …… 36
第27図　出土遺物３ …… 37

Ⅳ　杉土手（３次）・北前遺跡（５次）調査報告書

第28図　杉土手・北前遺跡と周辺の遺跡 …… 44
第29図　遺跡周辺の地形と調査地点 …… 45
第30図　杉土手全長想定図 …… 47
第31図　杉土手平面図と調査区配置図 …… 48
第32図　調査区平面図 …… 48
第33図　調査区西壁土層断面図 …… 49
第34図　ＳＤ－１溝跡平面図 …… 51
第35図　ＳＫ－１土坑実測図 …… 51
第36図　基底層土層断面図（深掘りトレンチ西壁） … 52
第37図　出土遺物 …… 52

Ⅴ　押口遺跡（２次）調査報告書

第38図　調査地点と周辺の地形 …… 58
第39図　調査区配置と基本層位 …… 59
第40図　遺構実測図 …… 60
第41図　出土遺物 …… 60

Ⅵ　平治遺跡調査報告書

第42図　調査地点と周辺の地形 …… 64
第43図　調査区配置図 …… 65
第44図　第１・５トレンチ遺構配置図 …… 65
第45図　ＳＩ－２竪穴住居跡・ＳＫ－１土坑実測図 … 66
第46図　出土遺物 …… 66

Ⅶ　高柳遺跡（２次）調査報告書

第47図　調査地点と周辺の地形 …… 70
第48図　検出遺構平面図 …… 71
第49図　調査区土層断面図 …… 71
第50図　溝跡断面図 …… 72
第51図　土坑実測図 …… 72
第52図　出土土器 …… 73
第53図　出土石器 …… 74

Ⅷ　富沢遺跡（100次）調査報告書

第54図　調査地点と周辺の地形 …… 82
第55図　調査区配置図 …… 83
第56図　調査区東壁断面図 …… 84

Ⅸ　安久遺跡（４次）調査報告書

第57図　調査地点と周辺の地形 …… 87
第58図　調査区配置図 …… 88
第59図　竪穴住居跡実測図 …… 89
第60図　出土遺物 …… 90

Ⅹ　陸奥国分尼寺跡確認調査報告書

第61図　調査地点と周辺の地形 …… 94
第62図　調査区配置図 …… 95

第63図　遺構配置図 …… 96
第64図　遺構断面図 …… 97
第65図　出土遺物 …… 98
第66図　陸奥国分尼寺跡建物配置図 …… 99

写　真　目　次

Ⅰ　高屋敷遺跡（2次）調査報告書

図版1　試掘調査第1・2トレンチ、西区全景 …… 10
図版2　東区全景・ＳＩ－1竪穴住居跡 …… 11
図版3　西区土坑・溝跡・その他の遺構 …… 12
図版4　西区その他の遺構・東区掘立柱建物跡・溝跡 … 13

Ⅱ　中在家南遺跡（2次）調査報告書

図版5　調査区全景・2号方形周溝墓 …… 27
図版6　4号方形周溝墓、ＳＤ－3・4、土層断面 … 28
図版7　出土遺物1 …… 29
図版8　出土遺物2 …… 30
図版9　出土遺物3 …… 31
図版10　出土遺物4 …… 32

Ⅲ　安養寺配水場前窯跡調査報告書

図版11　調査状況 …… 40
図版12　出土遺物1（須恵器） …… 41
図版13　出土遺物2（須恵器・瓦） …… 42

Ⅳ　杉土手（3次）・北前遺跡（5次）調査報告書

図版14　杉土手全景 …… 55
図版15　杉土手断面・調査状況・溝跡 …… 56
図版16　土坑　基盤層調査・出土遺物 …… 57

Ⅴ　押口遺跡（2次）調査報告書

図版17　押口遺跡調査状況・出土遺物 …… 63

Ⅵ　平治遺跡調査報告書

図版18　調査区遠景、1・2号竪穴住居跡 …… 68
図版19　2号竪穴住居跡・1号土坑・出土遺物 …… 69

Ⅶ　高柳遺跡（2次）調査報告書

図版20　調査状況・溝跡 …… 77
図版21　調査状況 …… 78
図版22　ＳＫ－1～4土坑 …… 79
図版23　出土遺物1（縄文土器） …… 80
図版24　出土遺物2（石器） …… 81

Ⅷ　富沢遺跡（100次）調査報告書

図版25　調査状況・土層断面 …… 86

Ⅸ　安久遺跡（4次）調査報告書

図版26　1号竪穴住居跡・出土遺物 …… 93

X　陸奥国分尼寺跡確認調査報告書

図版27　調査状況 …… 100
図版28　出土遺物 …… 101

Ⅰ　高屋敷遺跡（２次）調査報告書

１　調査要項

遺跡名	高屋敷遺跡（宮城県遺跡番号　０１４３０）
調査地点	仙台市若林区荒井字高屋敷27－２・27－４
調査原因	仙台市荒井土地区画整理事業に伴う土壌改良工事
調査対象面積	1564㎡
調査面積	375㎡
調査期間	確認調査　平成８年６月３日～６月４日
	本 調 査　平成８年９月２日～９月19日
調査主体	仙台市教育委員会
調査担当	仙台市教育委員会文化財課
担当職員	工藤哲司
調査参加者	相沢　守・秋葉泰徳・鈴木邦彦・鈴木美代子・只野宗一・土井　清・山並明夫・渡辺純子

２　遺跡の位置と環境

高屋敷遺跡は、ＪＲ仙台駅の東南東約５㎞の、仙台市東部に広がる沖積地の中央に位置する。付近は荒井の集落の中心地にあたる。遺跡の標高は５ｍ前後で、東西方向にのびる自然堤防に立地している。遺跡の立地する自然堤防は、東西85ｍ・南北40ｍの狭い範囲が周辺部よりやや高くなっている。遺跡の北側は湿地となっているが、この低地部は中在家南遺跡から押口遺跡へ続くと推定されている旧河道と考えられる。

遺跡の南西200ｍの地点には、弥生時代中期の遺物包含層・土壙墓群、古墳時代前期の方形周溝墓、古墳時代中期の可能性のある竪穴住居跡及び弥生時代中期から中世までの木製品を出土した河川跡の発見された中在家南遺跡がある。また、北西150ｍには弥生時代中期から中世までの木製品を出土した押口遺跡がある。

高屋敷遺跡の調査は、1989年に区画整理街路建設に際して実施され、古墳時代前期から中期にかけての遺物包含層と、古墳時代中期の遺物を出土する多数の土坑などの遺構が検出されている。

３　調査方法

調査にあたっては、事業主体（仙台市）からの発掘通知に基づき、高屋敷27－４と高屋敷27－２西部にそれぞれ試掘第１トレンチ（幅４ｍ・長さ19ｍ）と試掘第２トレンチ（幅４ｍ・長さ20ｍ）を設定して確認調査を実施した。その結果、1989年の１次調査区の西側にあたり、畑地となっている試掘第１トレンチにおいては、前回の調査区から続く遺物包含層と遺構が検出された。これに対して、１次調査区の西側にあたり、旧住宅地に設定した試掘第２トレンチでは、住宅の基礎等の撹乱が深くまで及んでいることが明らかになった。撹乱を除去した面では、幅５～６ｍ・深さ約40㎝の泥炭層が自然堆積する溝状の凹地が検出された。凹地の一部を調査したが遺物は土師器の細片がわずかに出土しただけであった。以上の状況から、高屋敷27－４については本調査を改め実施することにし、高屋敷27－２については本調査は必要ないものと判断した。

高屋敷27－４にかかわる本調査区は、遺跡の南側の境界となっている堀より北側に調査区を設定した。

また、本調査実施中に新たに高屋敷27－２東部の土壌改良工事の通知があったので、この区画にかかわる遺跡範囲についても幅５ｍ・長さ12ｍの調査区を設定して確認調査を実施した。調査区は、全体的に基礎等による撹乱を受け

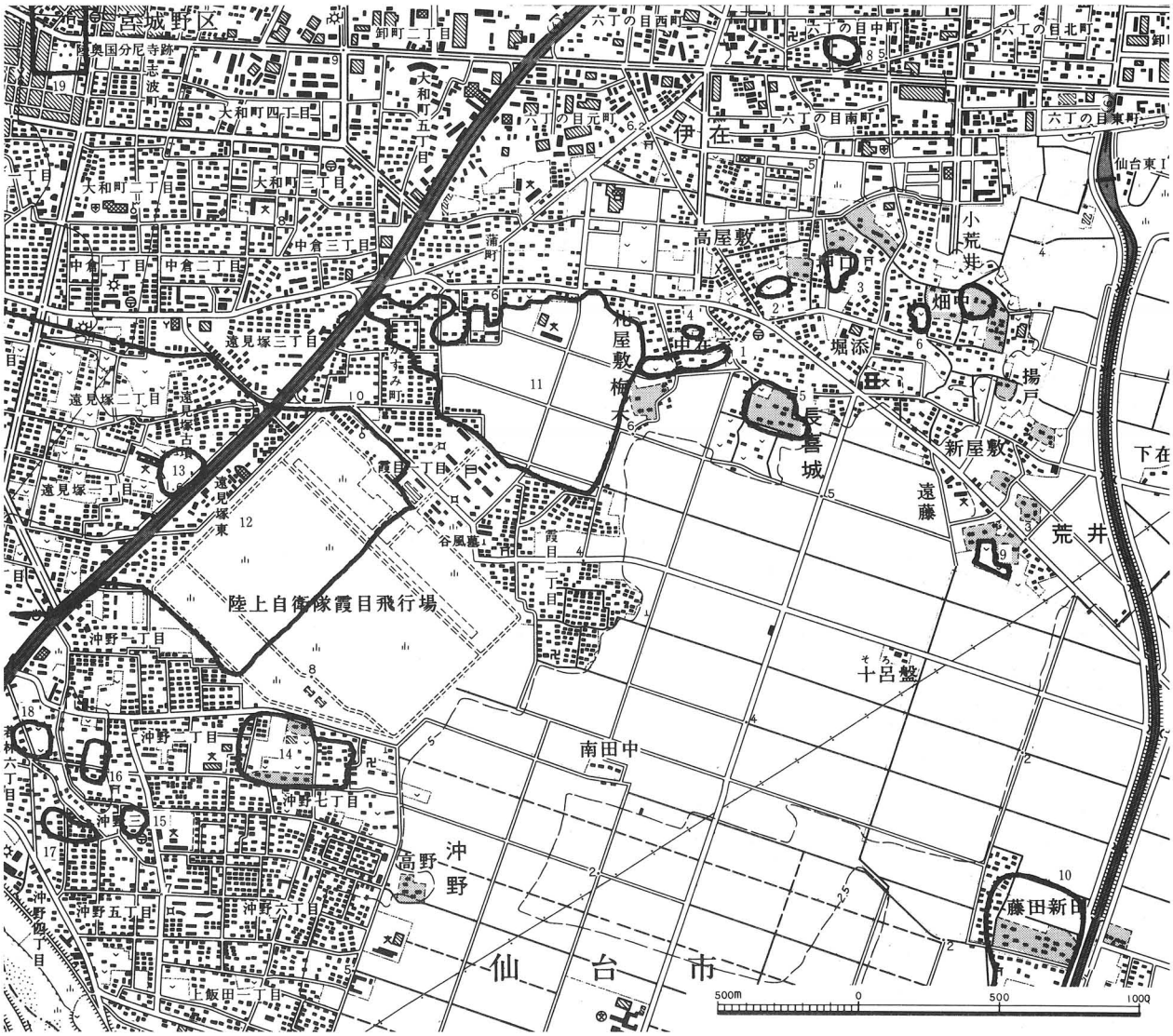
ていたが、撹乱の下面で掘立柱建物跡を含むピット群と溝跡が検出された。この区域については検出された遺構を掘りきって本調査とした。

今回の調査区のうち、本調査を実施した高屋敷27－４にかかわる地区を第２次調査西区、高屋敷27－２東部にかかわる地区を第２次調査東区と呼称した。

4　基本層位

高屋敷遺跡の基本層位は、耕作土からなるⅠ層と、遺物包含層のⅡ層、基盤のⅢ層に大別される。

Ⅰ層の耕作土は、上下２層に細分される。上層（Ⅰａ層）は、暗褐色シルトからなる現耕作土層で、比較的柔らか



番号	遺跡名	立地	時代	番号	遺跡名	立地	時代
1	中在家南遺跡	沖積平野	弥生、古墳、古代、中世、近世	11	仙台東郊条里	沖積平野	古代
2	高屋敷遺跡	自然堤防	古墳、古代	12	南小泉遺跡	自然堤防	弥生、古墳、古代、中世、近世
3	押口遺跡	沖積平野	弥生、古墳、古代、中世、近世	13	遠見塚古墳	自然堤防	古墳
4	中在家遺跡	自然堤防	古代	14	沖野城跡	自然堤防	中世
5	長喜城館跡	自然堤防	中世	15	中柵西遺跡	自然堤防	弥生、古墳、古代
6	荒井畑中遺跡	自然堤防	古墳、古代、中世	16	神柵遺跡	自然堤防	古代
7	荒井館跡	自然堤防	古代、中世、近世	17	砂押Ⅱ遺跡	自然堤防	古墳、古代
8	北屋敷遺跡	自然堤防	古代、中世、近世	18	砂押Ⅰ遺跡	自然堤防	古墳、古代
9	下荒井遺跡	自然堤防	古代	19	陸奥国分尼寺跡	沖積平野	古代
10	藤田新田遺跡	浜堤	弥生、古墳、古代、中世、近世				

第１図　高屋敷遺跡と周辺の遺跡

い。下層（Ⅰｂ層）は、暗褐色粘土質シルトからなる耕作土の下部を構成する層で、締まりが強い。

Ⅱ層は黒色の粘土質シルト層で、古墳時代の土器片を含む。締まりも強い。層厚は10～15cmで、第２次調査西区では調査区の北東部にだけ分布している。第１次調査では、Ⅱ層の形成時期について、出土遺物から古墳時代前期末から中期と解釈されている。

Ⅲ層は、にぶい黄褐色のシルト層で、遺物包含層の分布していない部分の遺構確認面となっている。第１次調査では、Ⅲ層は３層に細分され、層厚は合わせて約60cmある。またⅢ層の下には黄褐色のシルト質粘土層が約20cm（Ⅳ層）、黄褐色およびにぶい黄色の粘土層が60cm以上堆積していることが確認されている。

5　第２次調査西区発見遺構と出土遺物

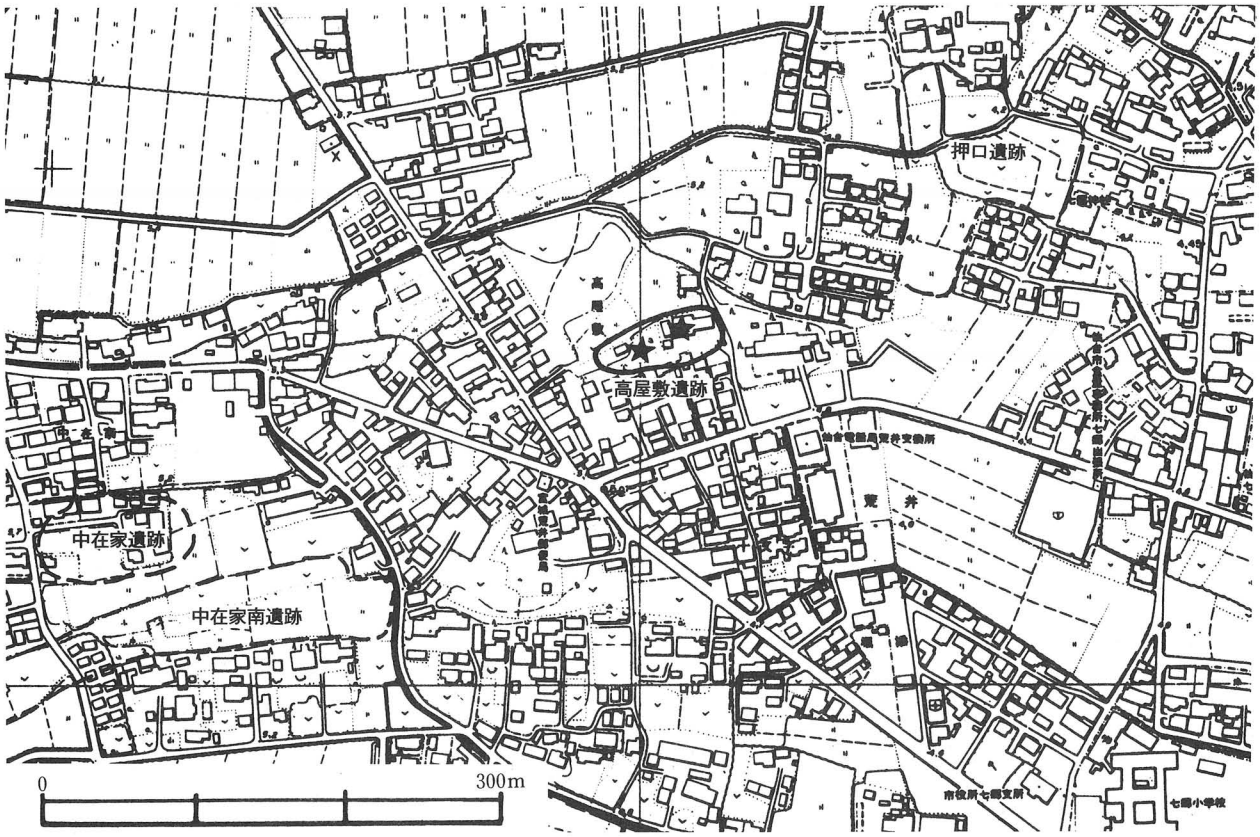
西区は、南半分が墓地の改葬の際の掘削による撹乱を受けている。残りの北側で遺物包含層と竪穴住居跡１棟・土坑２基・溝跡１条・その他の遺構３基・ピット６個が検出された。

１）遺物包含層

遺物包含層は西区の北東部に、東西6.5m・南北３mの範囲に分布する。層厚は10～15cmで、南側と西側方向に薄くなる。ＳＩ－１竪穴住居跡に切られている。今回の検出範囲からの出土遺物は少なく、弥生土器片４点と土師器片８点があるだけである。

２）竪穴住居跡

ＳＩ－１竪穴住居跡　遺物包含層と遺物包含層の下で検出されたＳＫ－２を切っている。上部は耕作による削平を受けており、壁面は全体的に４～５cmの高さで残っているだけである。平面形は方形を呈し、北東辺の方向はＮ－27°－Ｗである。北西から南東方向の軸長は450cm、北東から南西方向の軸長は413cm、床面積17.2㎡を測る。



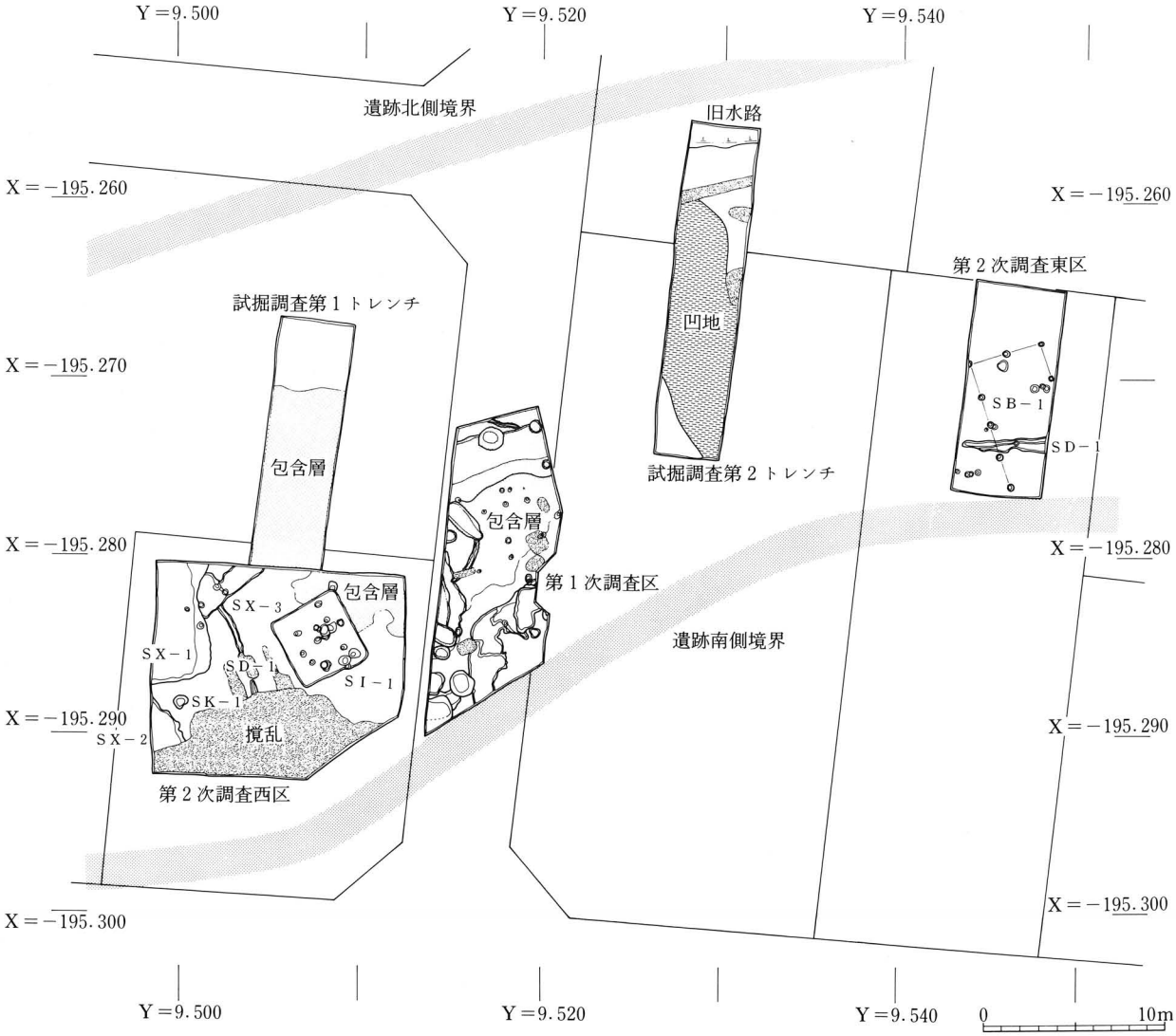
第２図　調査地点と周辺の地形

堆積土は、３層に分けられた（１～３層）。１層は灰白色土を霜降り状に含む黒褐色シルト層で床面を覆うように広く堆積する。焼土を含む黒色シルトの２層と、同じく焼土を含む黒褐色シルトの３層は、住居跡の中央北西寄りに部分的に分布している。

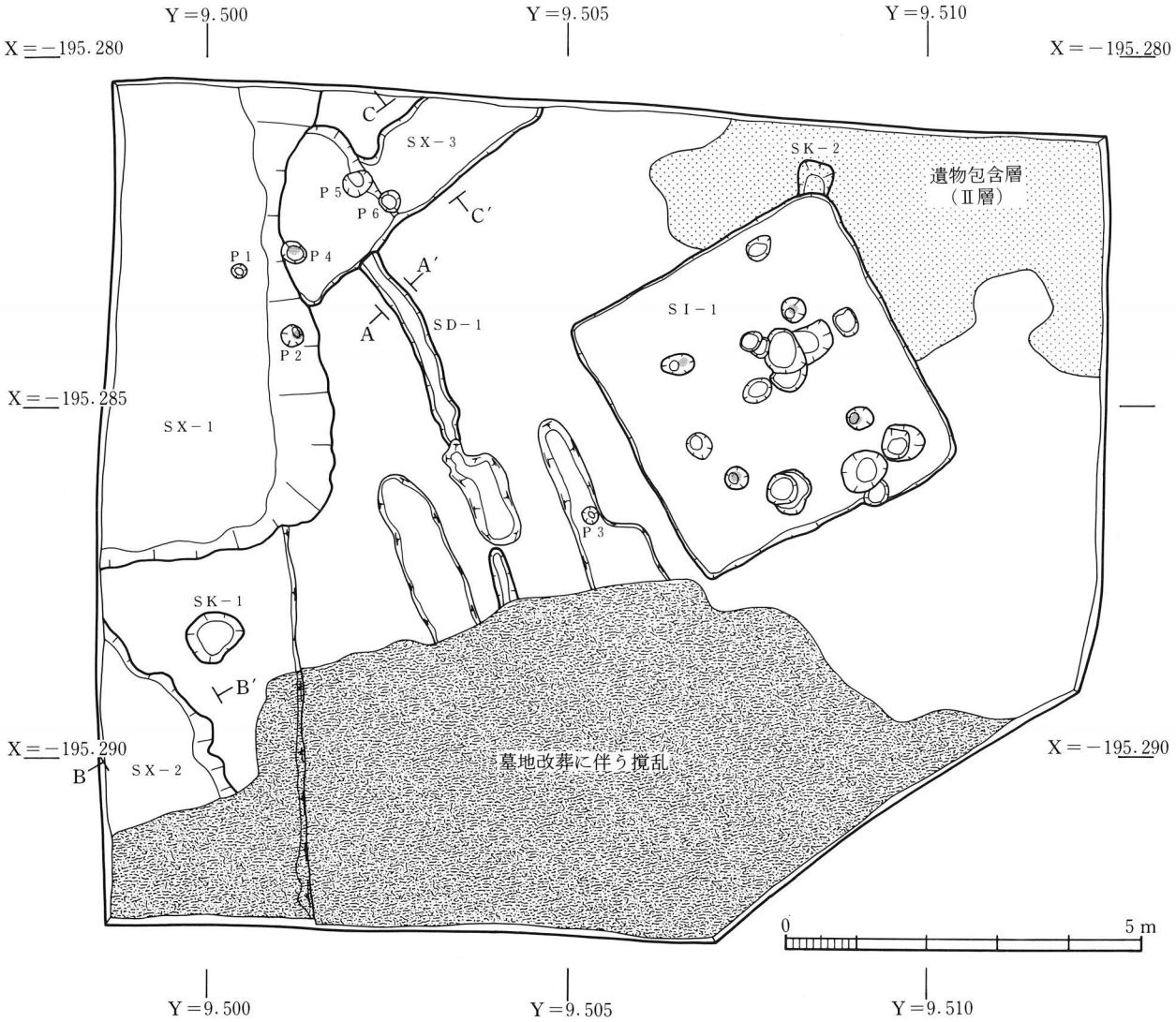
壁面は、各面ともほぼ直線的にのび、各角は直角に交わる。壁の立ち上がりは急である。床面は比較的平坦である。北西の壁面中央近くの住居床面から焼土のブロックが検出されている。この焼土が、カマドの痕跡であるかどうかは不明である。炉の痕跡は発見されなかった。床面の東側のコーナー付近を除く壁際は、溝状に掘り下げられ基本層Ⅲ層がブロックとなって堆積している（４・５層）。この部分については、住居の堀方とその埋戻しにかかわる土層と考えられる。

柱穴は、対角線上の各コーナー付近に位置して４個検出された（Ｐ１・２・３・４）。柱間間隔は北西辺が172㎝、南東辺が184㎝、北東辺が182㎝、南西辺が182㎝である。壁面から柱までの距離は北西側が116～132㎝、北東側が104～107㎝、南東側が105～118㎝、南西側が110㎝あり、北西辺が他の辺から比べるとやや離れている。柱穴の掘方は、長軸35～50㎝の円形ないし楕円形で、床面からの深さは35～40㎝である。柱痕跡は、直径15㎝前後の円形である。

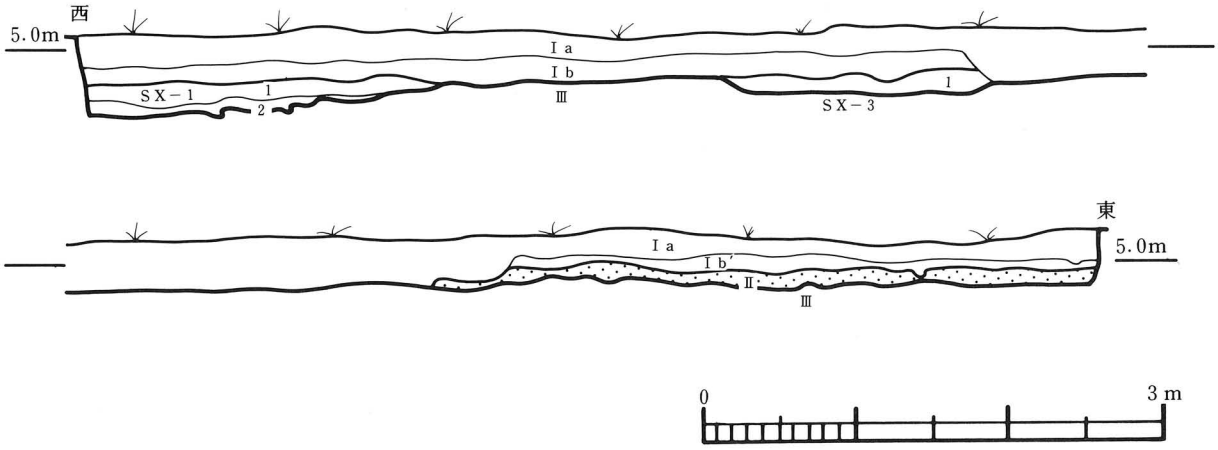
住居内における柱穴以外の遺構としては、７個のピットと５基の土坑がある。これらの遺構は柱穴で囲まれた範囲



第３図　第１次・２次調査検出遺構合成図



第４図　西区遺構配置図



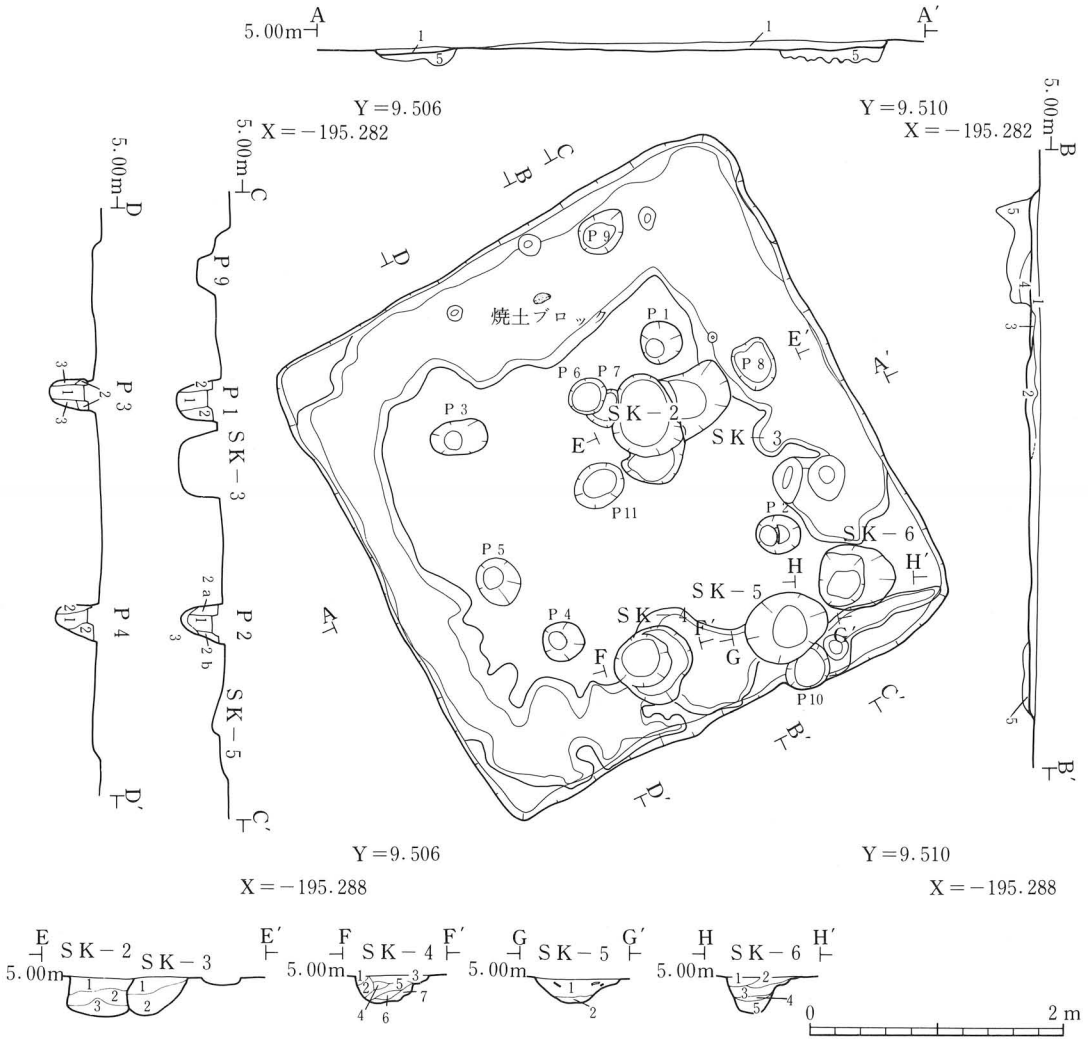
層 No.	土　色	土　質	そ の 他
Ⅰa	10YR3/3 暗　褐　色	シルト	耕作土（現代）
Ⅰb	10YR3/4 暗　褐　色	粘土質シルト	耕作土下部　しまり強い、西部ほど明るい
Ⅰb′	10YR2/2 黒　褐　色	粘土質シルト	耕作土下部　しまり強い
SX－1　1	10YR2/3 黒　褐　色	粘土	灰黄褐色粘土を霜降状に含む

層 No.	土　色	土　質	そ の 他
SX－1　2	10YR4/2 灰 黄 褐 色	粘土	酸化鉄を斑状に含む、にぶい黄橙色粘土質シルトのブロックを含む
SX－3　1	10YR2/3 黒　褐　色	粘土	灰黄褐色粘土・にぶい黄橙色粘土のブロックを含む
Ⅱ	10YR1/2 黒　　色	粘土質シルト	土器片を少量含む、しまり強い
Ⅲ	10YR5/4 にぶい黄褐色	シルト	管状の酸化鉄を含む

第５図　西区北壁土層断面図

の北東寄りの部分（ＳＫ－２・３，Ｐ６・７・８・11）と、南東壁と南東側の柱列の間（ＳＫ－４・５・６，Ｐ10）の２か所に集中している。

遺物は、１層中から土師器坏（第７図２）はじめ、多数の土師器が出土しているが、床面からの出土遺物は少なく、出土した破片も甕の体部（第７図３など）がほとんどである。ＳＫ－４からは坏が１点（第７図１）出土している。１の坏は小型で、平らな底部から口縁部まで内湾して立ち上がるもので、内外面ともヘラミガキ調整されているが、



層	No.	土色	土質	その他
ＳＩ－１	1	10ＹＲ2/2 黒褐色	シルト	灰白色土を霜降状に含む
	2	10ＹＲ2/1 黒色	シルト	明赤褐色の焼土粒を少量含む、酸化鉄を少量含む
	3	7.5ＹＲ3/1黒褐色	シルト	橙色の焼土粒を少量含む
	4	10ＴＲ2/3 黒褐色	シルト	下面に灰が分布、灰黄褐色土と橙色土を含む
	5	10ＹＲ2/2 黒褐色	シルト	黄橙色と灰黄褐色土を多量に含む、掘り方埋土
Ｐ１	1	10ＹＲ2/2 黒褐色	シルト	にぶい黄褐色土を霜降状に含む
	2	10ＹＲ5/3 にぶい黄褐色	シルト	黒色土と黄色橙色を含む
Ｐ２	1	10ＹＲ2/2 黒褐色	シルト	黄橙色土を少量含む
	2ａ	10ＹＲ5/3 にぶい黄褐色	シルト	黒色土と黄色土を含む
	2ｂ	10ＹＲ5/3 にぶい黄褐色	シルト	黄色土を少量含む
	3	10ＹＲ5/3 にぶい黄褐色	砂質シルト	黒色土を含む
Ｐ３	1	10ＹＲ2/2 黒褐色	シルト	にぶい黄褐色土をわずかに含む
	2	10ＹＲ2/3 黒褐色	シルト	灰褐色土と黄橙色土を含む
	3	10ＹＲ5/2 灰黄	砂質シルト	黄橙色土を少量含む
Ｐ４	1	10ＹＲ2/2 黒褐色	シルト	にぶい黄褐色のブロックを含む
	2	10ＹＲ5/3 にぶい黄褐色	砂質シルト	黄橙色土と黒色土を含む

層	No.	土色	土質	その他
ＳＫ－２	1	10ＹＲ2/2 黒褐色	シルト	酸化鉄を含む
	2	10ＹＲ2/2 黒褐色	シルト	大粒の酸化鉄を含む
	3	10ＹＲ2/1 黒色	シルト	灰黄褐色土を霜降状に含む
ＳＫ－３	1	10ＹＲ2/3 黒褐色	シルト	にぶい黄褐色土と酸化鉄を含む
	2	10ＹＲ5/3 にぶい黄褐色	シルト質粘土	黒色土と少量の酸化鉄を含む
ＳＫ－４	1	10ＹＲ3/2 黒褐色	シルト質粘土	褐色土のブロックを含む
	2	10ＹＲ5/4 にぶい黄褐色	粘土質シルト	黒褐色粘土を含む
	3	10ＹＲ2/2 黒褐色	粘土質シルト	にぶい黄橙色シルトのブロックを含む
	4	10ＹＲ2/2 黒褐色	シルト質粘土	黄橙色土を多く含む
	5	10ＹＲ2/2 黒褐色	シルト質粘土	にぶい黄橙色シルトのブロックを含む
	6	10ＹＲ3/3 暗褐色	粘土質シルト	にぶい黄橙色シルトのブロックを含む
	7	10ＹＲ5/3 にぶい黄褐色	砂質シルト	黒褐色土とにぶい黄橙色土のブロックを含む
ＳＫ－５	1	10ＹＲ2/2 黒褐色	シルト質粘土	にぶい黄橙色シルトのブロックを含む
	2	10ＹＲ5/3 にぶい黄褐色	粘土質シルト	にぶい黄橙色土を少量霜降状に含む
ＳＫ－６	1	10ＹＲ2/3 黒褐色	シルト質粘土	にぶい黄橙色シルトのブロックを含む
	2	10ＹＲ2/3 黒褐色	シルト質粘土	
	3	10ＹＲ4/3 にぶい黄褐色	シルト質粘土	にぶい黄橙色のシルトを霜降状に含む
	4	10ＹＲ6/3 にぶい黄橙色	シルト	
	5	10ＹＲ2/3 黒褐色	粘土	にぶい黄橙色シルトのブロックを含む

第６図　ＳＩ－１竪穴住居跡

前段階の調整が粗いために粘土の継ぎ目が残っている。２の坏は、口縁を欠損するが、残存部の状況から外反する口縁が付くと判断される。表面は摩滅しているが、外面にわずかにヘラミガキの痕跡が残る。３は球形の体部に外反する口縁が付く甕で、口縁部は内外面ともヘラナデ、体部は外面ナデ・内面ヘラナデ調整される。

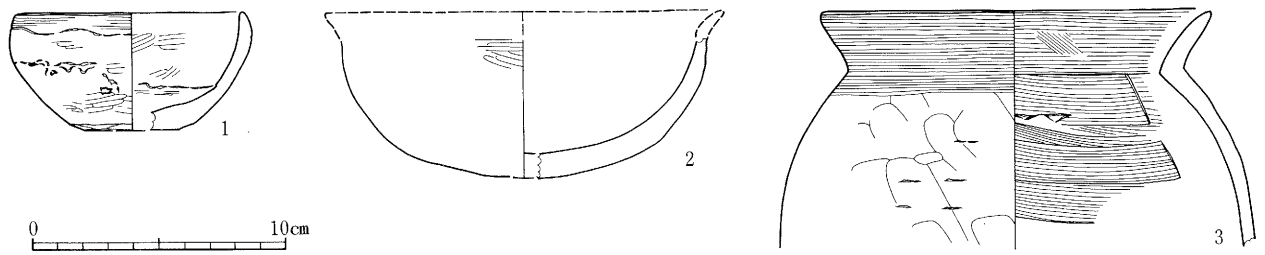
３）土　坑

ＳＫ－１土坑　調査区の南東部で検出された。他の遺構との重複はない。平面形は東西80cm・南北74cmの不整な円形を呈する。深さは約20cmで、断面形は舟底形である。堆積土は大別４層・細別５層に分けられ、上部は褐灰色土を主体とし、底面付近は黒色土となっているが、各層とも自然堆積層と判断される。遺物は土師器坏の細片が３点出土している。

ＳＫ－２土坑　遺物包含層を除去した面で検出され、南側をＳＩ－１に切られている。現存の平面形は残存長軸53cm・短軸47cmの隅丸長方形を呈する。深さは約17cmで、断面形はＵ字形である。堆積土は黒褐色シルト層１層である。遺物は土師器の破片が６点出土している。

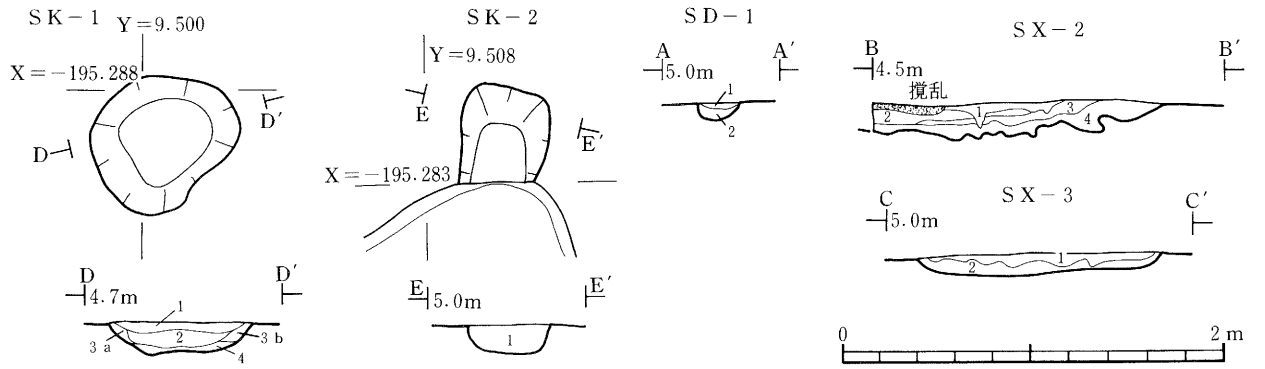
４）溝　跡

ＳＤ－１溝跡　調査区の中央やや西側で検出され、北側をＳＸ－３に、南側と途中を撹乱により切られている。検出部の全長は5.3mを測る。北部が西側に湾曲しているが、溝の軸方向はＮ－22°－Ｗである。幅は25～30cmで深さは約10cmである。断面形は舟底形を呈する。堆積土は２層に分けられ、上部が黒褐色の粘土質シルト、下部が黄褐色の



図中番号	登録番号	種別・器種	出土地区	基本層位	出土遺構・層	取上番号	器高・長	口径・幅	底径・厚	重量	特徴	写真図版
1	C－3	非ロクロ土師器　坏			ＳＩ－１　ＳＫ－４		(4.7)	8.9	3.7		外面口縁ヨコナデ、体部ヘラミガキ、内面ヘラミガキ	2－3
2	C－1	非ロクロ土師器　坏			ＳＩ－１　１層		(5.6)					2－3
3	C－2	非ロクロ土師器　甕			ＳＩ－１　床面		(9.5)	15.3			体部外面ナデ、内面ヘラナデ	2－3

第７図　ＳＩ－１竪穴住居跡出土遺物



層 No.	土色	土質	その他
ＳＤ－１　１	10ＹＲ3/2 黒褐色	粘土質シルト	酸化鉄を含む
2	10ＹＲ5/6 黄褐色	シルト	黒褐色土をブロック状に含む
ＳＫ－１　１	10ＹＲ4/1 褐灰色	シルト	明褐色土を少量ブロック状に含む炭化物粒を含む
2	10ＹＲ4/1 褐灰色	粘土	黄褐色土を縞状に含む
3 a	10ＹＲ4/1 褐灰色	粘土	淡黄色土をブロック状に含む
3 b	2.5Y4/1 黄灰色	粘土質シルト	炭化物粒を少量含む
4	5Y2/1 黒色	粘土	淡黄色土・酸化鉄を少量含む
ＳＫ－２　１	10ＹＲ2/2 褐色	シルト	にぶい黄褐色土と黄橙色土を霜降状に含む

層 No.	土色	土質	その他
ＳＸ－２　１	2.5Y4/1 黄灰色	粘土	黒褐色土をブロック状に含む
2	10ＹＲ4/1 褐灰色	粘土質シルト	黒褐色土・酸化鉄を少量含む
3	10ＹＲ1.7/1黒色	粘土	黒褐色土をブロック状に多量に含む
4	2.5Y7/3 浅黄色	粘土質シルト	黄灰色土をブロック状に含む
ＳＸ－３　１	10ＹＲ3/3 暗褐色	シルト	黒褐色土・灰白色土をブロック状に含む
2	10ＹＲ3/4 暗褐色	粘土質シルト	黒色土・褐灰色土をブロック状に含む

第８図　土坑・溝跡・その他の遺構

シルトである。遺物は１層中から土師器片７点と弥生土器片が１点出土している。

５）その他の遺構

ＳＸ－１遺構　調査区の北西部で遺構の南東隅が検出された。検出部で、南北6.9m・東西3.2mを測る。ＳＸ－３遺構を切っている。東辺の軸方向はＮ－４°－Ｗである。検出面からの深さは、北部と南部が約20cm、中央部が35cmである。壁面の立ち上がりは緩やかである。堆積土は２層に分けられ、上部が灰黄褐色粘土を霜降状に含んだ黒褐色粘土層、下部がⅢ層起源のにぶい黄橙色シルトのブロックを含む灰黄褐色粘土層である。１層の土壌は、水田の耕作土に類似した特徴が認められる。また、２層も水田の起耕に起因する土層と考えられるので、この遺構については、水田跡の可能性が強いものと判断される。出土遺物はない。

ＳＸ－２遺構　調査区の南西部で検出された。遺構の南部は撹乱坑に切られ、西部から北部は調査区の外にのびている。全体の形状は不明で、東側の一部が検出された。検出された東側の壁面は凹凸が著しい。底面も凹凸が著しいが、全体として断面形は舟底形に湾曲している。深さは18cmほどで、堆積土は４層に分けられる。遺物は土師器の破片が11点出土している。

ＳＸ－３遺構　北東から南西方向にのびる遺構で、西部はＳＸ－１遺構に切られ、北部は調査区の外にのびる。検出部の北西半分は幅120cm・深さ約10cmの溝状を呈するが、南東半分は北側に広がって幅200cmとなり、その境目から南西側が約15cm低くなり、段差ができている。堆積土は２層に分けられ、１層は黒褐色土と灰白色土のブロックを含む暗褐色のシルト層、２層は黒色土と褐灰色土のブロックを含む暗褐色の粘土質シルト層である。遺物は土師器片が１層中から111点と２層中から15点出土している。

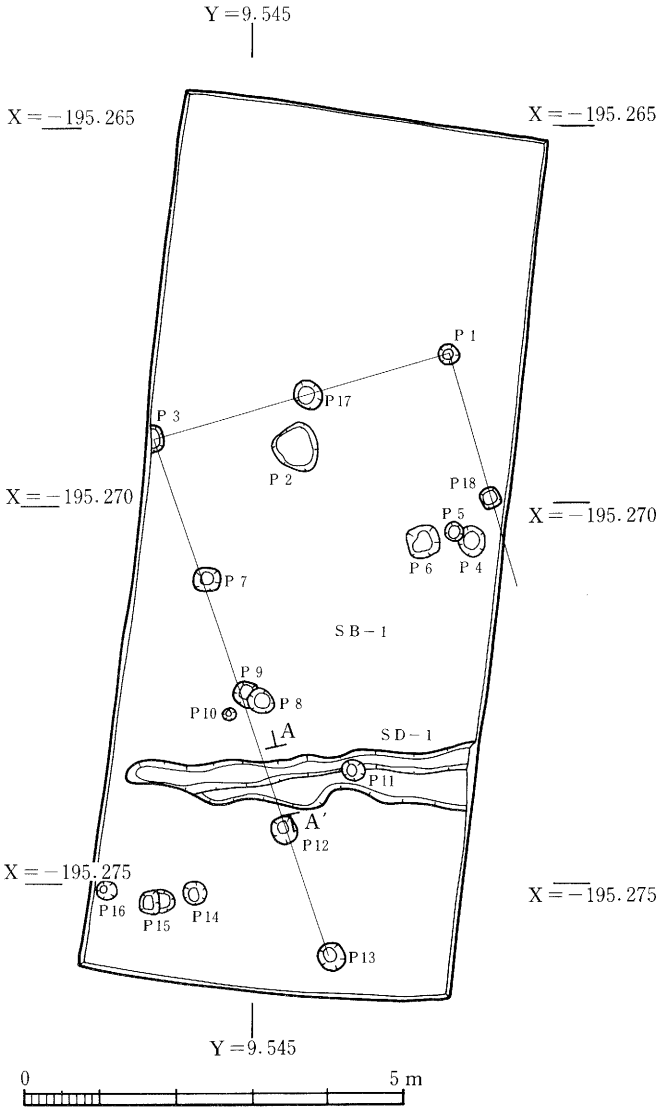
以上の遺構の他に調査区の北西部を中心にピットが６個検出されている。Ｐ２・４には柱痕跡もあるが、建物となるかどうかは不明である。

６　第２次調査東区発見遺構と出土遺物

東区は、住宅建築や植栽による撹乱を受けていたが、掘込みの深かった遺構が幾つか検出された。検出遺構には掘立柱建物跡１棟・溝跡１条・ピット10個がある。

１）掘立柱建物跡

ＳＢ－１掘立柱建物跡　検出部は、Ｐ１・３・７・９・12・13・17・18の８個のピットで構成される。ＳＤ－１と直接の切り合いはないが、重複関係にある。南北４間以上、西側検出部総長726cm（柱間寸法162～197cm・平均182cm）、東西２間、北側総長402cm（柱間寸法195～207cm・平均201cm）

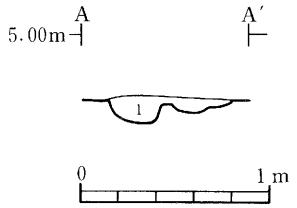


第９図　東区遺構配置図

の南北棟建物で、南北柱列の方向は西側柱列でＮ－18°－Ｗである。柱穴は直径35cm前後の円形ないし１辺35cm前後の隅丸方形である。柱痕跡は明らかでない。柱穴の深さは検出面から40～50cmであるが、調査区東壁断面におけるＰ３の掘方の観察によれば、掘り込み面からの深さは約70cmある。遺物は、Ｐ３から土師器片が１点出土しているが、遺構との関係は不明である。

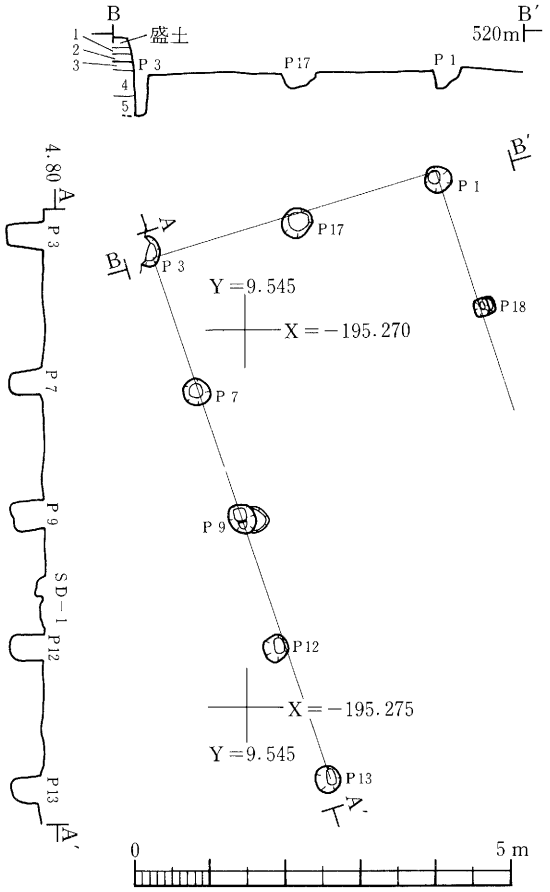
２）溝　跡

ＳＤ－１溝跡　調査区の南部を東西に横断する。西側は浅くなって立ち上がり、東側は調査区の外にのびる。溝の掘り込みは２段になっており、北側が１段低い。幅は断面実測位置で65cm、深さは北側で14cmである。堆積土は、基盤層（Ⅲ層）が起源と観察されるにぶい黄橙色土を多量に含む黒褐色シルト１層である。遺物は、土師器の甕または壺の体部片が９点出土している。



層 No.	土　色	土　質	そ　の　他
1	10YR3/1 黒　褐　色	シルト	にぶい黄橙色土を含む、酸化鉄を含む

第11図　西区ＳＤ－１断面図



層 No.	土　色	土　質	そ　の　他
1	10YR3/3 暗　褐　色	シルト	畑耕作土
2	10YR2/2 黒　褐　色	粘土質シルト	旧表土
3	10YR4/1 褐　　色	粘土質シルト	柱穴埋土１　明黄褐色土を斑状に含む
4	10YR3/1 黒　褐　色	粘土質シルト	〃　２　灰白色土をブロック状に含む
5	10YR1.7/1黒　　色	粘土	〃　３　酸化鉄を含む

第10図　ＳＢ－１掘立柱建物跡実測図

7　調査成果のまとめ

①　今回の調査では、竪穴住居跡１棟・掘立柱建物跡１棟・土坑２基・溝跡２条・ピット16個・その他の遺構３基の遺構が発見された。

②　西区の調査から、１次調査区の西側の畑地は、耕作による削平が浅く、比較的遺構の保存状況が良好なことが明らかになった。

③　試掘調査第２トレンチおよび東区の調査から、１次調査区の東側の旧宅地は、基礎掘削や樹木の植栽による攪乱を受け、遺物包含層や掘り込みの浅い遺構は既に削平されていることが明らかになった。ただし、掘立柱建物跡等掘り込みの深い遺構は残存している可能性があることが明らかになった。

④　ＳＩ－１竪穴住居跡は、出土土師器が南小泉式の特徴を有することから、古墳時代中期に位置付けられる。

⑤　竪穴住居跡以外の遺構については、古墳時代の土師器等を出土しているが、所属時期は明らかでない。

参考文献

氏家和典（1957）：「東北土師器の型式分類とその編年」『歴史』第14輯　東北史学会

加藤道男（1989）：「宮城県における土師器研究の現状」『考古学論叢Ⅱ』芹沢長介先生還暦記念論文集刊行会編

藤沢　敦（1992）：「引田式再論」『歴史』第79輯　東北史学会

1　試掘調査第１トレンチ

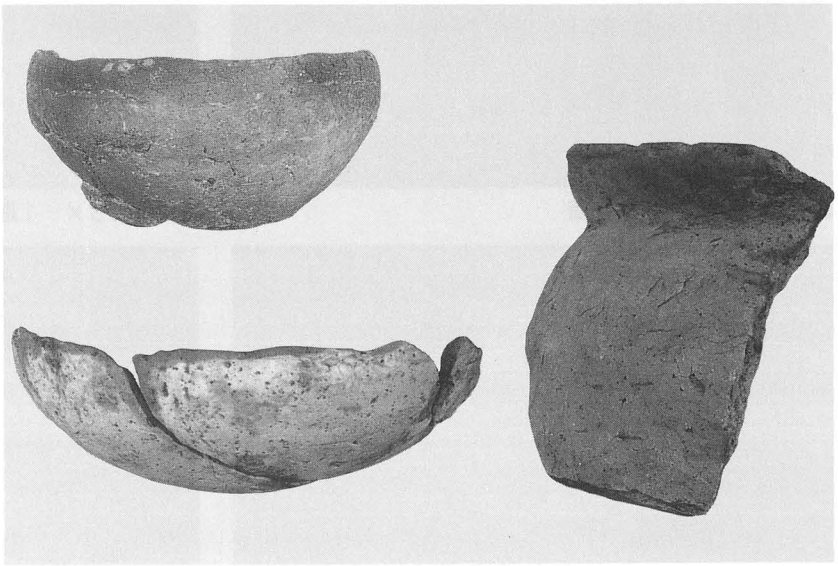
2　試掘調査第２トレンチ

3　西区全景

図版１　試掘調査第１・２トレンチ、西区全景

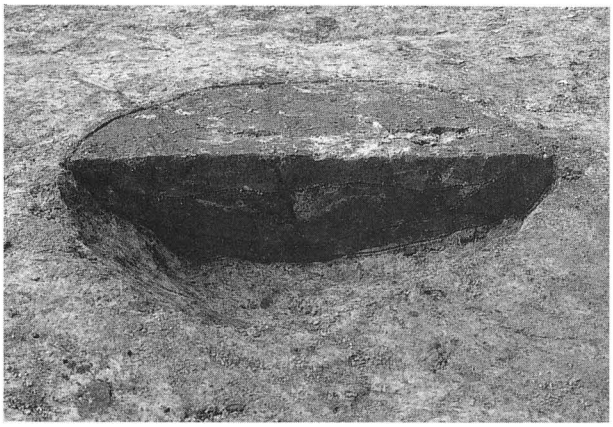
1　東区全景（ピンがＳＢ－１）

2　ＳＩ－１竪穴住居跡

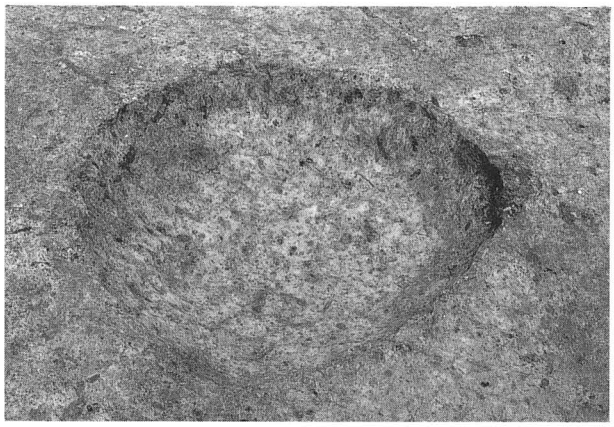


3　ＳＩ－１出土土器

図版２　東区全景・ＳＩ－１竪穴住居跡

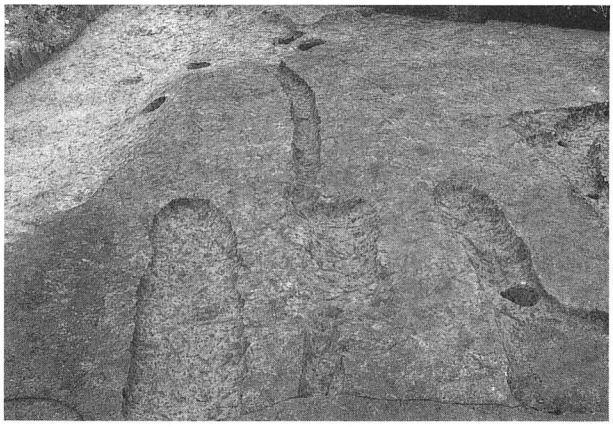


1　西区ＳＫ－１土坑断面

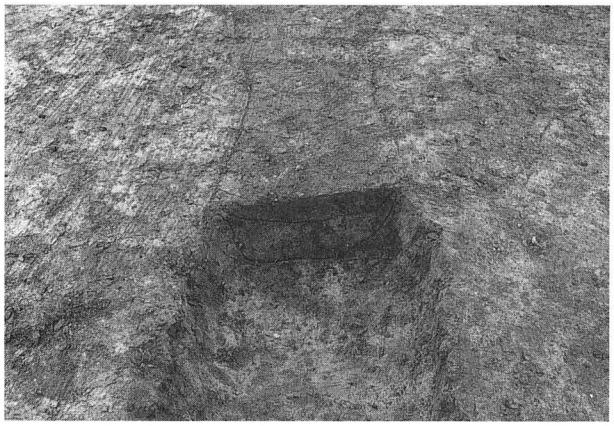


2　西区ＳＫ－１土坑全景

3　西区ＳＫ－２土坑全景



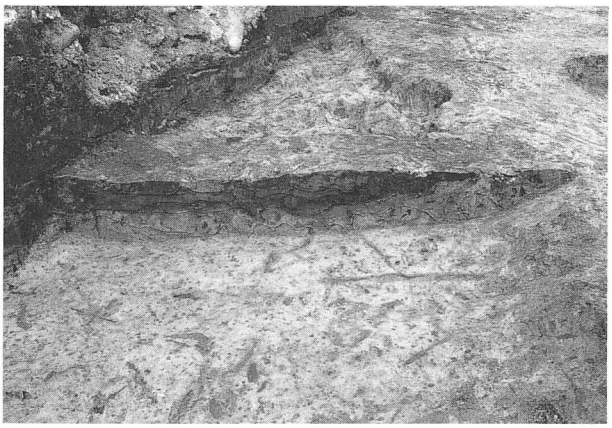
4　西区ＳＤ－１溝跡



5　西区ＳＤ－１溝跡断面

6　西区ＳＸ－１遺構全景

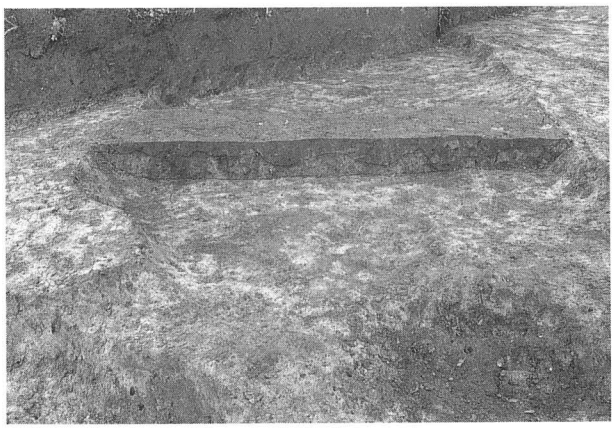
7　西区ＳＸ－２遺構全景



8　西区ＳＸ－２遺構断面

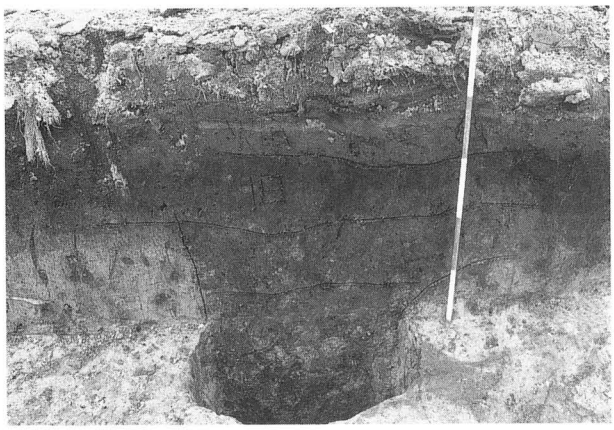
図版３　西区土坑・溝跡・その他の遺構

1　西区ＳＸ－３遺構全景



2　西区ＳＸ－３遺構断面

3　西区ＳＢ－１掘立柱建物跡



4　西区ＳＢ－１柱穴断面（Ｐ３）

5　西区ＳＤ－１溝跡全景

図版４　西区その他の遺構・東区掘立柱建物跡・溝跡

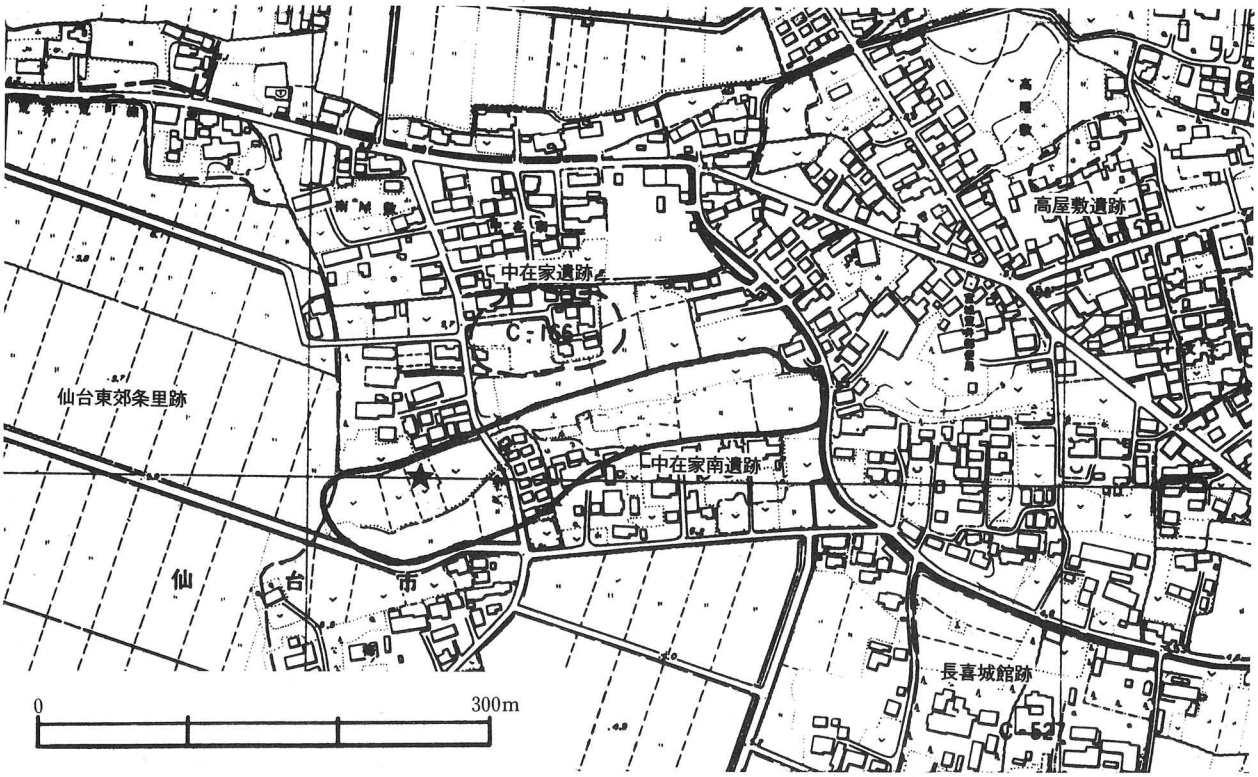
Ⅱ　中在家南遺跡（２次）調査報告書

1　調査要項

遺跡名	中在家南遺跡（宮城県遺跡番号　０１４２７）
調査地点	仙台市若林区荒井字札屋敷57番地
調査原因	仙台市荒井土地区画整理事業に伴う住宅建築
調査対象面積	275㎡
調査面積	170㎡
調査期間	平成８年６月３日～６月20日
調査主体	仙台市教育委員会
調査担当	仙台市教育委員会文化財課
担当職員	工藤哲司　　竹田幸司
調査参加者	相沢　守・伊勢みつ・岡　まり子・菅家婦美子・小池房子・高橋ヨシ子・牧　かね子・山並明夫・渡辺純子

2　遺跡の位置と環境

中在家南遺跡は、ＪＲ仙台駅の東南東約５㎞の、仙台市東部に広がる「宮城野海岸平野」と呼ばれる沖積地の中央に位置する。荒井の集落が形成されている自然堤防群の西南部にあたり、遺跡の西側には仙台東郊条里跡に登録されている低地が、また南側にも広大な後背湿地が広がっている。遺跡は、長さ350m・幅20～40mで東西方向にのびる自然堤防と、その南側に沿う旧河道に渡って存在する。自然堤防は標高5.5mから5.3mで、主に畑地となっている。

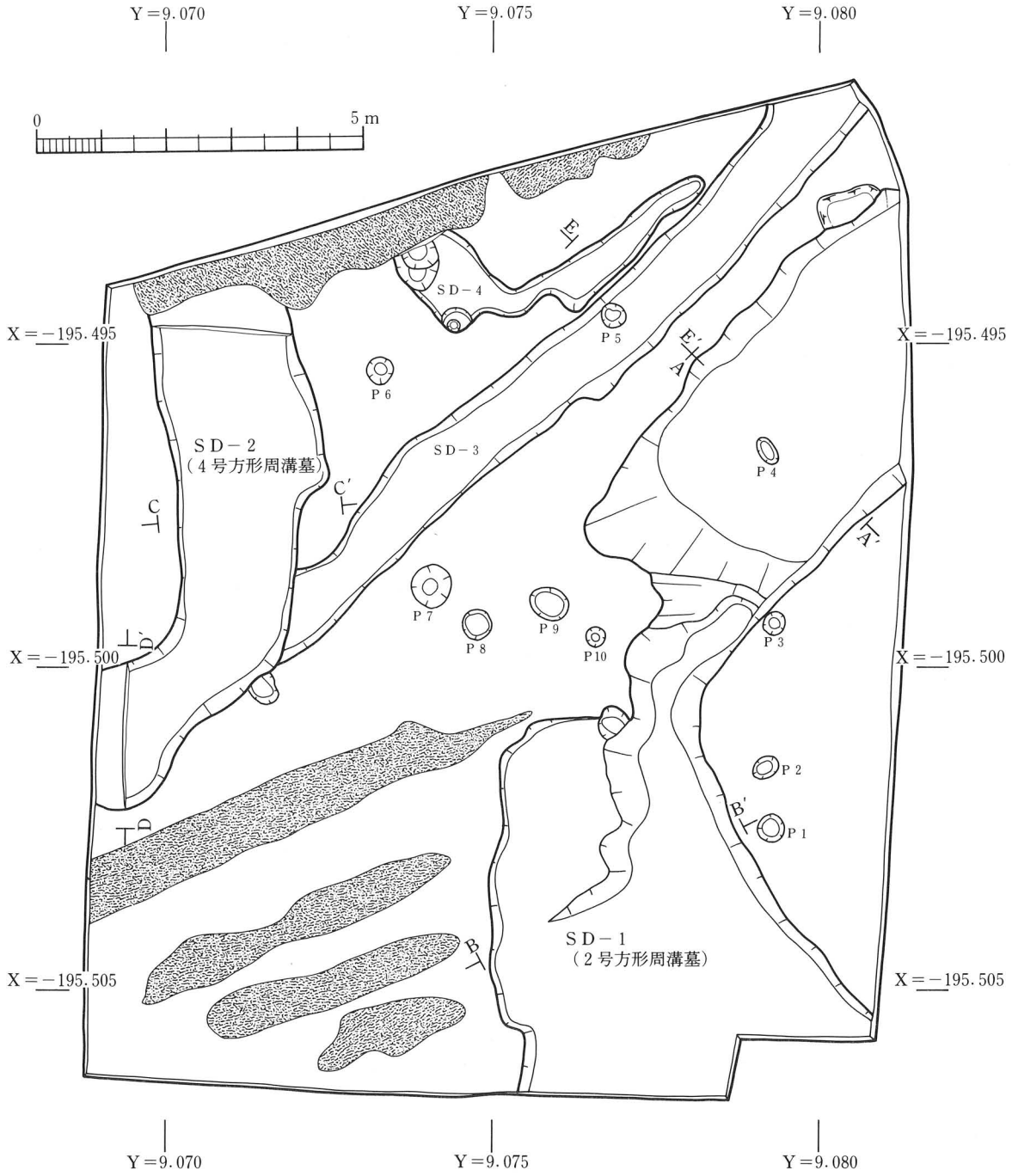


第12図　調査地点と周辺の地形

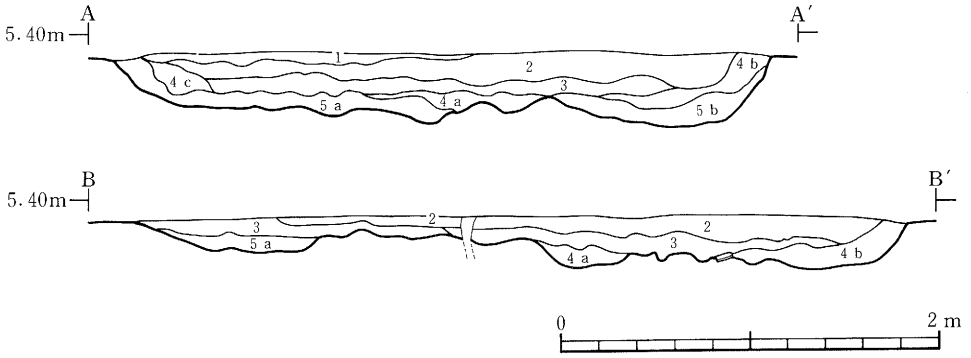
旧河道は自然堤防面から50cm程低く、水田として利用されていた。

遺跡の北東200mの地点には、古墳時代前期から中期の遺物包含層や今年の調査で古墳時代中期の竪穴住居跡などが発見された高屋敷遺跡があり、北西500mには弥生時代中期から中世までの木製品を出土し、中在家南遺跡の旧河道が続くと考えられる押口遺跡がある。

中在家南遺跡は、1988・1989・1992・1993年に区画整理街路建設に際してⅠ区からⅨ区までの調査が実施されている。その結果自然堤防上では、古墳時代前期の方形周溝墓が、遺跡西端部のⅦ区で２基と中央部のⅤ区で１基の合計３基発見されている。また、遺跡東端部では弥生時代中期の土壙墓５基と土器棺墓２基などの遺構が発見されている。旧河道は、幅25m前後・深さ2.5mほどで、16層に大別された堆積土層からは弥生時代前期から近世までの遺物が出



第13図　遺構配置図



層 No.	土　色	土　質	そ の 他	層 No.	土　色	土　質	そ の 他
1	10YR2/2 黒　褐　色	シルト		4 b	10YR2/2 黒　褐　色	粘土質シルト	にぶい黄橙色シルト質粘土を斑状に含む
2	10YR3/2 黒　褐　色	シルト	酸化鉄を多く含む	4 c	10YR3/1 黒　褐　色	粘土質シルト	灰黄褐色粘土質シルトを小ブロック状に含む
3	10YR2/2 黒　褐　色	粘土質シルト	土器片・酸化鉄・炭化物を少量含む	5 a	10YR6/3 にぶい黄橙色	砂質シルト	黒褐色粘土質シルトをブロック状に含む
4 a	10YR2/2 黒　褐　色	粘土質シルト	にぶい黄褐色砂質シルトをブロック状に含む	5 b	10YR6/3 にぶい黄橙色	シルト質粘土	下部ににぶい黄橙色砂質シルトを含む

第14図　ＳＤ－１（２号方形周溝墓）土層断面図

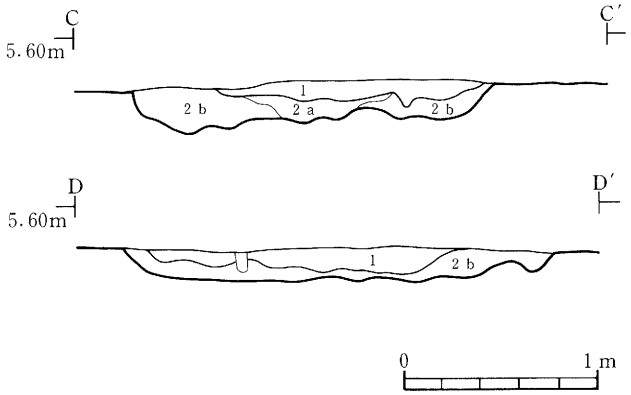
土している。特に弥生時代中期から古墳時代中期の地層からは、木製品をはじめとする多くの遺物が出土している。

今回の調査地点の南側と東側の区画整理街路は、１次調査ではⅦ区として調査され、弥生時代の遺物包含層や古墳時代前期の小溝状遺構と２基の方形周溝墓などが検出されている。またⅦ区の南側の旧河道では、主に弥生時代中期の土器・石器・木製品・骨角器・自然遺物、および古墳時代前期の木製品などの遺物が多量に出土している。

3　調査方法

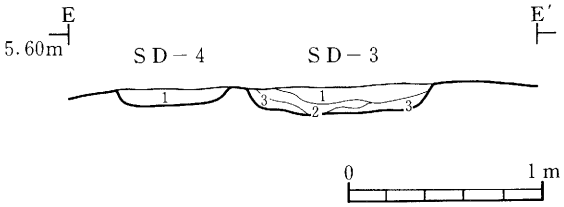
今回の調査は、区画整理事業に関連して、遺跡範囲外に土地を所有していた地権者が遺跡内に換地を受け、かつ、一般の個人専用住宅における基礎工法では、表土の薄い当該地の地下遺構に影響を及ぼすと判断されたために市関連事業として調査を実施した。

調査区は、敷地の境界から約１ｍ内側に設定し、耕作土を重機で排除した後、人力により遺構の検出を行った。調査地点は、１次調査のⅦＢ区の北側に接しており、中在家南遺跡２号方形周溝墓の北西部が検出されることが期待された。Ⅶ区の調査では、耕作土の下層に弥生時代に形成された遺物包含層（Ⅱ層）が存在したが、今回の調査区に



層 No.	土　色	土　質	そ の 他
1	10YR3/2 黒　褐　色	シルト質粘土	酸化鉄を斑状に含む
2 a	10YR3/1 黒　褐　色	粘土	にぶい黄橙色粘土を斑状に含む
2 b	10YR5/2 灰　黄　色	粘土	にぶい黄橙色粘土及び黒褐色粘土を霜降状に含む

第15図　ＳＤ－２（４号方形周溝墓）土層断面図



層 No.	土　色	土　質	そ の 他
SD－3　1	10YR4/2 灰 黄 褐 色	シルト質粘土	にぶい黄橙色粘土を霜降状に含む
2	10YR2/2 黒　褐　色	粘土	
3	10YR4/2 灰 黄 褐 色	粘土	にぶい黄橙色粘土のブロックを含む
SD－4　1	10YR4/2 灰 黄 褐 色	シルト質粘土	にぶい黄橙色粘土のブロックを下部ほど多く含む

第16図　ＳＤ－３・４土層断面図

はのびていないことが確認されたので、遺構の確認は１次調査のⅢ層面と同一面で行った。また、Ⅲ層上面より下層では遺構は検出されていないので、下層の調査は、調査区の北東角と南東角を一部深く掘って土層の観察のみを行った。

検出遺構については、発見順に遺構の種別ごとに１から順に番号を付したが、方形周溝墓の周溝と判明した遺構については、遺構名称の混乱を避けるために、前回の調査の際に付番されているものはその遺構番号を踏襲し、新たに発見されたものには次の遺構番号を付した。

4　基本層位

中在家南遺跡Ⅶ区の基本層位は、先にふれたように、Ⅰ層が暗褐色の粘土質シルトからなる現耕作土層。Ⅱ層が黒色ないし黒褐色の粘土質シルトないしシルト質粘土層からなる弥生時代中期に形成された遺物包含層、Ⅲ層がにぶい黄橙色粘土質シルト層の基盤層となっている。今回の調査区は、耕作深度が約20㎝で、それほど深くないにもかかわらずⅡ層は分布しておらず、耕作土の下面がⅢ層となる。Ⅲ層も細分され、調査区北東部では上部から順に、層厚20～25㎝のにぶい黄橙色シルト質粘土層、層厚５～10㎝のにぶい黄褐色砂層、層厚40㎝以上で細分も可能な褐色砂層の順に堆積し、現表土上面から約90㎝で湧水面に達する。

5　発見遺構と出土遺物

発見遺構には、溝跡４条・ピット10個がある。このうち、ＳＤ－１溝跡は１次調査ⅦＡ区検出の２号方形周溝墓の延長である。また、ＳＤ－２溝跡は、形状と出土遺物により方形周溝墓の周溝と考えられることから、４号方形周溝墓とした。

１）方形周溝墓

２号方形周溝墓（ＳＤ－１溝跡）　調査区の東半部で周溝の西のコーナー部分が検出された。検出部の北側は、北東から南西方向にのび、調査区中央付近で南東方向にほぼ直角に折れ曲がる。周溝の幅は、断面実測地点のＡ－Ａ′地点で355㎝、Ｂ－Ｂ′地点で426㎝を測るが、コーナー部は外辺が内側に入って狭くなり、幅133㎝となっている。残存部の深さは、Ａ地点で38㎝、Ｂ地点で28㎝ある。コーナー部は浅くなっており、深さは15㎝である。周溝の断面形は概ね舟底形を呈するが、底面には凹凸がある。

１次調査で検出されている部分と合わせた周溝の規模は、北西から南東方向では周溝の内側で9.5m、外側は現状で約15mあるが、実際には16m以上あったと推定される。北東から南西方向は、周溝の外側で13m以上ある。

堆積土は、Ａ地点とＢ地点で共通性があり、大別５層・細別８層に分けられる。上部（１～４層）は弥生時代の遺物包含層が起源となっていると考えられる黒褐色のシルトないし粘土質シルト層で、下部（５層）は、基盤層の崩落土を主とするにぶい黄橙色の砂質シルトないしシルト質粘土層からなる。１～４層中からは、弥生時代遺物が多量に出土している。

壁面は、外側のラインは出入りがあって一定していないが、内側の壁面ラインは比較的綺麗に整えられ、直線的になっている。壁面の方向は、ⅦＢ区の調査部と合成した内側の南西辺でＮ－37°－Ｗである。

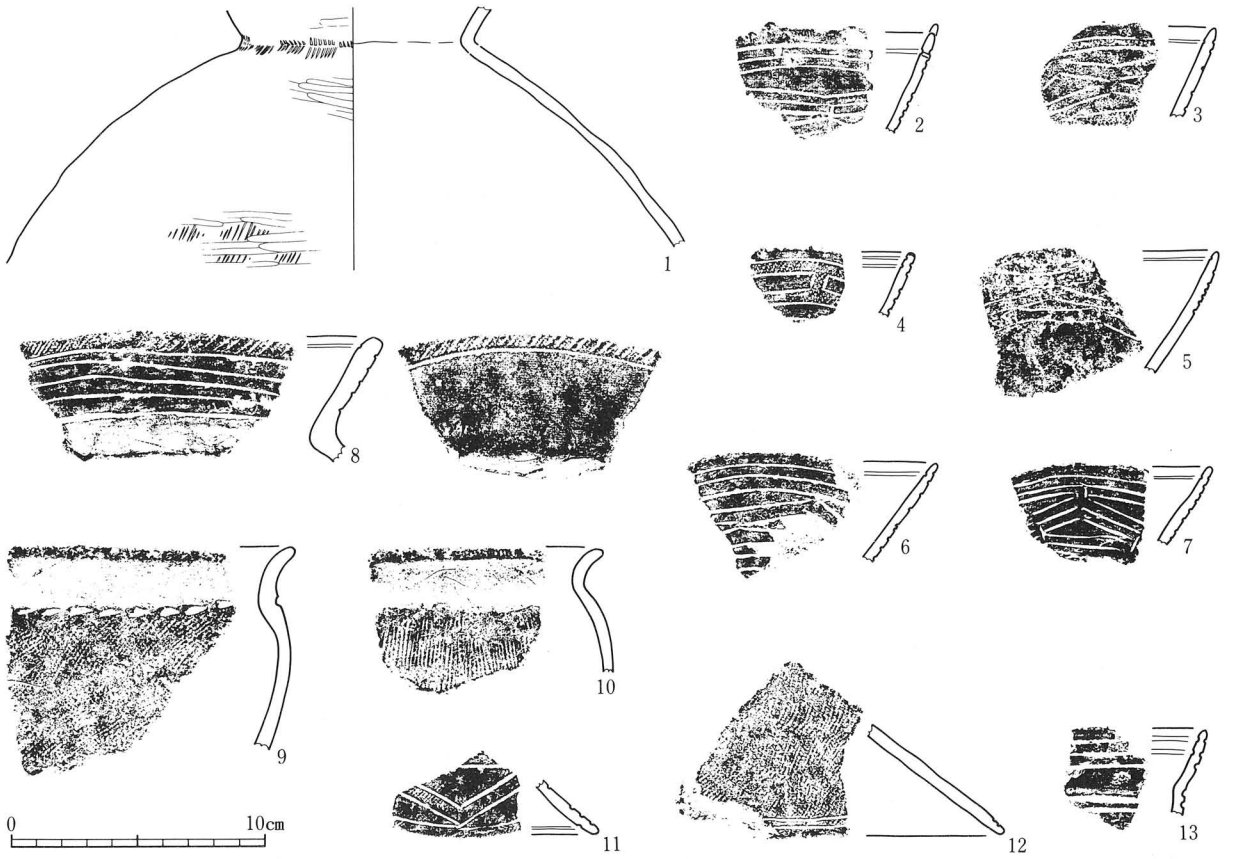
出土遺物は、土師器と確認できるのは、壷または甕の体部と考えられる薄手の破片が11点あるだけで、大量に出土した遺物のほとんどを弥生土器と石器が占める。１次調査区における周溝内からは、古墳時代前期に位置付けられる土師器の壷が出土している。弥生土器は、第17図２～５・９～12に示したように、ⅦⅡ層の遺物包含層出土弥生土器と同じく、細い沈線により連続山形文や方形区画文を描き、区画内を磨消縄文ないし充填縄文手法により調整しており、中期の桝形囲式期に位置付けられる。

石器には、板状石器５点（第18・19図）、ノミ形石斧１点（第20図１）、蛤刃石斧片１点（第20図２）、扁平片刃石

斧片１点（第20図３）、石庖丁１点（第20図４）、石鏃２点（第20図５・８）、石錐４点（第21図１～３・５）、不定型石器（スクレイパー）５点（第21図６～８・第22図１・３）、石皿の破片を転用した凹石１点（第22図６）、磨石１点（第22図５）、抉り加工のある石製品１点（第22図４）などがある。

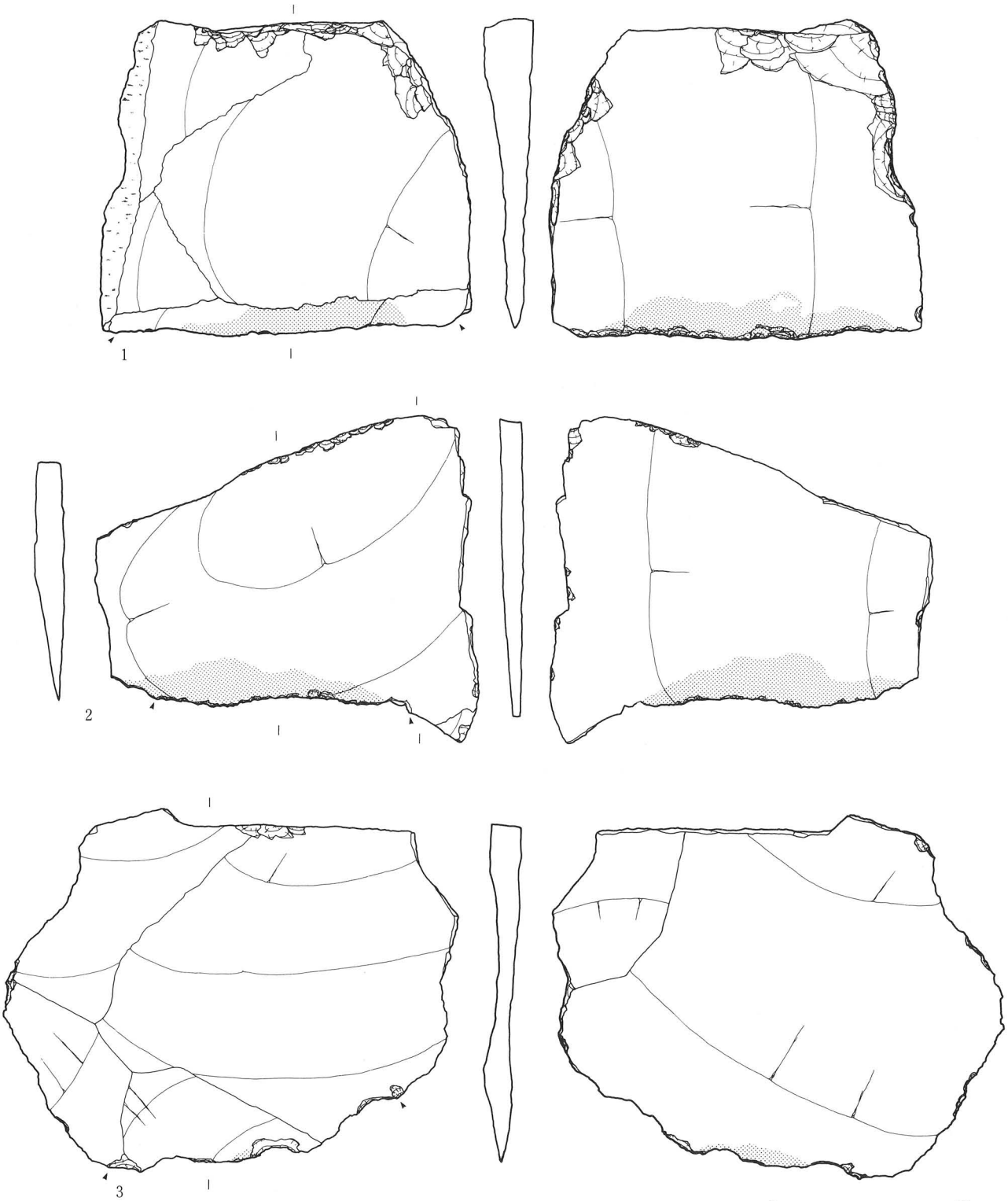
４号方形周溝墓（ＳＤ－２溝跡）　調査区の北西部で周溝の南東のコーナー部分が検出された。周溝は検出部から北側と西側にのびる。周溝の幅は、断面実測地点のＣ－Ｃ′地点で192cm、Ｄ－Ｄ′地点で223cmを測るが、コーナー部は２号方形周溝墓と同じように外辺が内側に入って狭くなり、幅135cmとなっている。残存部の深さは、Ｃ地点で24cm、Ｄ地点で13cmある。周溝の断面形は概ね舟底形を呈するが、底面には凹凸がある。

検出部の周溝の規模は、南北方向が周溝の内側で６ｍ以上、外側で８ｍ以上である。東西方向は、周溝の外側で3.5



図中番号	登録番号	種別・器種	出土地区	基本層位	出土遺構・層	取上番号	器高・長	口径・幅	底径・厚	重量	特徴	写真図版
1	Ｃ－１	非ロクロ土師器　壺			ＳＤ－２	No. 1	(9.6)				体部～頸部外面ハケメのちヘラミガミ	７－１
2	Ｂ－１	弥生土器　鉢			ＳＤ－１		5.2	5.6	0.4		工字状文　：植物茎回転文	７－２
3	Ｂ－４	弥生土器　鉢			ＳＤ－１		4.3	4.9	0.5		連続山形文　：　縄文	７－３
4	Ｂ－５	弥生土器　鉢			ＳＤ－１		3.0	3.8	0.4		方形区画文　：ＬＲ縄文	７－４
5	Ｂ－３	弥生土器　鉢			ＳＤ－１		6.0	6.3	0.5		連続山形文　：	７－５
6	Ｂ－９	弥生土器　鉢			ＳＤ－２		5.0	6.7	0.4		連続山形文　：	７－６
7	Ｂ－10	弥生土器　鉢			ＳＤ－２		3.9	5.2	0.5		工字状文　：	７－７
8	Ｂ－11	弥生土器　甕			ＳＤ－２		5.4	10.1	1.1		平行沈線文　：ＬＲ縄文	７－８
9	Ｂ－８	弥生土器　甕			ＳＤ－１		9.0	8.8	0.8		頸部列点刺突文：ＬＲ縄文	７－９
10	Ｂ－７	弥生土器　甕			ＳＤ－１		5.3	7.0	0.5		：植物茎回転文	７－10
11	Ｂ－２	弥生土器　蓋			ＳＤ－１		3.5	5.2	0.5		連続山形文　：ＬＲ縄文	７－11
12	Ｂ－６	弥生土器　蓋			ＳＤ－１		7.1	7.5	0.5		平行沈線文　：ＬＲ縄文	７－12
13	Ｂ－12	弥生土器　甕			ＳＤ－２		4.1	3.4	0.4		平行沈線文　：	７－13

第17図　出土土器

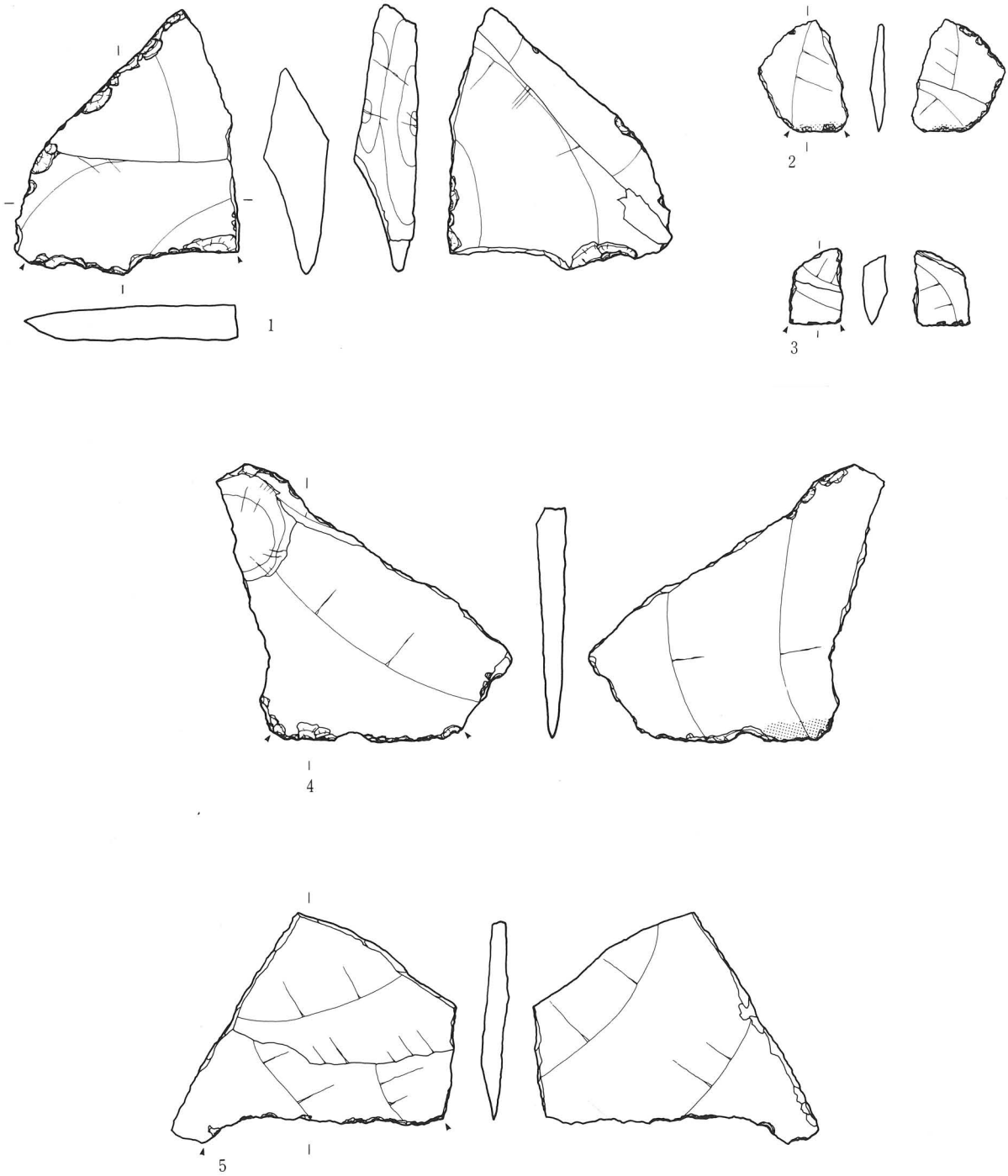


※アミは穀物光沢（コーン・グロス）が肉眼で観察される範囲

0　10cm

番号	登録番号	種別・器種	出土地区	基本層位	出土遺構・層	取上番号	器高・長	口径・幅	底径・厚	重量	特徴	写真図版
1	K－1	板状石器			Pit 8		21.7	17.7	2.5	860.7	刃部に光沢、背部・側面に２次加工	7－14
2	K－2	板状石器			SD－2		21.0	15.3	1.1	606.8	刃部に光沢、背部に２次加工	8－1
3	K－3	板状石器			SD－1		23.4	18.3	1.6	722.8	刃部に光沢	8－2

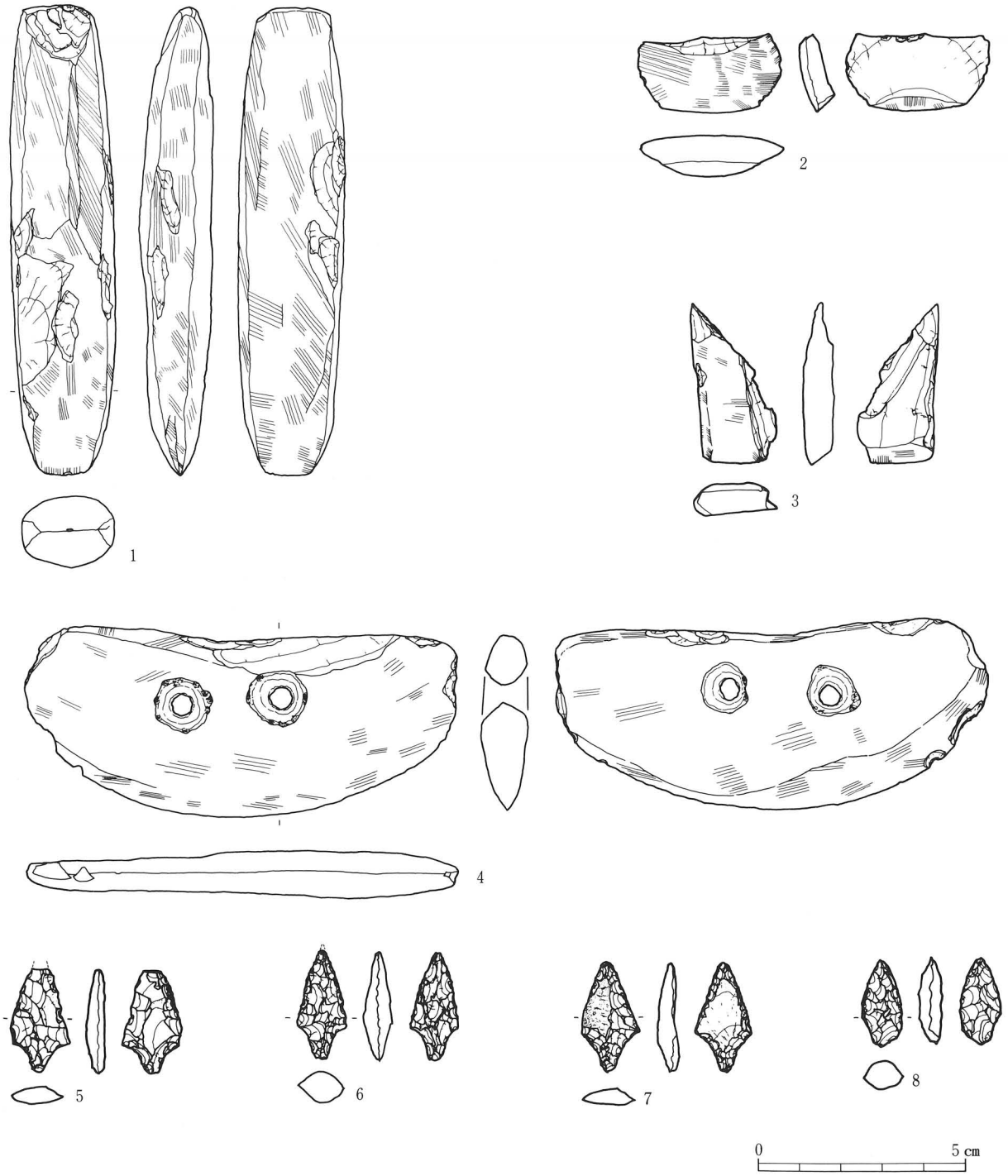
第18図　出土石器１



※アミは穀物光沢（コーン・グロス）が肉眼で観察される範囲　0　10cm

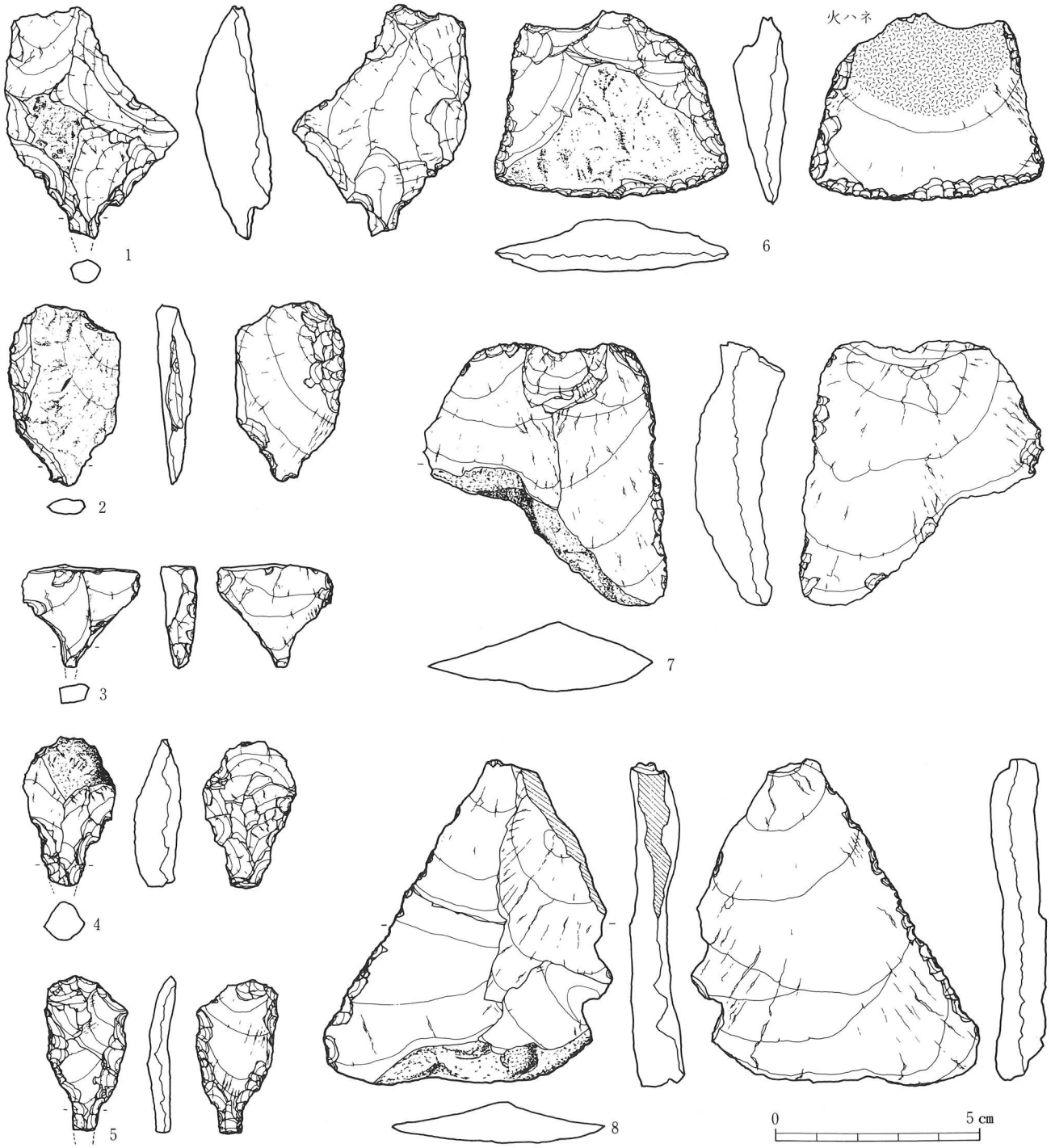
番号	登録番号	種別・器種	出土地区	基本層位	出土遺構・層	取上番号	器高・長	口径・幅	底径・厚	重量	特　　徴	写真図版
1	K－4	板状石器		Ⅰ層			14.1	10.1	3.0	355.2	片側面は両極剥離より折られる	8－3
2	K－5	板状石器			SD－1		5.4	3.8	0.7	19.6	刃部に光沢	8－6
3	K－6	板状石器			SD－1		3.6	2.6	1.2	12.3		8－7
4	K－7	板状石器			SD－1		16.5	9.7	1.3	221.7	刃部に光沢	8－4
5	K－8	板状石器			SD－1		14.7	9.9	1.0	189.3		8－5

第19図　出土石器２



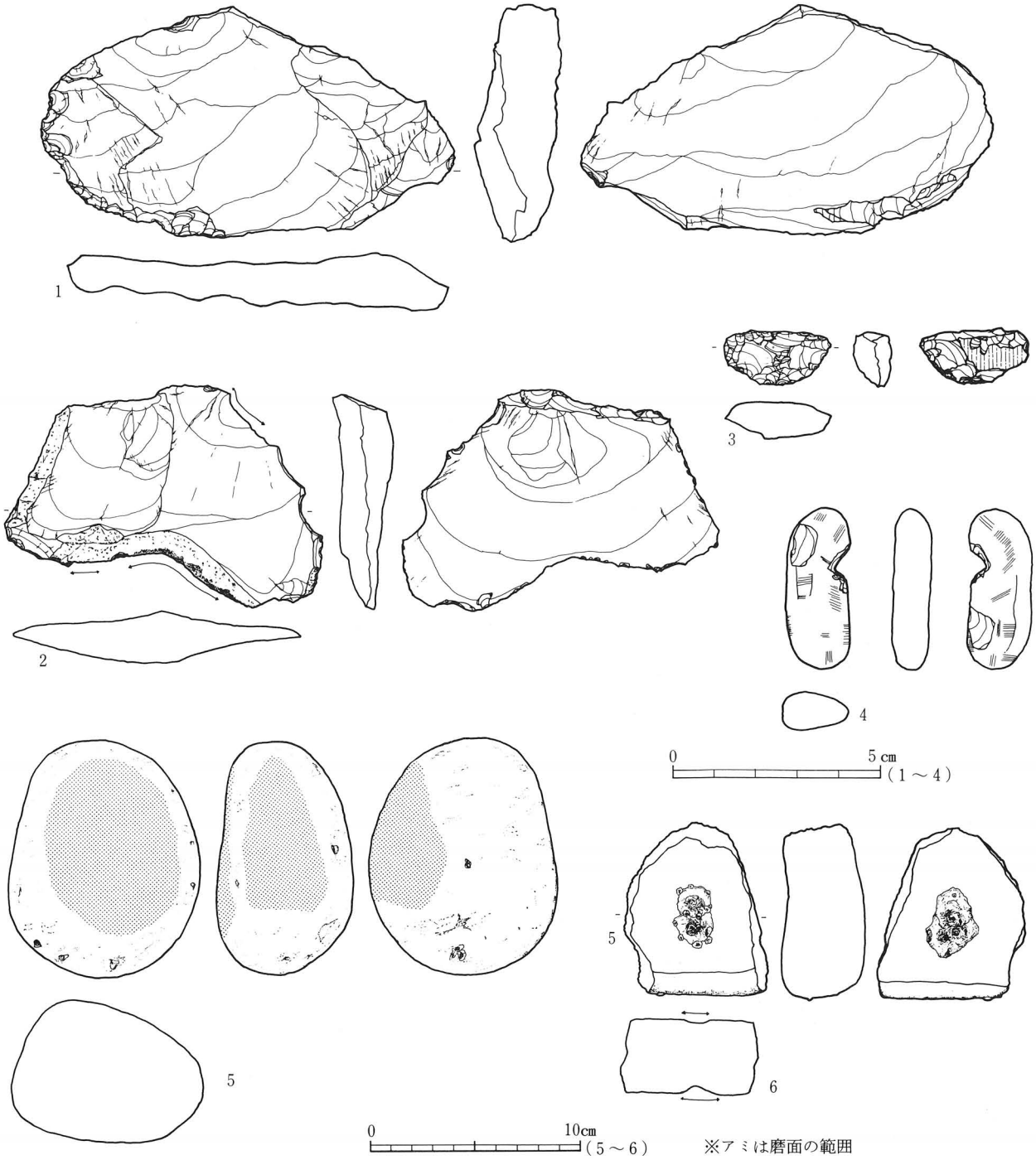
番号	登録番号	種別・器種	出土地区	基本層位	出土遺構・層	取上番号	器高・長	口径・幅	底径・厚	重量	特徴	写真図版
1	K－9	ノミ形石斧			SD－1		11.4	2.5	1.7	71.7	全面に研磨痕、刃部片面に縦位擦痕	9－1
2	K－10	石斧			SD－1		1.8	3.3	0.7	4.4	石斧刃部片	9－2
3	K－11	扁平片刃石斧			SD－1		3.8	1.8	0.7	5.3	刃部片	9－3
4	K－12	石庖丁			SD－1		10.5	4.4	1.1	61.5	背部に剥離痕残存、刃部にコーン・グロスあり	9－7
5	K－13	石鏃			SD－1		2.5	1.4	0.5	1.2	先端破損、有茎式	9－8
6	K－14	石鏃			SD－3		2.6	1.2	0.7	1.2	先端破損、有茎式	9－6
7	K－15	石鏃			SD－2		2.7	1.2	0.5	1.0	有茎式	9－10
8	K－16	石鏃			SD－1		2.2	0.9	0.5	0.8	未製品？	9－11

第20図　出土石器３



番号	登録番号	種別・器種	出土地区	基本層位	出土遺構・層	取上番号	器高・長	口径・幅	底径・厚	重量	特徴	写真図版
1	K－21	石錐			SD－1		5.8	4.2	1.5	2.9	先端部欠損	9－4
2	K－18	石錐			SD－1		4.5	2.6	0.9	8.4		9－13
3	K－22	石錐			SD－1		2.6	2.9	0.8	6.7	先端部欠損	10－1
4	K－20	石錐		1層			3.7	2.2	1.1	4.6	先端部欠損	9－6
5	K－19	石錐			SD－1		3.9	1.9	0.6	2.4	先端部欠損	9－5
6	K－17	不定形石器			SD－1		4.6	5.7	1.2	23.7	両側面と片端部に２次加工	9－12
7	K－23	不定形石器			SD－1		7.4	5.6	1.6	45.5	片端部に２次加工	10－2
8	K－24	不定形石器			SD－1		8.8	5.7	1.2	54.1	片端部に２次加工	10－3

第21図　出土石器４



※アミは磨面の範囲

番号	登録番号	種別・器種	出土地区	基本層位	出土遺構・層	取上番号	器高・長	口径・幅	底径・厚	重量	特徴	写真図版
1	K－26	不定形石器			SD－1		5.6	9.8	1.8	67.7	縁辺部に２次加工	10－5
2	K－25	不定形石器			SD－4		8.4	5.1	1.3	30.8	縁辺部に微細剥離あり	10－4
3	K－27	不定形石器			SD－1		1.3	2.6	0.9	2.2	２次加工あり	10－6
4	K－30	不明			SD－1		3.9	1.5	0.8	3.0	小礫の側面に抉りあり	9－15
5	K－29	磨石			SD－1		11.5	9.0	6.6	997.6		9－14
6	K－28	凹石			SD－1		8.2	6.6	3.9	307.7	石皿からの転用	10－7

第22図　出土石器５

m以上である。

堆積土は、大別２層・細別３層に分けられる。上部（１層）は黒褐色のシルト質粘土層で、下部（２層）は、基盤層を起源とするにぶい黄橙色粘土を含む黒褐色ないし灰黄色の粘土層からなる。

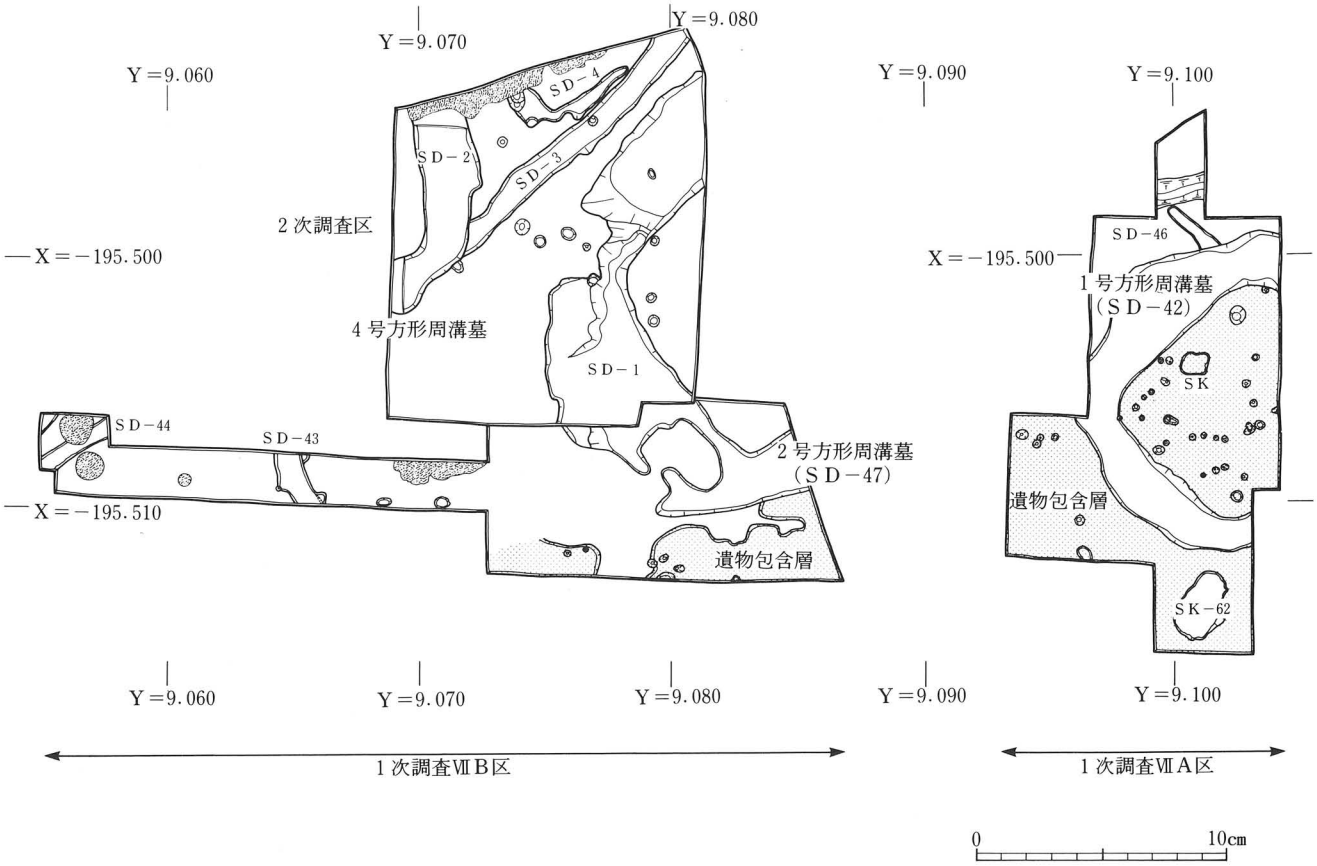
壁面は、外側のラインは出入りがあって一定していないが、内側の東側壁面のラインは比較的整い、直線的になっている。東壁面内側の方向は、Ｎ－５°－Ｗである。

遺物には、周溝の底面付近から一括して出土した土師器の壷の破片がある（第17図１）。口頸部と体部下半を欠損する。大きさの割には薄い造りで、調整は外面がハケメ調整の後丁寧にヘラミガキ調整がされている。内面は摩滅している。土師器以外には、第17図６～８・13のような桝形囲式期の弥生土器片が多量に出土したほか、板状石器１点（第18図２）、石鏃１点（第20図７）などが出土している。板状石器の刃部には肉眼でも明瞭な光沢が観察できる。

２）溝　跡

ＳＤ－３溝跡　調査区北半部で、２号方形周溝墓の北西辺と平行するように、北東から南西方向に斜めにのびて検出された。南西端は４号方形周溝墓に切られている。軸方向はＮ－46°－Ｅである。幅は110cm前後で、深さは14cm程である。断面形は浅いＵ字形を呈する。堆積土は３層に分けられ、黒褐色粘土を挟むように灰黄褐色シルト質粘土層と灰黄褐色粘土層が堆積している。底面は平坦で、底面の北東部と南西部にもレベル差は認められない。遺物は、桝形囲式期と考えられる多数の弥生土器片のほか、石鏃（第20図６）などが出土している。

ＳＤ－４溝跡　調査区北半部で、ＳＤ－３溝跡の北西側に接近して検出された。北東から南西方向と北西から南東にのびる溝が直角に接続している。北東から南西方向にのびる部分は、２号方形周溝墓およびＳＤ－３溝跡と平行している。溝の幅は実測地点で62cm、南西辺で103cm、深さは10cm前後である。断面形は舟底形で、底面に凹凸がある。堆積土は、にぶい黄橙色粘土のブロックを含む灰黄褐色シルト質粘土層である。ＳＤ－４溝跡は、溝の方向の類似性



第23図　１次・２次調査検出遺構合成図

や、周溝を掘る際にコーナー部分の外辺が内側に入って狭くなる点と外側の壁面ラインが不整形なのに対して内側の壁面ラインは直線的に整えている点などにも、２号方形周溝墓や４号方形周溝墓と類似性が認められることから、方形周溝墓の周溝の可能性があると考えられる。溝の南東辺の内側の軸方向はＮ－55°－Ｅである。

この溝が方形周溝墓である場合の規模は、周溝の外側は北東から南西方向で５ｍ以上、北西から南東方向で３ｍ以上である。

遺物は、桝形囲式期と考えられる多数の弥生土器片のほか、不定型石器１点（第22図２）などが出土している。

３）ピット

ピットは10個検出されたが、柱痕跡を確認できたものはない。Ｐ８の上面から大型の板状石器が出土している（第18図１）。

6　調査成果のまとめと考察

１）発見遺構の総括

① 今回の調査では、１次調査の２号方形周溝墓の北西部と、新たに１基の方形周溝墓（４号）を発見した。

② ＳＤ－４溝跡についても、掘方の形態や方向の類似性から、方形周溝墓の可能性が考えられる。時期を決められる遺物はないが、他の方形周溝墓と同様に古墳時代前期と推定される。

③ 各遺構の時期については、２号方形周溝墓・ＳＤ－３・ＳＤ－４は、類似した方向性を示し、相互に意識された可能性があるので、比較的接近した時期の可能性が高い。これに対し、４号方形周溝墓は、ＳＤ－３を切っていることと、他の遺構と方向を異にすることから、やや後続する時期の可能性が考えられる。

④ １次調査Ⅶ区の北部から本調査区には、遺物包含層が分布していないが、今回調査した各遺構から弥生時代の遺物が多量に出土したことと、方形周溝墓が人為的あるいは自然的営力によっれ削平されていることを考慮すると、方形周溝墓造営当時においては、この地区にも弥生時代の遺物包含層が分布していたものと考えられる。

第１表　方形周溝墓の軸方向

	遺　構　名	調査・地区	方　　向	計測辺
1	１号方形周溝墓	１次・Ⅶ区	Ｎ－44°－Ｗ	南西辺
2	２号方形周溝墓	１・２次	Ｎ－37°－Ｗ	南西辺
3	３号方形周溝墓	１次・Ⅴ区	Ｎ－65°－Ｅ	南東辺
4	４号方形周溝墓	２次	Ｎ－ 5°－Ｗ	東　辺
5	ＳＤ－４溝跡	２次	Ｎ－55°－Ｅ	南東辺

第２表　中在家南遺跡の方形周溝墓の規模　　(m)

計測部位方向	内側規模		外側規模	
	北東－南西	北西－南東	北東－南西	北西－南東
１号	8.2	7.1	12.2	11.4
２号	——	9.5	——	15
３号	8.7	——	13	——

２）中在家南遺跡の方形周溝墓について

①　中在家南遺跡における古墳時代前期の方形周溝墓は、確実なものが４基あり、ＳＤ－４溝跡を含めると５基を数える。

②　中在家南遺跡の方形周溝墓は、４号方形周溝墓から１次調査Ⅴ区の３号方形周溝墓までの約110mの区間で検出されている。４号方形周溝墓以西のⅦ区や、３号方形周溝墓以東のⅠ区では発見されていないので、ほぼこの間が分布範囲と考えられる。また、この間の自然堤防上には未発見の方形周溝墓がまだ多数存在するものと推定される。

③　中在家南遺跡で検出された方形周溝墓には、

イ、周溝の壁面のラインは、内側が直線的に整っているのに対し、外側はラインの出入りが著しい。

ロ、周溝のコーナー部分は、外辺が内側に入って狭くなっている。また、同時に浅くなっているもの（３号・２号）もある。

ハ、周溝の軸方向は、第１表のとおり真北を基準として37°～65°傾いているのが一般的（１号・２号・３号・ＳＤ－４）で、１基（４号）だけが真北に近い角度の軸方向となっている。

という特徴が認められる。

④　方形周溝墓の規模は、大きさが計測できる部分で、周溝の内側で7.1m～9.1m、外側で11.4m～15m程度である。

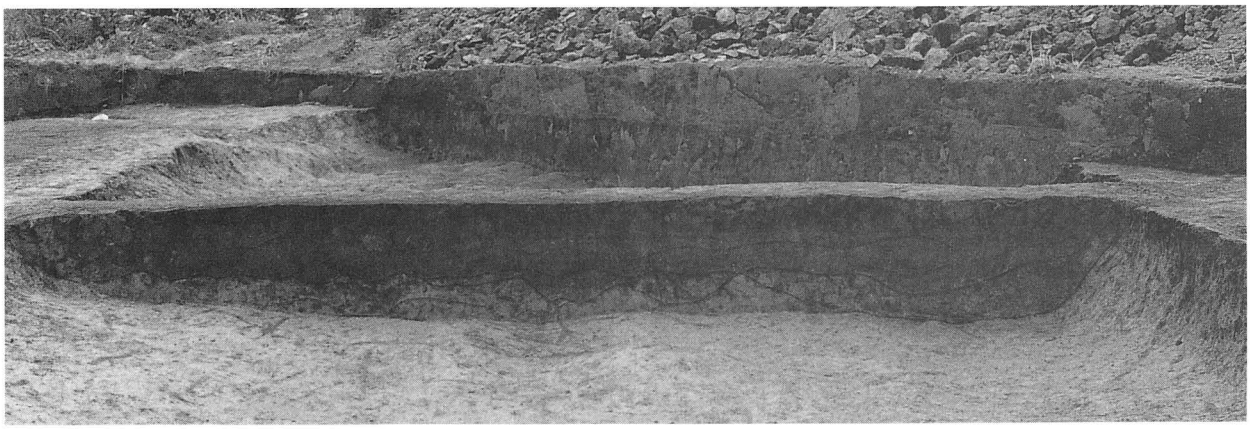
参考文献

工藤哲司（1996）：「中在家南遺跡他　第６部中在家南遺跡」『仙台市文化財調査報告書第213集』

工藤哲司（1996）：「中在家南遺跡他　第４部高屋敷遺跡」『仙台市文化財調査報告書第213集』

1　調査区全景（南より）

2　２号方形周溝墓全景

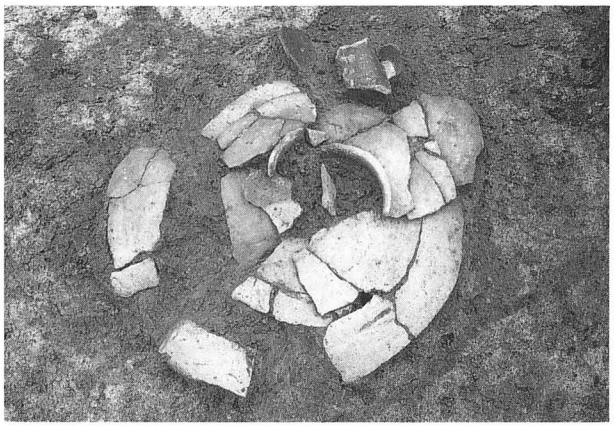


3　２号方形周溝墓周溝断面

図版５　調査区全景・２号方形周溝墓

1　４号方形周溝墓・ＳＤ－３溝跡全景

2　４号方形周溝墓周溝断面（Ｃ－Ｃ′）

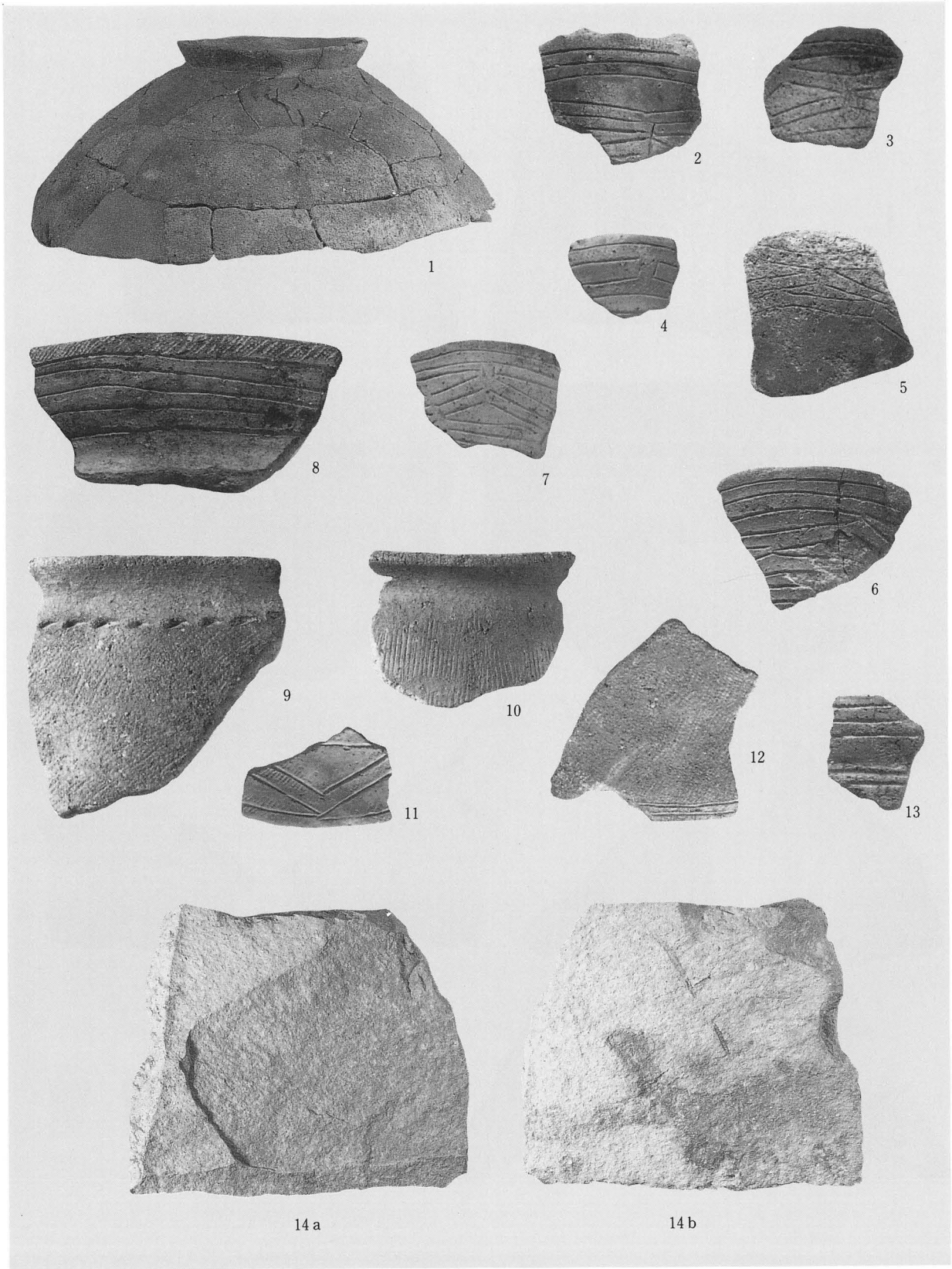


3　４号方形周溝墓土師器出土状況

4　ＳＤ－４溝跡全景

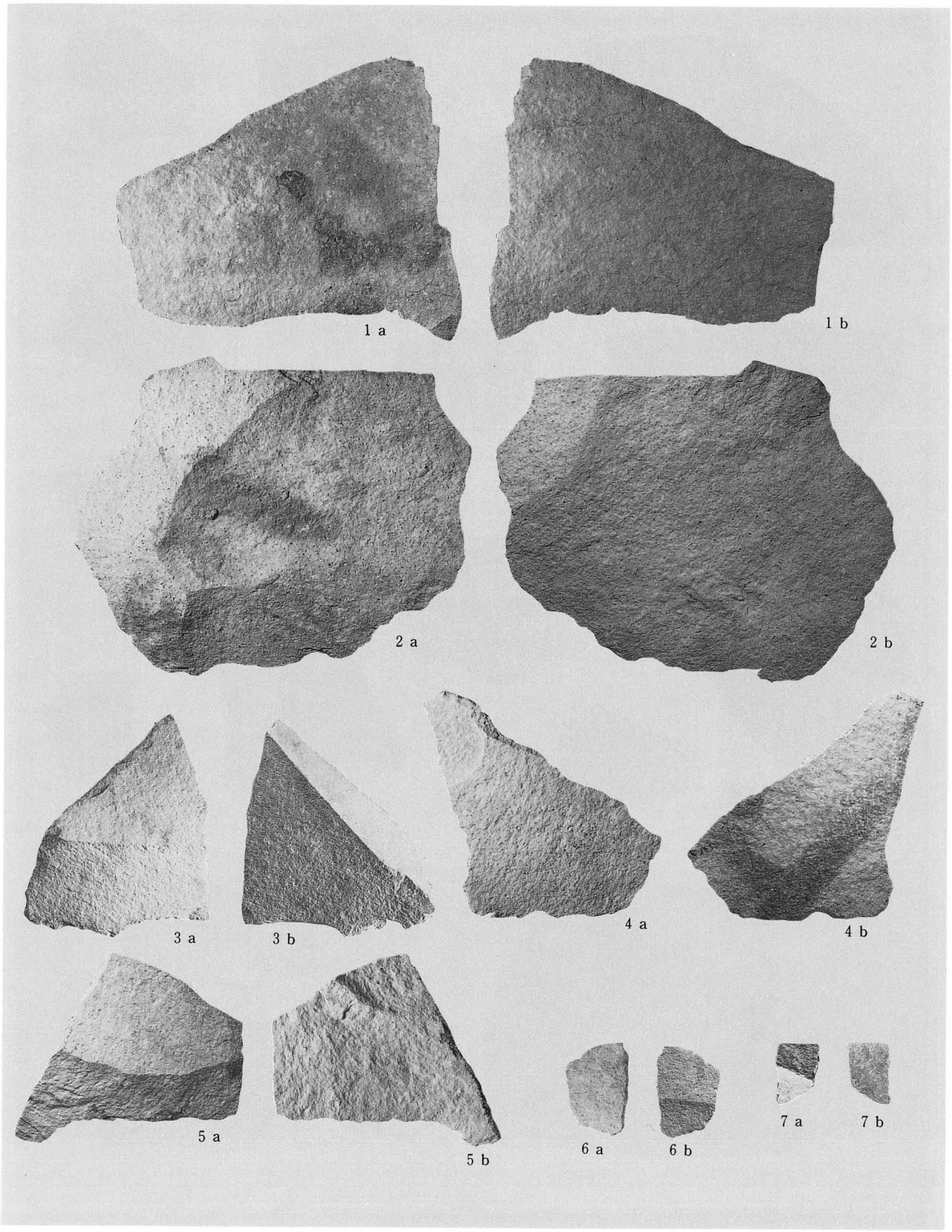
5　２次調査区土層断面（東壁北端）

図版６　４号方形周溝墓、ＳＤ－３・４、土層断面



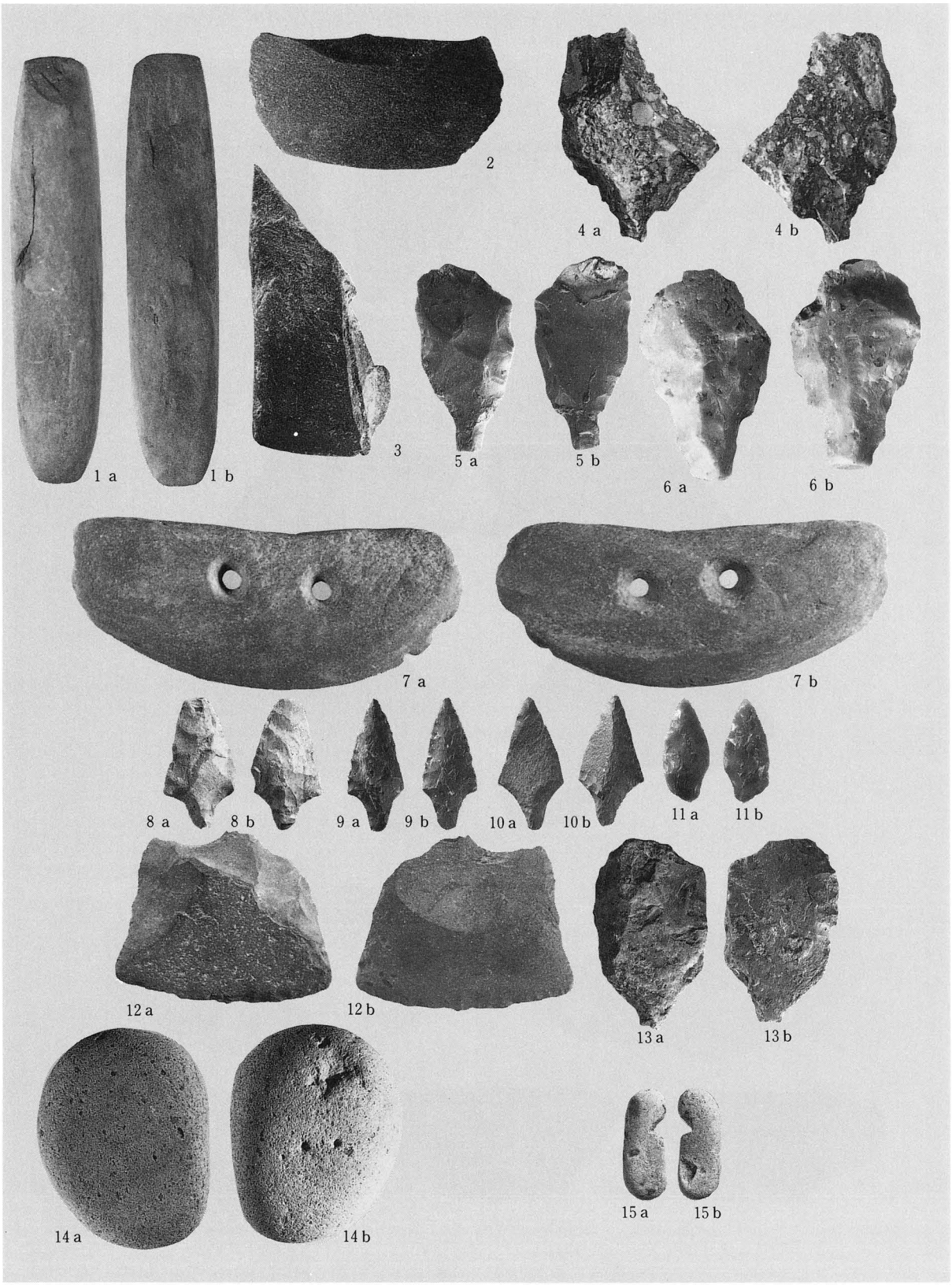
1非ロクロ土師器壺　Ｃ－１（ＳＤ－２　第17図１）
2弥生土器　鉢　Ｂ－１（ＳＤ－１　第17図２）
3弥生土器　鉢　Ｂ－４（ＳＤ－１　第17図３）
4弥生土器　鉢　Ｂ－４（ＳＤ－１　第17図４）
5弥生土器　鉢　Ｂ－３（ＳＤ－１　第17図５）
6弥生土器　鉢　Ｂ－９（ＳＤ－２　第17図６）
7弥生土器　鉢　Ｂ－10（ＳＤ－２　第17図７）
8弥生土器　甕　Ｂ－11（ＳＤ－２　第17図８）
9弥生土器　甕　Ｂ－８（ＳＤ－１　第17図９）
10弥生土器　甕　Ｂ－７（ＳＤ－１　第17図10）
11弥生土器　蓋　Ｂ－２（ＳＤ－１　第17図11）
12弥生土器　蓋　Ｂ－６（ＳＤ－１　第17図12）
13弥生土器　甕　Ｂ－12（ＳＤ－２　第17図13）
14板状石器　　Ｋ－１（Ｐｉｔ８　第18図１）

図版７　出土遺物１



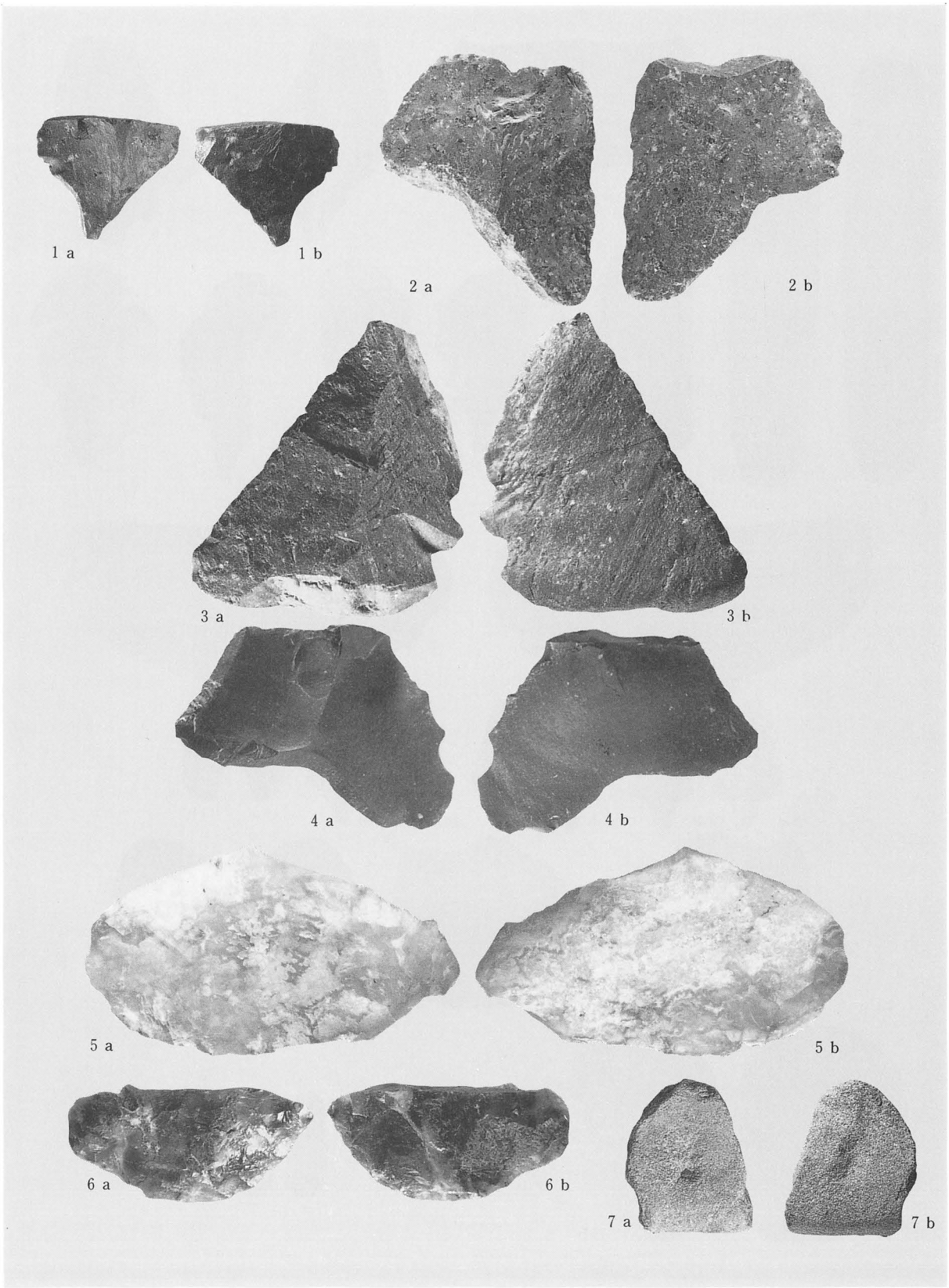
1 板状石器　K－2（SD－2　第18図2）
2 板状石器　K－3（SD－1　第18図3）
3 板状石器　K－4（I　　層　第19図1）
4 板状石器　K－7（SD－1　第19図4）
5 板状石器　K－8（SD－1　第19図5）
6 板状石器　K－5（SD－1　第19図2）
7 板状石器　K－6（SD－1　第19図3）

図版8　出土遺物2



１ノミ形石斧	K－９（ＳＤ－１ 第20図１）	２蛤刃石斧	K－10（ＳＤ－１ 第20図２）	３扁平片刃石斧	K－11（ＳＤ－１ 第20図11）
４石錐	K－21（ＳＤ－１ 第21図１）	５石錐	K－19（ＳＤ－１ 第21図５）	６石錐	K－20（Ｉ層 第21図４）
７石庖丁	K－12（ＳＤ－１ 第20図４）	８石鏃	K－13（ＳＤ－１ 第20図５）	９石鏃	K－14（ＳＤ－３ 第20図６）
10石鏃	K－15（ＳＤ－２ 第20図７）	11石鏃	K－16（ＳＤ－１ 第20図８）	12不定形石器	K－17（ＳＤ－１ 第21図６）
13石錐	K－18（ＳＤ－１ 第21図２）	14磨石	K－29（ＳＤ－１ 第22図５）	15不明石製品	K－30（ＳＤ－１ 第22図４）

図版９　出土遺物３



1 石　　錐 K－20（Ⅰ　　層 第21図４）
2 不定形石器 K－23（ＳＤ－１ 第21図７）
3 不定形石器 K－24（ＳＤ－１ 第21図８）
4 不定形石器 K－25（ＳＤ－４ 第22図２）
5 不定形石器 K－26（ＳＤ－１ 第22図１）
6 不定形石器 K－27（ＳＤ－１ 第22図３）
7 凹　　石 K－28（ＳＤ－１ 第22図６）

図版10　出土遺物４

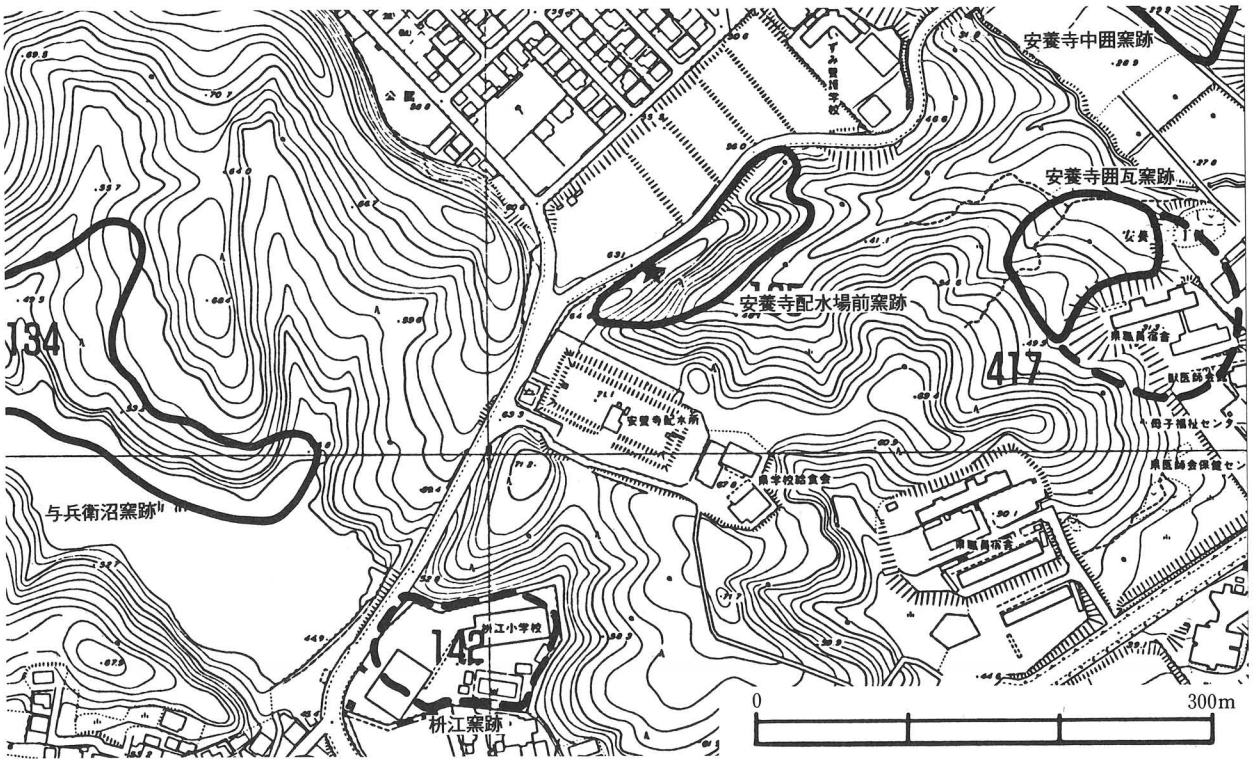
Ⅲ　安養寺配水場前窯跡調査報告書

1　調査要項

遺跡名	安養寺配水場前窯跡（宮城県遺跡番号　０１１３５）
調査地点	仙台市宮城野区安養寺三丁目地内
調査原因	都市計画街路建設
調査対象面積	3,700㎡
調査面積	約100㎡
調査期間	平成８年８月26日～８月29日
調査主体	仙台市教育委員会
調査担当	仙台市教育委員会文化財課
担当職員	篠原信彦
調査参加者	只野宗一・鈴木邦彦・土井　清
調査協力	宮城県

2　遺跡の位置と環境

安養寺配水場前窯跡はＪＲ仙台駅の北東約3.5㎞の仙台市宮城野区安養寺三丁目地内に位置し、仙台市街地の北部を東西に延びる台原・小田原丘陵の標高46～68ｍの南東斜面に立地している。この地域は枡江から仙台三高へ向かって丘陵を登った頂部にあたり、東側には安養寺配水所があり、その北東側に遺跡は位置している。すでに丘陵頂部は、宅地造成や道路建設のため削平さてお り、道路東側の崖面に窯跡の断面が発見されていたが、近年の道路改良に伴い



第24図　調査地点と周辺の地形

窯体の大部分は破壊されている。

安養寺配水場前窯跡は、仙台市街地の北部・青葉区堤町から宮城野区東仙台にかけて分布している台原・小田原窯跡群の一つであり、この窯跡を中心として半径約500mの範囲には、多くの窯跡や遺跡が発見されている。南西から南側には、与兵衛沼窯跡・枡江遺跡・神明社窯跡・神明社裏遺跡などがあり、北側から東側には、安養寺中囲瓦窯跡・安養寺下瓦窯跡・安養寺囲瓦窯跡などがある。

3　調査方法と基本層位

都市計画街路「川内南小泉線」建設・市道「三校前線」改良工事に伴う発掘調査であり、平成7年9月に確認調査を実施した結果、窯跡の灰原と須恵器坏・蓋などが出土したことから本調査が必要と判断された。遺物が出土した部分を中心に調査区を設定し、人力で調査を実施したが、窯体は発見されず灰原の調査となった。

基本層は3層認められている。1層は炭化物や灰を混入する暗褐色シルトで、層中より須恵器の破片が多く出土している。2層は炭化物を多く混入する暗褐色粘土質シルトで黄褐色砂質シルトと混じり合っている。層中より須恵器・平瓦などが出土している。3層は黄褐色砂質シルト・粗砂である。

4　発見遺構と出土遺物

遺物が発見された部分に調査区を設定して調査を実施したが、発見された遺構は灰原1カ所のみで、それより上部の窯体は宅地造成及び市道建設に伴って削平されているため検出されなかった。灰原は南東に向いた約30°の急斜面で検出され、その範囲は長さ15m、幅12mと考えられる。

灰原より出土した遺物は、須恵器と平瓦、熨斗瓦で、須恵器は坏・高台付坏・蓋が比較的多く出土し、壷、鉢、甕は少量の破片が出土している。須恵器片は平箱3箱、瓦片は平箱1箱の出土量であり、瓦の方が斜面の上方から出土する傾向にあった。

須恵器

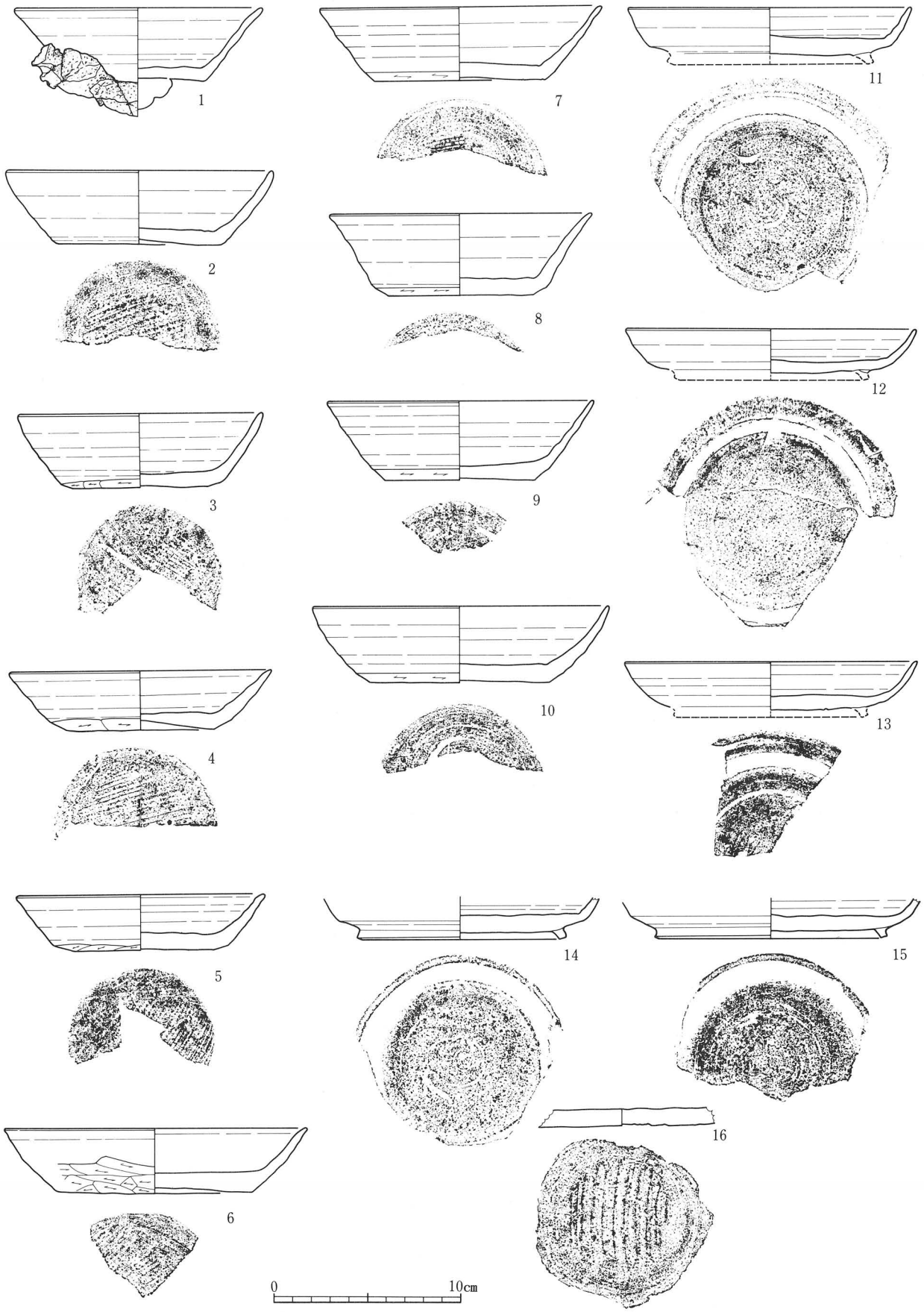
出土した須恵器には坏・高台付坏・蓋・鉢・甕がある。

坏：最も多く出土している。11点を図示した。器形や底部の切り離し技法により次のように分類される。

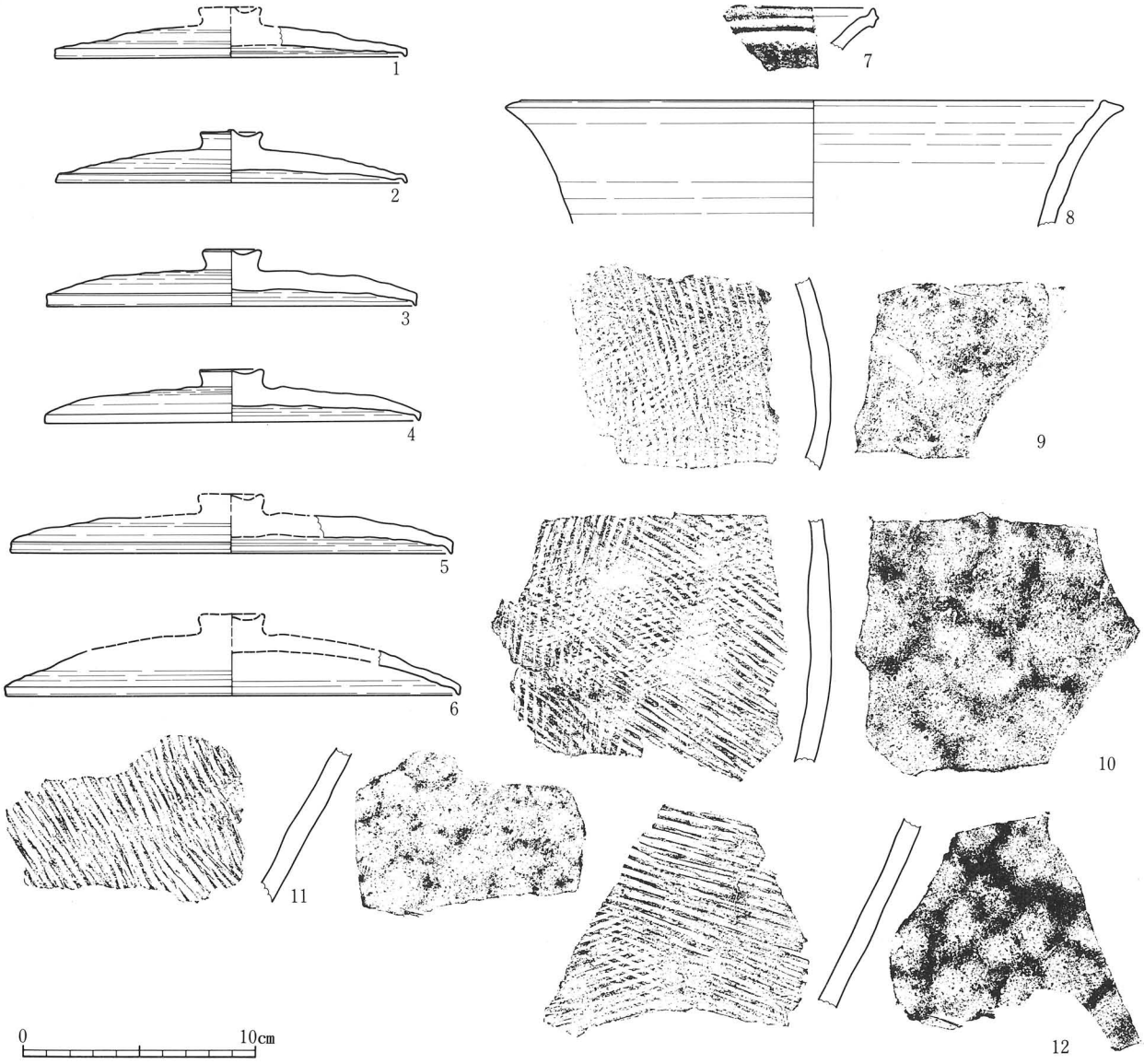
Ⅰ類：底部は平底で、体部から口縁部にかけてやや外反しながら立ち上がるもので、底部の切り離し技法・再調整により2種類に細分される。

図観測表

図中番号	登録番号	種別・器種	出土地区	基本層位	出土遺構・層	取上番号	器高・長	口径・幅	底径・厚	重量	特徴	写真図版
1	E－10	須恵器　杯					4.0	13.1	7.0		底部静止糸切り無調整	12－6
2	E－1	須恵器　杯					4.0	14.2	8.6		底部静止糸切り後手持ヘラケズリ	12－1
3	E－2	須恵器　杯					4.0	12.9	7.0		底部静止糸切り後手持ヘラケズリ	12－2
4	E－3	須恵器　杯					3.2	13.9	7.7		底部静止糸切り後手持ヘラケズリ	12－3
5	E－9	須恵器　杯					3.0	13.1	7.3		底部静止糸切り後手持ヘラケズリ	12－9
6	E－4	須恵器　杯					3.5	16.0	10.3		底部静止糸切り後手持ヘラケズリ	12－7
7	E－5	須恵器　杯					4.0	14.9	9.0		底部静止糸切り後回転ヘラケズリ	12－5
8	E－6	須恵器　杯					4.4	13.9	7.7		切り離し技法不明後回転ヘラケズリ	12－8
9	E－7	須恵器　杯					4.3	14.1	8.0		切り離し技法不明後回転ヘラケズリ	
10	E－8	須恵器　杯					4.1	15.7	9.6		切り離し技法不明後回転ヘラケズリ	12－4
11	E－11	須恵器　高台付杯					(2.6)		11.1		底部静止糸切り後回転ヘラケズリ	12－12
12	E－12	須恵器　高台付杯					(2.4)	15.1			底部静止糸切り後回転ヘラケズリ	12－11
13	E－13	須恵器　高台付杯					(2.6)	15.5			切り離し技法不明後回転ヘラケズリ	
14	E－14	須恵器　高台付杯					(2.3)	15.5			切り離し技法不明後回転ヘラケズリ	12－10
15	E－15	須恵器　高台付杯					(2.1)		12.3		切り離し技法不明後回転ヘラケズリ	
16	E－16	須恵器　高台付杯									底部静止糸切り後回転ヘラケズリ	12－13



第25図　出土遺物１



図中番号	登録番号	種別・器種	出土地区	基本層位	出土遺構・層	取上番号	器高・長	口径・幅	底径・厚	重量	特徴	写真図版
1	E－20	須恵器　蓋					(1.3)	(15.1)	0.8		小型	13－6
2	E－19	須恵器　蓋					2.3	15.1	0.9		宝珠つまみ　小型	13－3
3	E－18	須恵器　蓋					2.5	15.9	0.9		宝珠つまみ　小型	13－2
4	E－17	須恵器　蓋					2.3	16.1	0.8		宝珠つまみ　小型	13－1
5	E－21	須恵器　蓋					(1.6)	(19.0)	0.9		大型	13－5
6	E－22	須恵器　蓋					(1.9)	(19.5)	0.6		大型	13－4
7	E－23	須恵器　壺					2.6	4.2	0.5			13－7
8	E－24	須恵器　鉢					(5.5)	(26.6)	0.7		口唇部平坦	13－8
9	E－25	須恵器　甕					8.6	9.9	0.8		外面平行タタキ、内面アテ具に弧状文様	13－11
10	E－27	須恵器　甕					12.1	12.8	1.0		外面平行タタキ、内面アテ具に弧状文様	13－9
11	E－26	須恵器　甕					7.5	10.2	0.9		外面平行タタキ、内面アテ具に弧状文様	13－10
12	E－28	須恵器　甕					10.7	11.1	0.9		外面平行タタキ、内面アテ具に弧状文様	13－12

第26図　出土遺物２

Ⅰａ類：底部の切り離し技法は静止糸切りで無調整のもの（第25図１）

Ⅰｂ類：底部の切り離し技法は不明で、体部下半から底部に回転ヘラケズリされるもの（第25図８）

Ⅱ類：底部は平底で、体部が直線上に外傾して口縁部が僅かに外反するもので、底部の切り離し技法・再調整により３種類に細分される。

Ⅱａ類：底部の切り離し技法は静止糸切りで、体部下端から底部周縁に手持ちヘラケズリされるもの（第25図４～６）

Ⅱｂ類：底部の切り離し技法は静止糸切りで、体部下端から底部周縁に回転ヘラケズリされるもの（第25図７）

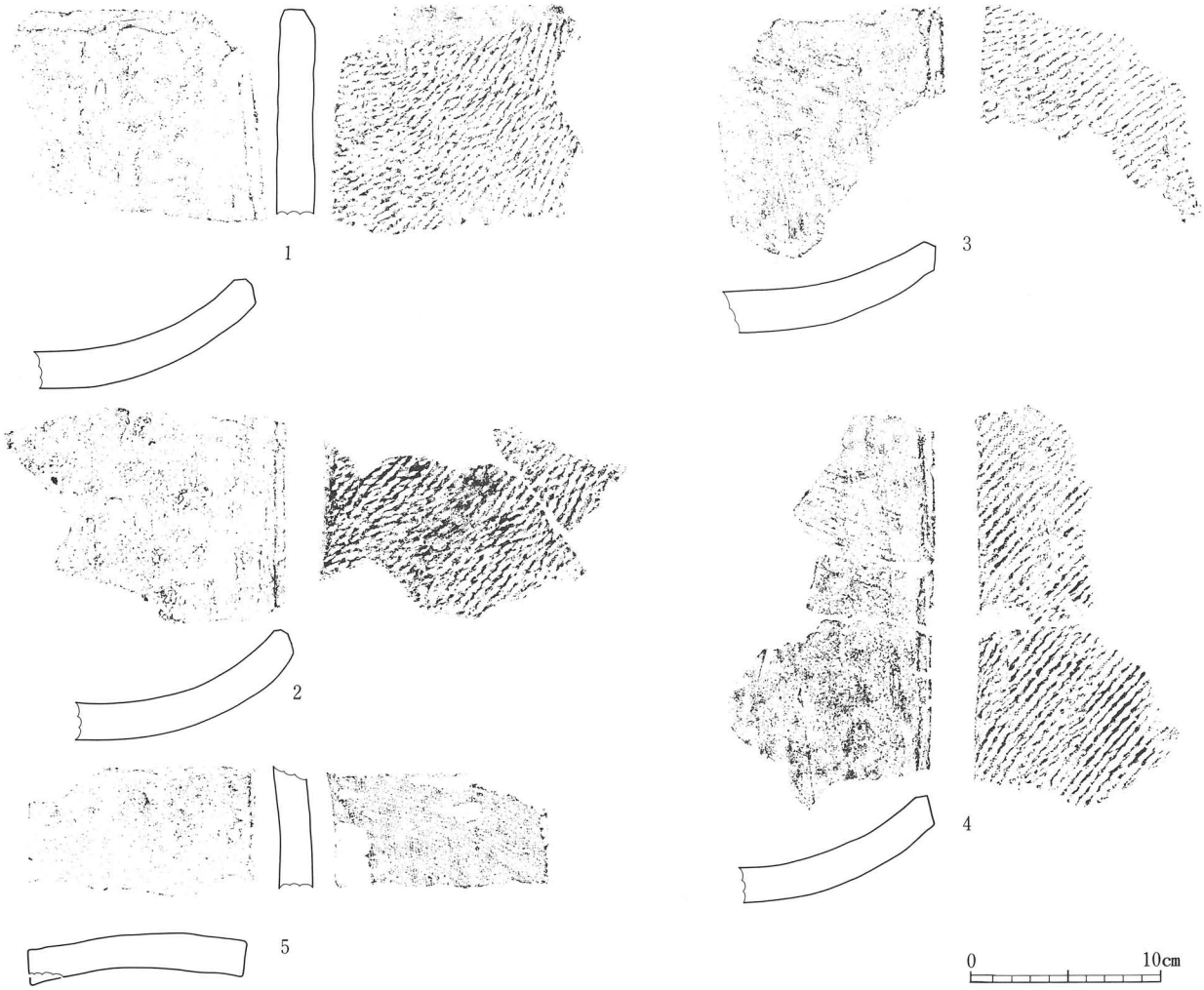
Ⅱｃ類：底部の切り離し技法は不明で、体部下端から底部に回転ヘラケズリされるもの（第25図９）

Ⅲ類：底部は平底で、体部から口縁部にかけて内湾しながら立ち上がるもので、底部の切り離し技法・再調整により２種類に細分される。

Ⅲａ類：底部の切り離し技法は静止糸切りで、体部下端から底部周縁に手持ちヘラケズリされるもの（第25図３）

Ⅲｂ類：底部の切り離し技法は静止糸切りで、体部下端から底部周縁に回転ヘラケズリされるもの（第25図10）

坏の底部資料は図示したものも含め57点が出土し、再調整のため底部の切り離し技法が不明なもの23点を除いた34



図中番号	登録番号	種別・器種	出土地区	基本層位	出土遺構・層	取上番号	器高・長	口径・幅	底径・厚	重量	特徴	写真図版
1	G－2	瓦類　平瓦					(12.5)	(14.7)	2.1		凸面縄タタキ、凹面布目後ナデ	13－13
2	G－1	瓦類　平瓦					(13.3)	(15.5)	2.0		凸面縄タタキ、凹面布目後ナデ	13－14
3	G－3	瓦類　平瓦					(14.3)	(12.8)	2.3		凸面縄タタキ、凹面布目後ナデ	13－16
4	G－4	瓦類　平瓦					(23.2)	(11.2)	1.9		凸面縄タタキ、凹面布目後ナデ	13－15
5	G－5	瓦類　熨斗瓦					(7.7)	(12.0)	2.0		凸面縄タタキ、凹面布目	13－17

第27図　出土遺物３

点が静止糸切りである。その内訳は静止糸切り無調整が１点、静止糸切り後手持ちヘラケズリのものが22点、静止糸切り後回転ヘラケズリのものが11点ある。

高台付坏：５点が図示されている。底部は平底で、体部から口縁部にかけて内湾しながら立ち上がるもので、底部の切り離し技法・再調整により細分される。

Ⅰ類：底部の切り離し技法は静止糸切りで、ほぼ全面に回転ヘラケズリされるもの（第25図11・12）

Ⅱ類：底部の切り離し技法は不明で、全面に回転ヘラケズリされるもの（第25図13～15）

高台付坏は再調整後、短くハの字状に開く高台が付く。口径は15.1から15.5cmと大型で器高の浅いものである。

蓋：６点が図示されている。いずれも天井部は低く口縁部は短く下方へ折り曲げられている。つまみは扁平な宝珠状のもので、宝珠部分はつぶれている。口径の大小により２種類に分類される。

Ⅰ類：口径15.1～16.1cmの小型のもの（第26図１～４）

Ⅱ類：口径19.0・19.5cmに推定される大型のもの（第26図５・６）

Ⅰ類は完形に復元されたものが３点あり、器高2.3～2.5cmと天井部が低く、天井部から口縁部の広い範囲がかるく回転ヘラケズリ調整されている。Ⅱ類は完形のものはなく、口縁部から天井部にかけての破片である。

壷：長頸壷口縁部と考えられる破片が１点あるのみである。

鉢：口縁部から体部にかけての破片１点がある。

甕：体部の破片が４点あり、いずれも外面が平行タタキ、内面に円形のあて道具痕が観測される。

平瓦・熨斗瓦

平瓦は比較的多く出土しているが、すべて小破片であり、完形品はなく拓本資料４点を図示した（第27図１～４）。凹面は布目、凸面は縄タタキされているが、１・２は凹面に凸型台にのせた時に付着したと考えられる圧痕が認められる。熨斗瓦は破片が１点出土している（第27図５）。

5　出土遺物の検討

出土した遺物は須恵器、平瓦・熨斗瓦があるが、須恵器が多く、坏・高台付坏・蓋がまとまって出土している。坏は、底部の切り離し技法が再調整のために不明なものを除き、すべて静止糸切りされており、ヘラ切りのものや回転糸切りのものは含まれていない。これはこの窯跡の須恵器坏がすべて静止糸切りのみで構成されるのか、それとも他の切り離し技法が存在しているのか、灰原のみの調整であるため断定されないが、静止糸切りのみで構成されている可能性が高い。ここでは坏を中心として年代について若干の検討をしてみたい。

本窯跡出土の須恵器は静止糸切りされる坏にその特徴があり、これと類似する遺跡は色麻町日の出山窯跡群、松山町次橋窯跡、利府町硯沢・大沢窯跡などから出土している。このなかで、比較的資料が多く類似資料も多い日の出山窯跡群Ｃ地点のⅢ群土器が上げられる。Ⅲ群土器は底部の切り離しはヘラ切りから静止糸切り・回転糸切りへと、再調整は回転ヘラケズリから手持ちヘラケズリへと、主体となる技法が移行・変化するが、短い期間の変遷と考えられており、共伴する瓦の年代より739年前後の年代に位置づけられている。また、次橋窯跡や硯沢・大沢窯跡でも奈良時代後半の時期に位置づけられている。これらのことから本窯跡出土の須恵器の年代については、日の出山窯跡群Ｃ地点のⅢ群土器の年代と同じ時期かそれより後続すると考えられ、奈良時代中葉から後半の時期に位置づけておきたい。

6　調査成果のまとめ

①　安養寺配水場前窯跡は台原・小田原窯群跡の一つで、南東斜面の標高55～65mに立地する。須恵器と瓦が出土したが、須恵器窯の可能性が高い。

② 今回の調査で検出された遺構は灰原１カ所であり、窯体はすでになく削平されており、窯の構造、規模は不明である。

③ 灰原より出土した須恵器は奈良時代中葉から後半の年代に位置づけられる。平瓦・熨斗瓦については施設瓦であった可能性があるが、須恵器とほぼ同一の年代と考えられる。

参考文献

工藤雅樹・桑原滋郎　1970：「日の出山窯跡群」『宮城県文化財調査報告書第22集』宮城県教育委員会

東北学院大学考古学研究部　1983：「宮城県志田郡松山町次橋須恵器窯跡発掘調査報告」松山町教育委員会

宮城県教育委員会　1987：「硯沢大沢窯跡群」『宮城県文化財調査報告書第116集』宮城県教育委員会

古川一明・太田肇　1993：「日の出山窯跡群―詳細分布調査とＣ地点西部の発掘調査」『色麻町文化財調査報告書第１集』色麻町教育委員会

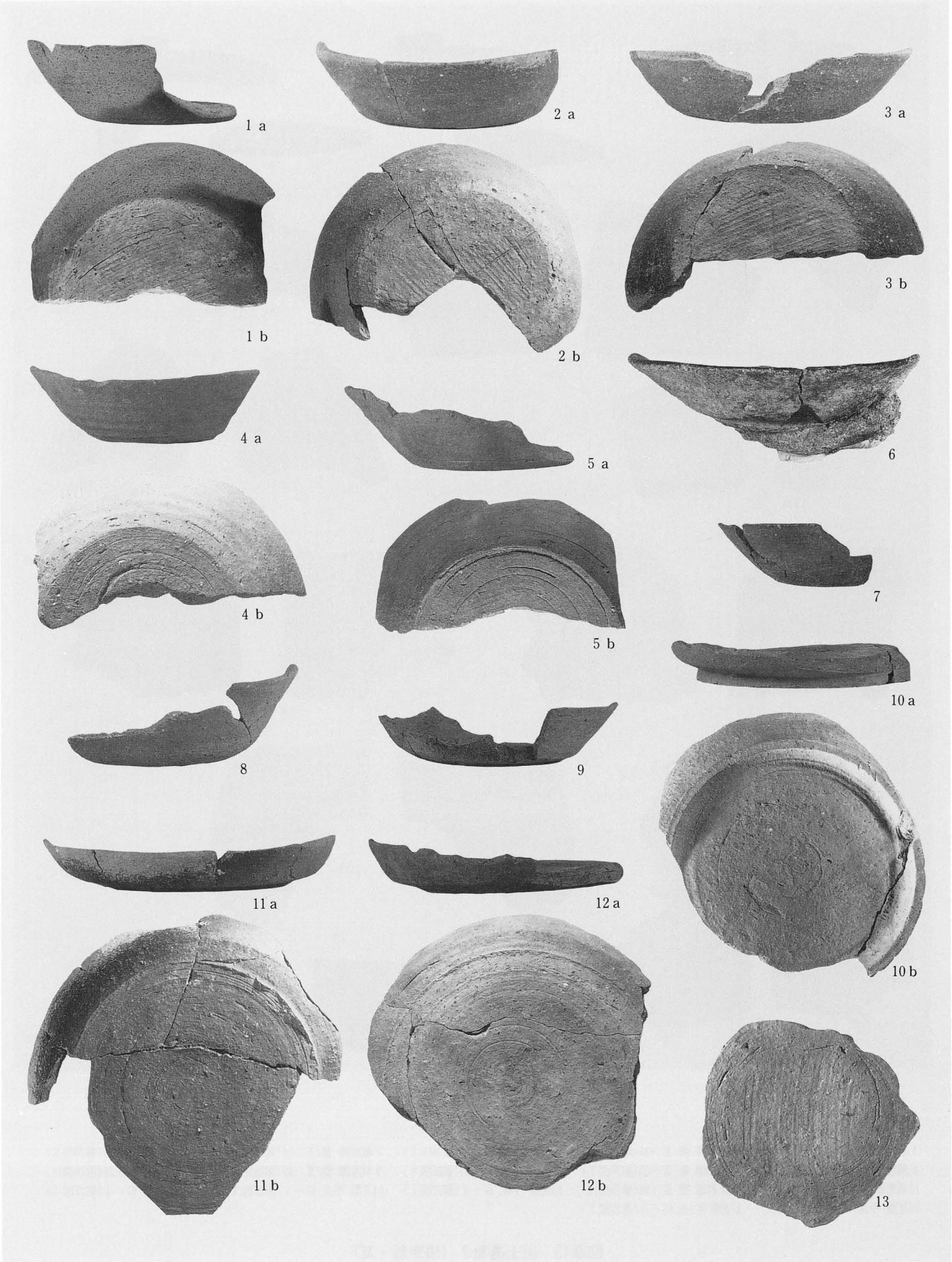
仙台市史編さん委員会　1995：「仙台市史　特別編２　考古資料」　仙台市

1　調査地点現況

2　遺物出土地点（東より）

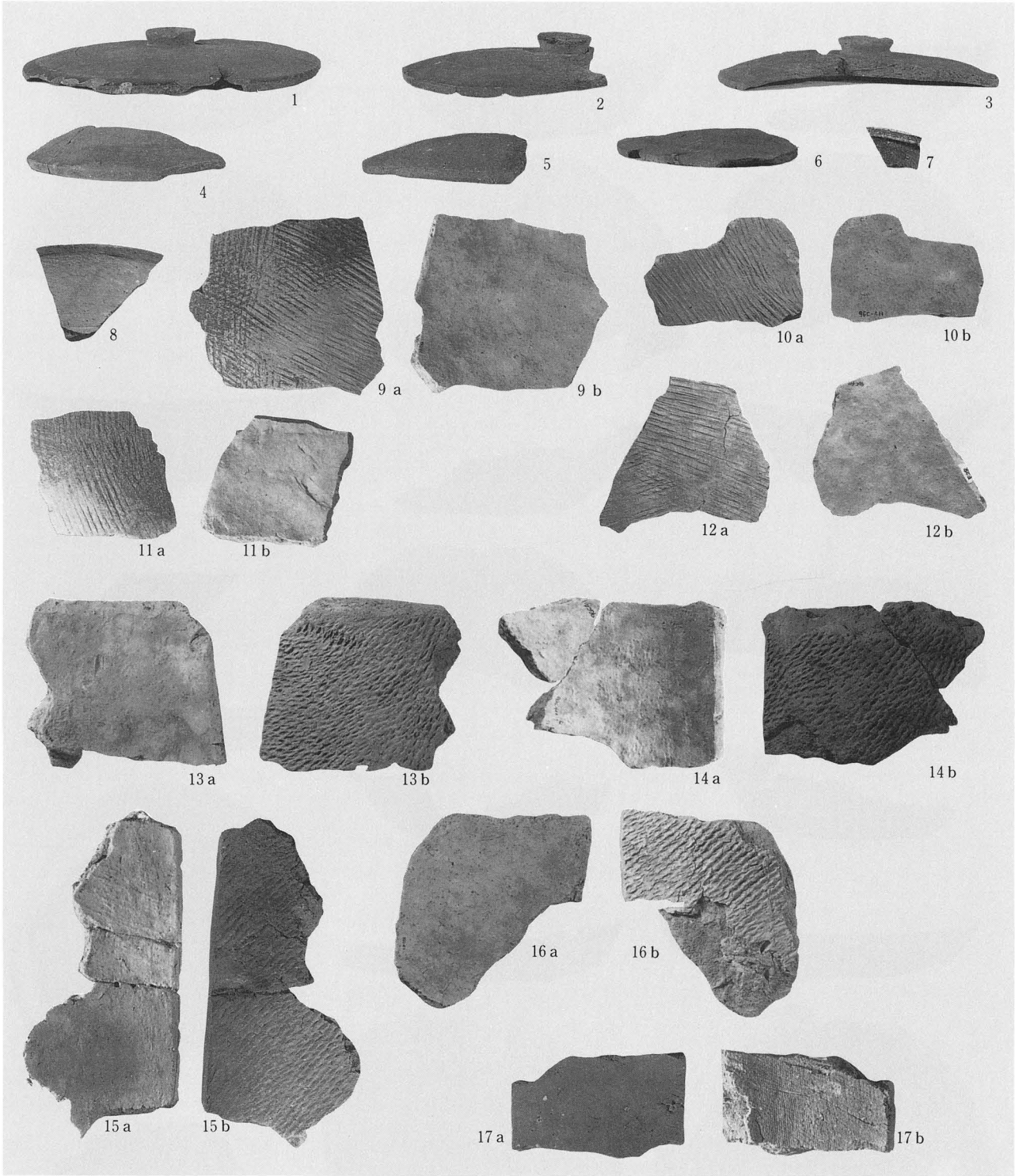
3　遺物出土地点（南西より）

図版11　調査状況



1須恵器 坏 E－1（第25図2）　2須恵器 坏 E－2（第25図3）　3須恵器 坏 E－3（第25図4）　4須恵器 坏 E－8（第25図10）
5須恵器 坏 E－5（第25図7）　6須恵器 坏 E－10（第25図1）　7須恵器 坏 E－4（第25図6）　8須恵器 坏 E－6（第25図8）
9須恵器 坏 E－9（第25図5）　10須恵器 高台付坏 E－14（第25図14）　11須恵器 高台付坏 E－12（第25図12）　12須恵器 高台付坏 E－11（第25図11）
13須恵器 高台付坏 E－16（第25図16）

図版12　出土遺物1（須恵器）



1須恵器 蓋 E－17(第26図4)　2須恵器 蓋 E－18(第26図3)　3須恵器 蓋 E－19(第26図2)　4須恵器 蓋 E－22(第26図6)　5須恵器 蓋 E－21(第26図5)
6須恵器 蓋 E－20(第26図1)　7須恵器 壺 E－23(第26図7)　8須恵器 鉢 E－24(第26図8)　9須恵器 甕 E－27(第26図10)　10須恵器 甕 E－26(第26図11)
11須恵器 甕 E－25(第26図9)　12須恵器 甕 E－28(第26図12)　13瓦類 平瓦 G－2(第27図1)　14瓦類 平瓦 G－1(第27図2)　15瓦類 平瓦 G－4(第27図4)
16瓦類 平瓦 G－3(第27図3)　17瓦類 熨斗瓦 G－5(第27図5)

図版13　出土遺物2（須恵器・瓦）

Ⅳ　杉土手（３次）・北前遺跡（５次）調査報告書

１　調査要項

遺跡名	杉土手・北前遺跡（宮城県遺跡番号０１３８２・０１０７７）
調査地点	仙台市太白区山田北前町1046－12・1044－１
調査原因	宅地造成
調査対象面積	270㎡
調査面積	85㎡
調査期間	平成８年５月13日～５月24日
調査主体	仙台市教育委員会
調査担当	仙台市教育委員会文化財課
担当職員	篠原信彦　工藤哲司
調査参加者	伊勢みつ・大友節子・岡　まり子・小島登喜子・菅家婦美子・小池房子・高橋ヨシ子 千田あや子・牧　かね子
調査協力	地権者　鈴木文男

２　調査に至る経過

平成７年５月31日付けで、仙台市太白区山田北前町６－５鈴木文男氏より、仙台市太白区山田北前町1046－12・1044－１地内における宅地造成に伴う北前遺跡・杉土手の発掘届が提出された。

北前遺跡は、過去の調査において、旧石器や縄文時代早期末の住居跡・中期後葉の住居跡・平安時代の須恵器窯等が発見されており、さらに開発予定地には、江戸時代に築造された杉土手も良好な状態で残っている。そこで、仙台市教育委員会では申請者の鈴木氏と協議を行い、すでに削平されている部分を除き、工事に伴い破壊される部分について事前に発掘調査を実施することとした。

３　遺跡の位置と環境

１）地理的環境

今回の調査を行った遺跡は、仙台市太白区山田北前町地内に所在する。この地点は、仙台市の南西部にあたり、ＪＲ東北本線長町駅の西方約５㎞の沖積平野を望む丘陵上に位置する。

奥羽山系の南大東岳付近に源を発する名取川は、奥羽山脈西麓の丘陵を、北側の青葉山丘陵と南側の高館丘陵とに分けて、「余方」付近から宮城野海岸平野と呼ばれる沖積平野に流れ込む。ここから広がる扇状地性の沖積面は名取川左岸では「郡山低地」、右岸では「名取低地」と呼ばれている。青葉山丘陵の東裾部には段丘地形が発達しており、古期から青葉山段丘・台ノ原段丘・上町段丘・中町段丘・下町段丘と命名されている。

北前遺跡は、青葉山丘陵の東南部に続く標高60～70ｍの段丘に立地する。段丘の東南には扇状地性の沖積地が広がり、段丘面と沖積面との比高差は20ｍ前後である。北前遺跡の立地する段丘については、現在上町段丘に比定されている。段丘面は北から南に向かって緩やかに下がって傾斜し、国道286号線を挟んで南に位置する山田上ノ台遺跡に続いている。遺跡の北東部は沢によって丘陵部と分断される。

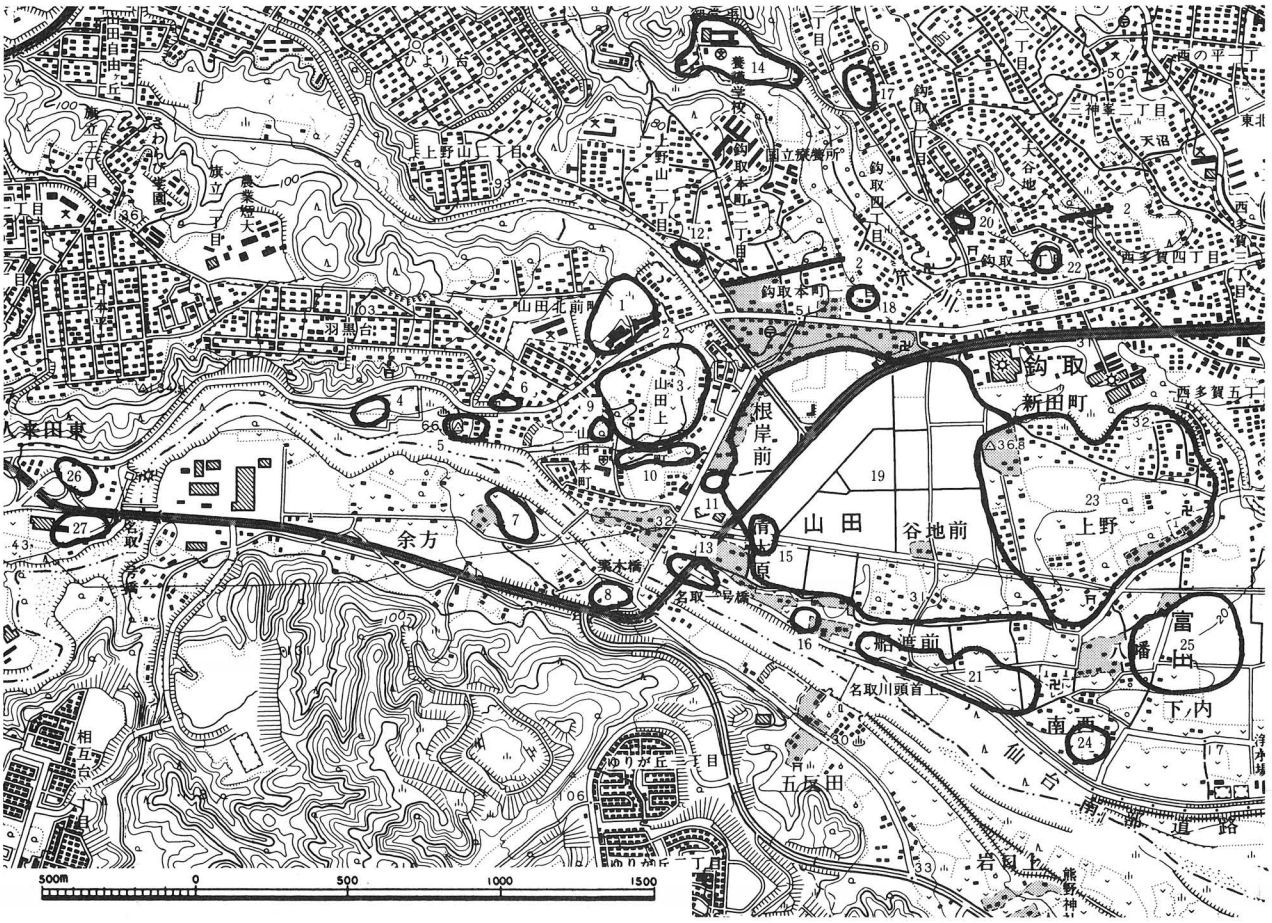
２）歴史的環境

調査地点は名取川が仙台平野に流入する地点の高台に当たり、自然環境に恵まれて多数の遺跡が存在する。遺跡の

南側に接続する山田上ノ台遺跡では約３万年前に降下したとされる「川崎スコリア層」よりも下の地層から石器が発見され、日本に前期旧石器が存在したことを証明した遺跡として有名である。また同遺跡からは後期旧石器時代の石器や縄文時代中期の集落も発見されている。北前遺跡の東方約１㎞の上野遺跡からも縄文時代中期の住居跡や土坑が多数発見されている。

弥生時代の遺跡としては名取川北岸の船渡前遺跡で前期から中期の土器や石器が多量に出土し、仙台平野でも最古の遺跡として知られている。遺跡の東方約３㎞の富沢遺跡では弥生時代中期頃から水田が営まれている。古墳時代は、山田地区では遺跡の実態は不明であるが、富沢遺跡周辺に集落や古墳が多数認められる。平安時代になるとふたたび山田上ノ台遺跡・船渡前遺跡・御堂平遺跡などで集落跡が発見されている。御堂平遺跡では仏堂の可能性のある礎石建物も発見されている。

以上のように山田地区は前期旧石器時代以来、現在に至るまで連綿として生活が営まれた地域に位置している。



番号	遺跡名	立地	時代	番号	遺跡名	立地	時代
1	北前	段丘	旧石器（前期・後期）・縄文（早期・前期・中期）・平安・江戸	14	御堂平	丘陵斜面・段丘	縄文（中期）・平安・中世
				15	竹の内前	段丘	奈良～平安
2	鹿落土手（杉土手）	丘陵・段丘	江戸	16	清田原東	段丘	縄文・平安
3	山田上ノ台	段丘	旧石器（前期・後期）・縄文（早期・前期・中期・後期）・奈良・平安・近世	17	紙流山	段丘	縄文
				18	町	段丘	縄文・古墳・平安
4	羽黒堂	段丘	縄文・奈良～平安	19	山田条里遺構	段丘	奈良？
5	羽黒堂Ａ	段丘	縄文・古墳・平安	20	後田	段丘	奈良～平安
6	羽黒堂Ｂ	段丘	縄文・古墳・平安	21	船渡前	段丘	縄文（中期・後期）・弥生・奈良～平安
7	下中東	段丘	縄文・奈良～平安	22	八幡	段丘	古墳・平安
8	余方	段丘	奈良～平安	23	上野	段丘	縄文（中期）・奈良・平安
9	山田上ノ台塚	段丘		24	富田南西	自然堤防	奈良～平安
10	汚田通Ａ	段丘	縄文・平安	25	南ノ東	自然堤防・後背湿地	弥生・平安
11	汚田通Ｂ	段丘	平安	26	人来田Ｃ	段丘	縄文・古墳・平安
12	上野山	段丘	縄文	27	人来田東	段丘	縄文・奈良～平安
13	清田原西	段丘	縄文・平安				

第28図　杉土手・北前遺跡と周辺の遺跡

4　過去の調査経過

杉土手と北前遺跡は、過去にそれぞれ２次と４次の調査が行われ、各調査ではそれぞれ下表のような調査成果が得られている。

杉土手調査抄

調査次数・年	調　査　内　容
１次（1986）	調査地点：太白区山田字杉土手５番地 調査成果：１　現状の基底幅は約９ｍ、高さ1.5～３ｍで、Ⅰ期からⅢ期の積土を確認。 ・Ⅰ期は高さ1.7m、基底幅3.5m。 ・Ⅱ期は高さ1.9m、基底幅5.3m。 ・Ⅲ期は高さ2.1m、基底幅6.1m。 ・Ⅱ期、Ⅲ期の積土は、Ⅰ期の北側を中心として盛っている。 ２　土手の総延長は、向山公園から山田本町付近までの6.4㎞であることを確認。 ３　土手の構築年代についての発掘資料は得られなかったが、文献、土手の杉の年輪測定資料等から江戸時代中期以前に逆上る可能性を指摘。 ４　土手基底部の火山灰層（黄褐色土）上面で、平安時代の窯跡とピットを検出。
２次（1991）	調査地点：太白区山田北前1045－１ 調査成果：１　１次調査区の東側に約70m残存。 ２　１次調査同様に３時期の積土を確認。 ・Ⅰ期は高さ1.7m、基底幅3.4m。 ・Ⅱ期は高さ1.8m、基底幅4.8m。 ・Ⅲ期は高さ2.0m、基底幅6.0m。 ３　Ⅰ期の積土の北側（山側）に、土手と平行にのびる幅約1.5mの溝を検出。この溝については、土手構築に伴う掘り込みの可能性を指摘。 ４　土手の構築年代についての発掘資料は得られなかった。

第29図　遺跡周辺の地形と調査地点

北前遺跡調査抄

調査次数・年	発見遺構	出土遺物
1次（1981）	調査地点　：太白区山田字北前46－12 旧石器時代：・前期　15層，17層 ・後期　5層 縄文時代　：・早期―竪穴住居跡　8棟 土坑　10基 遺物包含層 ・前期―土坑　23基 ・中期―竪穴住居跡　2棟 埋設土器 竪穴遺構　1基 平安時代　：　―竪穴住居跡　2棟 土坑　2基 江戸時代　：　―溝跡　8条 墓壙　8基 工房跡　1基	・前期旧石器―石斧，スクレイパー，剥片，石核 ・後期旧石器―ナイフ，スクレイパー，ノッチ，二次加工のある剥片 ・縄文土器　―早期，中期 ・縄文石器　―ポイント，石鏃，篦状石器，スクレイパー，楔形石器，石核，凹石，敲石 ・土師器　・土師質土器 ・磁器　・古銭 ※　土手の法面下端部を切っている溝跡の底面から、鉄製寛永通宝が出土したことにより、土手の構築年代を江戸時代中期以前と推定。
2次（1986）	調査地点　：太白区山田字杉土手5番地 縄文時代　：・中期―ピット　1基 平安時代　：　―須恵器窯跡　1基 （半地下式窖窯）	・縄文土器　―中期 ・須恵器　―甕，鉢，坏，台付坏
3次（1988）	調査地点　：太白区北前町7－2 縄文時代　：・中期―竪穴住居跡　3棟 土坑（中期他）12基	・縄文土器　―早期，前期，中期 ・縄文石器　―石斧，石鏃，凹石，磨石他 ・土師器（平安）
4次（1991）	調査地点　：太白区山田北前町1045－1 遺構なし	・縄文土器・二次加工のある剥片・石製品

5　調査方法

北前遺跡にかかる杉土手は、調査地点で杉土手2次調査地点を西端として、そこから東方に約50mの範囲が残存している。今回の工事では残存部のうち、東側約25mに掘削が及ぶため、この部分の杉土手とその下層の北前遺跡を調査対象とした。

杉土手2次調査で、この地域における下層遺構（北前遺跡）は希薄であることが確認されているので、今回の調査では全面に調査区を設定せず、調査対象範囲の中央に10m×10mの調査区を設けて調査を行った。調査の目的は

①杉土手の断面を精査して積土の観察をする。

②杉土手の上面を精査して、土手上面における杭列等の施設の有無を確認する。

③杉土手の下層（基盤層）における遺構の有無を確認し、必要な場合はその調査をする。

④基盤層（火山灰層）を掘り下げて旧石器の有無を確認する。

こととした。

調査区の西側半分は、重機により土手の積土を基盤層上面まで除去した。東側半分の積土は、表土層を重機で除去した後、土手の上面を人力により5㎝ずつ数度掘り下げて精査をした。西半部の基盤層（火山灰層）は、南北4m、東西2mの範囲を基底礫層まで掘り下げた。

6　基本層位

表土層は、杉土手積土の崩落土を含む黒褐色ないし暗褐色シルトからなる耕作土層で、西壁面で４層に細別できる。土手の頂部から南側斜面にかけては、耕作のための削平によって表土がなくなり、積土層と考えられる土層が露出している。

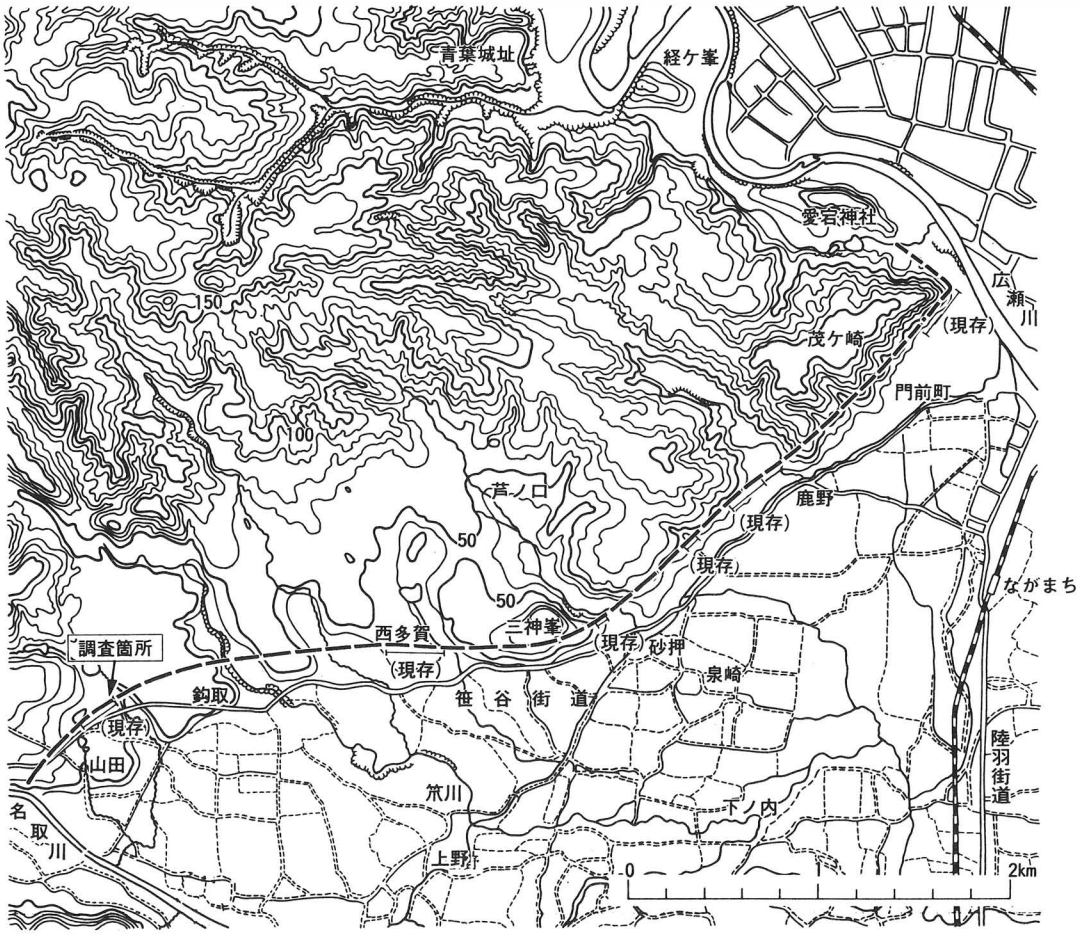
表土の下層は、調査区の大半は杉土手の積土層となり、後で詳述するように大別３層（古い順にⅠ期・Ⅱ期・Ⅲ期の３時期）の積土が確認された。Ⅰ期の積土層の下部には約50㎝の厚さの旧表土層がある。旧表土層は、黒褐色ないし暗褐色のシルトまたは粘土質シルト層で、３層に細分可能である。Ⅰ期の積土層の南北両側の旧表土は、土手構築の際に積土の素材として掘削されたものと考えられ、失われている。

旧表土の下層は、黄褐色のシルトないし粘土質シルトを主体とする基盤の火山灰層となる。旧表土３層下部から基盤火山灰層上部にかけての土層変化は漸移的である。基盤層の上面は、山側にあたる北から、谷にあたる南に向かって緩やかに傾斜して下がっている。基盤の火山灰層の層厚は、約180㎝あり、大別５層、細別11層に分けられる。火山灰層の下層は、直径が３～30㎝の礫からなる段丘礫層となる。段丘礫層上面も北から南に向かって緩やかに傾斜している。

7　杉土手の調査

１）調査前の現状

調査地点付近の杉土手は、約50ｍの範囲が南西～北東方向（Ｎ－46°－Ｅ）で直線的に残る。残存する土手の東西両端は、宅地造成のために削平を受けている。西側の宅地造成に際しては、杉土手２次調査・北前遺跡４次調査とし

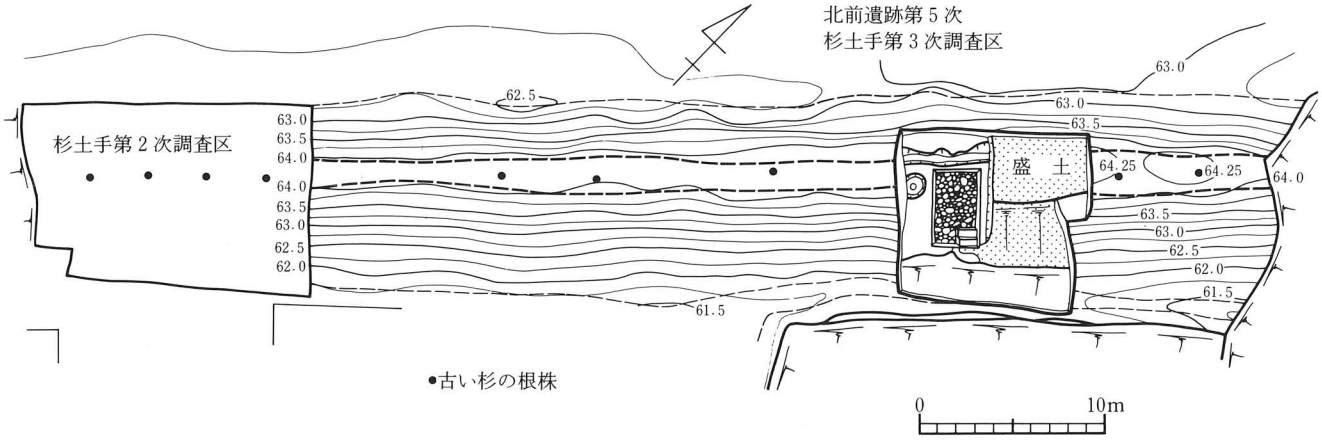


第30図　杉土手全長想定図　大日本帝国陸地測量部明治38年測図
同40年度発行「二万分の一」地形図より作成

て、発掘調査が行われている。

この付近の杉土手の規模は、基底幅10m・上面幅約２m・高さは山側（北側）から測って1.5m、谷側（南側）から測って約2.5mある。表面は表土が削られて積土が露出している部分と、表土を集積して畑地になっている部分がある。このほか、多数の庭木栽培も行われている。土手の頂部には、直径１m程の杉の古い切り株が列をなしている。また、土手の全面には最近伐採したという樹齢20～30年の新しい切り株が、畑や庭木の間に点在する。

今回の調査は、残存部の東側半分に係わる。この部分は、杉土手とその下部の北前遺跡に関係する遺構・遺物が残存するが、土手の南側に存在した北前遺跡の一部は既に宅地造成によって失われている。

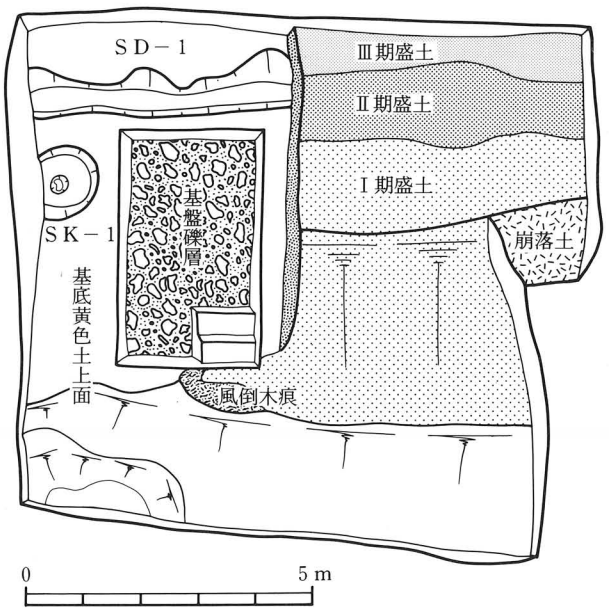


第31図　杉土手平面図と調査区配置図

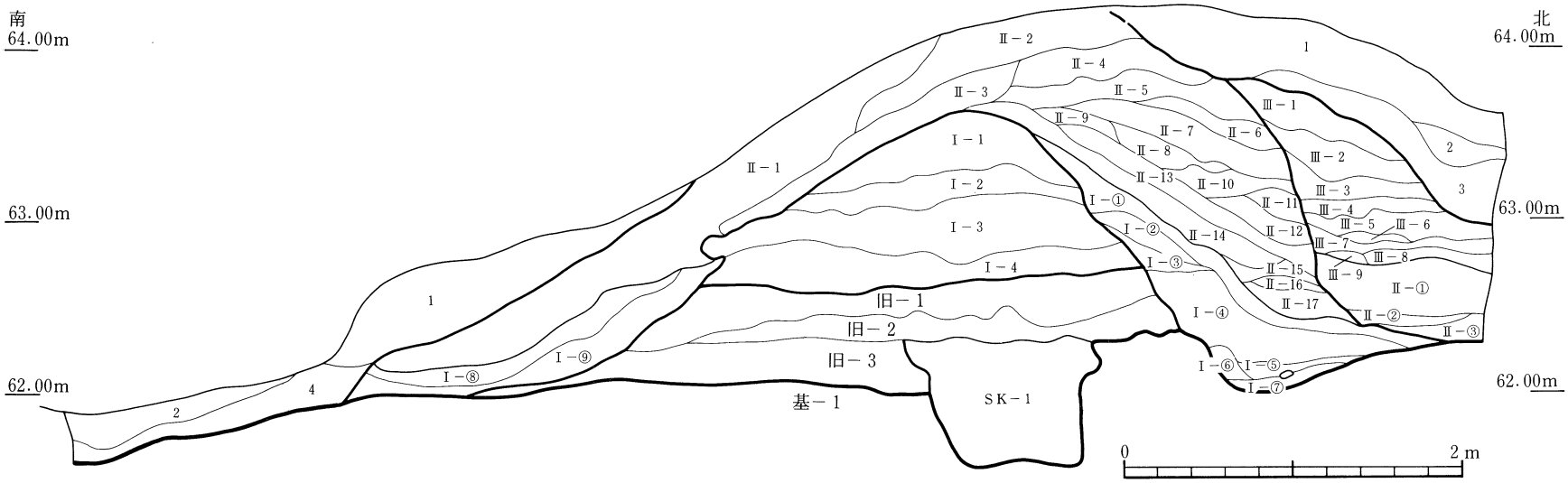
２）積土断面と規模

積土層　土手の積土は第33図のとおりに細分され、土層注記に示したように３時期に大別されるものと理解した。Ⅰ期は、Ⅰ－１層からⅠ－４層が積土で、北側のⅠ－①層からⅠ－⑦層と南側のⅠ－⑧層からⅠ－⑨層がその崩落土と考えられる。積土は、褐色土と暗褐色土が互層状に水平に積み上げられている。積土の南北両側の旧表土は、削平を受けてなくなっており、北側では掘削が基盤の火山灰層にまでおよび、幅約80cm・深さ20cmの溝状の窪みとなっている（第32図・ＳＤ－１）。旧表土及び基盤火山灰層の掘削は、積土の素材を得ると同時に、土手の相対的な高さを増加させることを目的としているものと考えられる。

Ⅱ期は、Ⅱ－１層からⅡ－17層が積土で、積土北側のⅡ－①層からⅡ－③層がⅡ期積土の崩落土と考えられる。Ⅱ期の北側の積土は、Ⅰ期の崩落土の上に、崩落土の傾斜に沿うように暗褐色ないし黒褐色の比較的薄い層を細かく斜めに積み上げ、頂部付近に至って水平に積んでいる。これに対して南側の積土は、北側からの積土層とⅠ期積土及び崩落土を覆うように、褐色土を主とする広く厚い土層を傾斜面に沿って張りつけるように積んでいる。Ⅱ期の崩落土は、積土の北側では裾部に40～50cmの厚さで堆積しているが、南側の崩落土は明らかでない。既に削



第32図　調査区平面図



大別	No.	土色	土質	備考
現表土	1	10YR2/3 黒褐色	シルト	
	2	10YR2/3 黒褐色	シルト	褐色の粘土質シルトをブロック状に含む
	3	10YR2/3 褐色	シルト	褐色の粘土質シルトを少量含む
	4	10YR3/4 褐色	シルト	
Ⅰ期積み土	Ⅰ－1	10YR3/4 暗褐色	シルト	褐色の粘土質シルトを全体に含む
	Ⅰ－2	10YR3/4 暗褐色	シルト	黒褐色のシルトを、褐色の粘土質シルトをつぶ状に含む
	Ⅰ－3	10YR3/4 暗褐色	シルト	褐色の粘土質シルト帯状に含む
	Ⅰ－4	10YR3/4 暗褐色	シルト	土器片を含む
Ⅰ期積み土崩落土	Ⅰ－①	10YR3/3 暗褐色	シルト	褐色の粘土質シルトをつぶ状に含む
	Ⅰ－②	10YR3/2 暗褐色	シルト	
	Ⅰ－③	10YR3/4 暗褐色	シルト	褐色の粘土質シルトを少量含み、炭化物を少量含む
	Ⅰ－④	10YR3/4 暗褐色	シルト	炭化物、焼土粒を少量含む
	Ⅰ－⑤	10YR3/3 暗褐色	粘土質シルト	炭化物を少量含み、褐色のシルト質粘土を下層部に含む
	Ⅰ－⑥	10YR3/4 暗褐色	粘土質シルト	粘土質シルトを全体に含む
	Ⅰ－⑦	10YR5/8 黄褐色	粘土質シルト	暗褐色の粘土質シルトを全体に含む
	Ⅰ－⑧	10YR2/3 黒褐色	シルト	
	Ⅰ－⑨	10YR3/4 暗褐色	シルト	焼土、炭化物を少量含む
Ⅱ期積み土	Ⅱ－1	10YR4/6 褐色	粘土質シルト	暗褐色のシルトをブロック状に含む
	Ⅱ－2	10YR2/3 黒褐色	シルト	
	Ⅱ－3	10YR3/3 暗褐色	シルト	
	Ⅱ－4	10YR3/4 暗褐色	シルト	
	Ⅱ－5	10YR3/3 暗褐色	シルト	
	Ⅱ－6	10YR3/3 暗褐色	シルト	褐色の粘土質シルトをブロック状に含む
	Ⅱ－7	10YR3/3 暗褐色	シルト	褐色の粘土質シルトを部分的に含む
	Ⅱ－8	10YR3/3 暗褐色	シルト	褐色の粘土質シルトをブロック状に含む
Ⅱ期積み土	Ⅱ－9	10YR2/3 黒褐色	シルト	
	Ⅱ－10	10YR3/3 暗褐色	シルト	
	Ⅱ－11	10YR3/4 暗褐色	シルト	褐色の粘土質シルトをブロック状に含む
	Ⅱ－12	10YR2/3 黒褐色	シルト	炭化物を少量含む
	Ⅱ－13	10YR3/3 暗褐色	粘土質シルト	褐色の粘土質シルトをブロック状に全体に含み、炭化物を少量含む
	Ⅱ－14	10YR3/4 暗褐色	粘土質シルト	褐色の粘土質シルトを小ブロック状に含み、炭化物を少量含む
	Ⅱ－15	10YR3/4 暗褐色	シルト	
	Ⅱ－16	10YR3/3 暗褐色	シルト	
	Ⅱ－17	10YR3/3 暗褐色	シルト	炭化物を少量含む
Ⅱ期積み土崩落土	Ⅱ－①	10YR3/4 暗褐色	シルト	炭化物、焼土を少量含む
	Ⅱ－②	10YR2/3 黒褐色	シルト	炭化物、焼土粒を少量含む
	Ⅱ－③	10YR3/4 暗褐色	シルト	
Ⅲ期積み土	Ⅲ－1	10YR2/3 黒褐色	シルト	
	Ⅲ－2	10YR3/3 暗褐色	シルト	黄褐色の粘土質シルトを一部に含む
	Ⅲ－3	10YR3/3 暗褐色	シルト	黒褐色のシルトを部分的に含む
	Ⅲ－4	10YR3/3 暗褐色	シルト	
	Ⅲ－5	10YR2/3 黒褐色	シルト	褐色の粘土質シルトを小ブロック状に含む
	Ⅲ－6	10YR2/2 黒褐色	シルト	
	Ⅲ－7	10YR3/4 暗褐色	シルト	
	Ⅲ－8	10YR2/3 黒褐色	シルト	
	Ⅲ－9	10YR2/3 黒褐色	シルト	褐色の粘土質シルトをブロック状に含む
旧表土	旧－1	10YR2/3 黒褐色	シルト	焼土、炭化物を少量含む
	旧－2	7.5YR3/3暗褐色	粘土質シルト	炭化物、焼土を少量含む
	旧－3	10YR3/4 暗褐色	粘土質シルト	褐色の粘土質シルトをブロック状に含む、土器片を含み、炭化物、焼土を少量含む
基底層	基－1	10YR5/8 黄褐色	粘土質シルト	

第33図　調査区西壁土層断面図

平されている可能性が高い。

Ⅲ期は、Ⅲ－1層からⅡ－9層が積土で、Ⅱ期積土の北側だけに存在する。ほぼ水平に堆積しているⅡ期崩落土のⅡ－①層上面からほぼ水平に積み上げている。積土は下部は薄いが上部になるにしたがって厚くなる。Ⅲ期積土の残存高は、Ⅱ期積土残存頂部より約45cm低いが、1次・2次調査の断面観測結果を参考にすると、本来はⅠ期よりもⅡ期、Ⅱ期よりもⅢ期になるにつれて高く積まれていたと推定される。Ⅲ期積土の崩落土は不明確であるが、現表土層が直接あるいは間接的にこれにあたる可能性が考えられる。

規　模　調査区西壁で測った当地区の土手の規模は下表の通りである。なお、高さは南側の基盤層を基準とし、幅は、裾部の傾斜の変換点から計測した。Ⅰ期以外の計測値は、本来の規模との誤差が大きいので、それらについては（　）書きにし、不明のものは空欄とした。土手の規模を良く表す例としては、1次調査（Cトレンチ）と2次調査の資料があるので、その計測値を参考として掲載した。

杉土手の規模

時期	調査次数	基底部幅	頂部幅	高さ	法面の傾斜角度（南側斜面・北側斜面）
Ⅰ期	1次調査	3.5m	(1.2m)	1.0m	25°・75°
	2次調査	3.4m	0.8m	1.7m	40°・40°
	3次調査	4.4m	0.5m	1.6m	31°・52°
Ⅱ期	1次調査	5.3m	1.7m	1.9m	30°・65°
	2次調査	4.8m	2.4m	1.8m	40°・40°
	3次調査	5.7m	——	2.2m	30°・64°
Ⅲ期	1次調査	6.1m	2.0m	2.1m	(25°)・(61°)
	2次調査	6.0m	2.0m	2.0m	40°・37°
	3次調査	——	——	1.8m＋α	——・40°

3）積土上部の遺構

杉土手は後述するように鹿除土手として、土手に柵を構築したことに関係する文書があるので、これにかかわる遺構の確認のため、調査区の東側半分について、土手の頂部から斜面にかけての精査を数度行った。ただし、現地表近くの積土は植林された杉等の樹木の根による撹乱が著しく、遺構検出作業が行い得たのは頂部・斜面とも現地表から約50cmほど下がった面からである。精査は根による撹乱が少なくなった面を綺麗にし、杭列の有無の確認を5cm掘り下げるたびに繰り返した。この結果、積土の上部において3時期の積土を平面的にも確認することができたが、柵列に係わる遺構は検出されなかった。

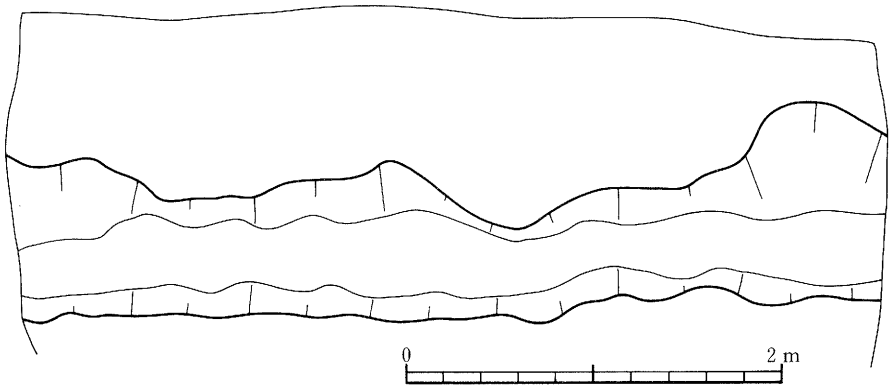
この調査では、杉土手に関係する遺構は発見できなかったが、この付近の旧表土および火山灰層を積み上げて築いた積土上部層を精査したにも係わらず、古代またはそれ以前の遺物が含まれている量がすくないことから、付近における北前遺跡の遺構・遺物密度が希薄であることが推定された。

8　北前遺跡の調査

北前遺跡にかかわる調査は、基盤層（火山灰層）上面で検出された遺構の調査と、基盤層（火山灰層）における旧石器の調査を行った。

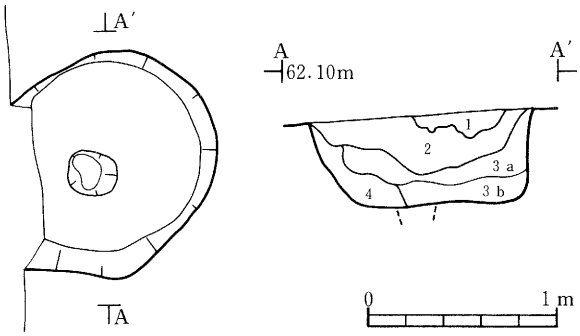
1）基盤層上面検出遺構

基盤層上面では、先に記した杉土手Ⅰ期積土のための掘削に係わる溝状の遺構と土坑が1基検出されている。



第34図　ＳＤ－１溝跡平面図

ＳＤ－１溝跡　上記のとおり、杉土手Ⅰ期積土の掘削に係わる遺構である。検出面での幅は、50～100cm・平均80cmである。北側の上面は出入りが著しいが、土手の下端線に沿った南側の上端は直線的に揃っている。深さは約20cmで断面形は舟底形を呈する。遺構内にはⅠ期積土からの崩落土が堆積している。出土遺物はない。



層 No.	土　色	土　質	そ　の　他
1	10YR4/4 褐　色	粘土質シルト	黒褐色粘土質シルトを一部に含む
2	10YR3/3 暗　褐　色	粘土質シルト	焼土炭化物を少量含む
3 a	10YR3/4 暗　褐　色	シルト質粘土	黄褐色シルトを斑状に含む、炭化物を少量含む
3 b	10YR3/4 暗　褐　色	シルト質粘土	黄褐色シルトを斑状に含む
4	10YR4/6 褐　色	粘土	
ピット	10YR2/4 暗　褐　色	粘土	炭化物を少量含む

第35図　ＳＫ－１土坑実測図

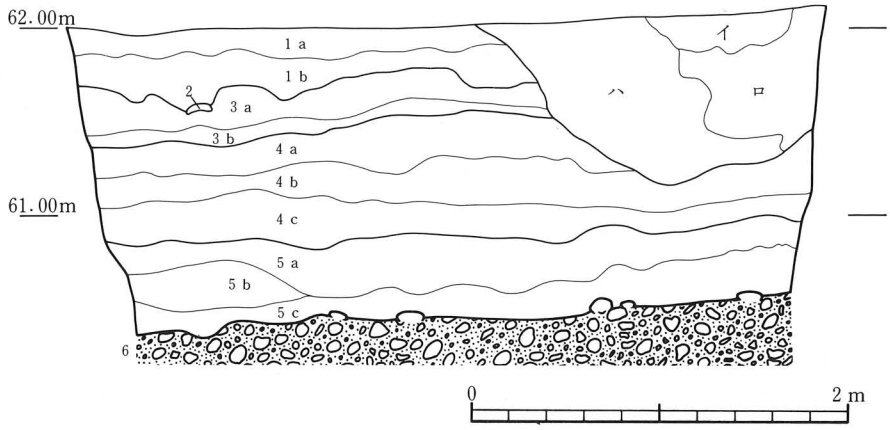
ＳＫ－１土坑　調査区西壁際の土手積土の直下で検出された。西壁の精査の結果、遺構の掘り込み面は、旧表土３層の上面と判断された。平面形は、直径約120cmの円形で、深さは検出面から50cm、掘り込み面から70cmを測り、断面形は箱形を呈する。全体として円筒状の土坑である。堆積土は、４層に分けられる。下部には壁面の崩落土と見られる褐色土が堆積する。上部には旧表土が起源と考えられる暗褐色土が堆積する。いずれも自然堆積層と判断される。土坑の底面はほぼ平坦で、中央に直径約25cm、深さ50cmの小穴がある。遺物は、２層中から縄文土器の細片３点と剥片が１点出土している。

２）基盤層（火山灰層）の調査

基盤層については、４×２ｍのトレンチを入れて調査した。基盤層上面から段丘礫層上面に達するまで170cmあり、土層は大別５層・細別11層に分けられた。１層はにぶい黄褐色ないし黄褐色のシルト質のほぼ均一な土層である。２層は「川崎スコリア層」と呼ばれる黄褐色の砂質シルト層で、調査トレンチの北部には３cm前後の厚さのブロックの堆積層として存在しているが、南部にはほとんど分布していない。３層以下は黄褐色のシルトと粘土からなる土層で、礫を含むようになり、下層ほど礫の径と含有量が多くなる。５ｃ層は明黄褐色の砂層で、水成堆積の可能性がある。

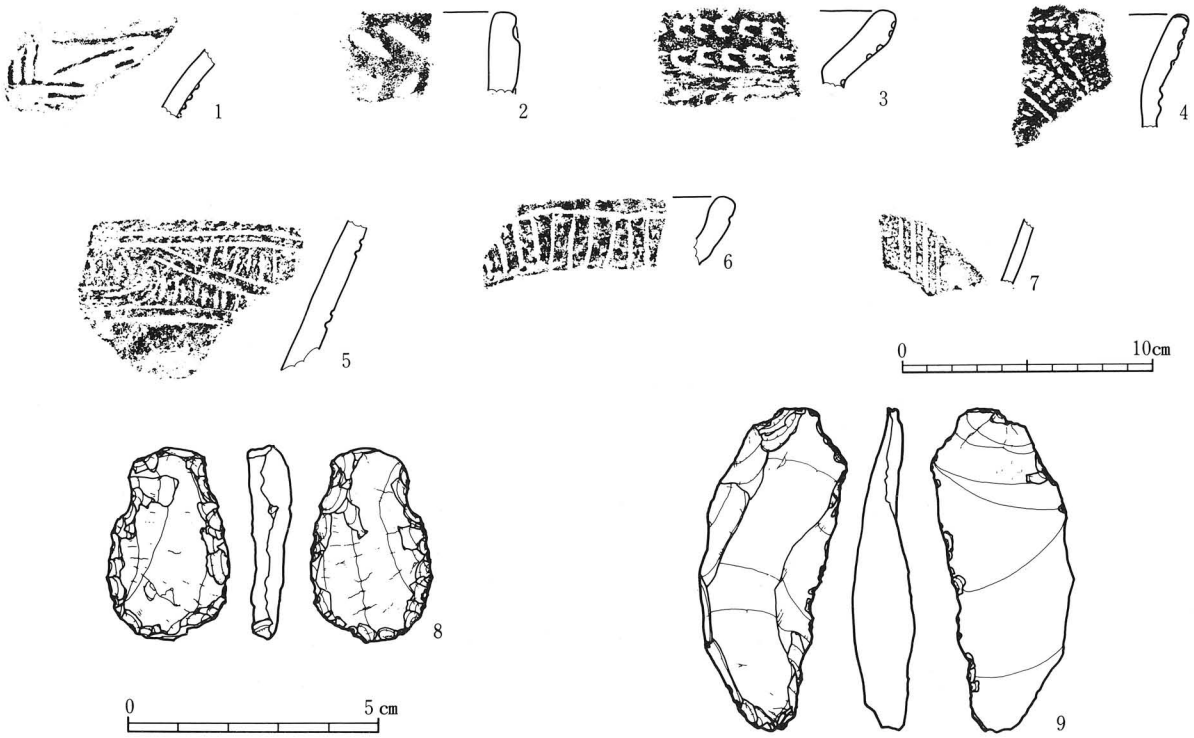
各基盤層は、段丘礫層の傾斜に沿い、緩やかに北から南に下がって傾斜している。段丘礫層は、径が30cmから３cm程の風化した礫で、堅く締まって堆積している。

基盤層は、北前遺跡１次調査の旧表土層から段丘礫層までの堆積層と共通する要素が認められたが、基盤層中から前調査のような前期・後期両旧石器を発見することはできなかった。



層 No.	土　色	土　質	その　他	層 No.	土　色	土　質	その　他
イ	10YR4/6 褐　色	シルト	8㎝～1㎝位の礫を少し含む	4 a	10YR5/4 にぶい黄褐色	シルト質粘土	6㎝～0.5㎝位の礫を多量に含む
ロ	10YR4/6 褐　色	シルト		4 b	10YR5/6 黄　褐　色	粘土質シルト	3㎝～1㎝位の礫をまばらに含む、マンガン粒を少量含む
ハ	10YR4/6 褐　色	シルト		4 c	10YR5/6 黄　褐　色	シルト質粘土	10㎝～0.5㎝位の風化した礫を多量に含む、マンガン粒を含む
1 a	10YR5/4 にぶい黄褐色	シルト	褐色のシルトをブロック状に含む	5 a	10YR6/6 明 黄 褐 色	粘土質シルト	マンガン粒を斑状に含む、酸化鉄を含む
1 b	10YR5/6 黄　褐　色	シルト		5 b	2.5Y7/4 浅　黄　色	粘土質シルト	10～2㎝位の風化した礫を含む、酸化鉄・マンガン粒を少し含む
2	10YR5/6 黄　褐　色	砂質シルト	黄橙色土を含む（川崎スコリアブロック）				
3 a	10YR5/6 黄　褐　色	粘土質シルト	1.5㎝前後の礫を少量含む	5 c	2.5Y6/6　明 黄 褐 色	砂	酸化鉄を多く含む
3 b	10YR5/6 黄　褐　色	粘土	2㎝～1㎝位の礫を少量含む	6	10YR7/8 黄　橙　色	砂礫	30㎝位～3㎝位の礫を多量に含む、段丘礫層

第36図　基底層土層断面図（深掘トレンチ西壁）



番号	登録番号	種別・器種	出土地区	基本層位	出土遺構・層	取上番号	器高・長	口径・幅	底径・厚	重　量	特　　徴	写真図版
1	A－1	縄文土器　鉢		盛土中			3.4	7.0	0.7		3条の細隆帯による文様	16－4
2	A－2	縄文土器　鉢		旧表土			3.6	3.8	1.2		ヘラによる「ハ」字状の連続刺突文	16－4
3	A－3	縄文土器　鉢		盛土中			4.1	5.7	1.2		半裁竹管による2段の押し引き連続刺突文	16－4
4	A－4	縄文土器　鉢		旧表土			5.8	4.1	0.9		半裁竹管による横位・斜位の連続刺突文	16－4
5	A－5	縄文土器　鉢		旧表土			6.6	8.6	1.1		半裁竹管による平行沈線文	16－4
6	A－6	縄文土器　鉢		盛土中			3.8	7.3	1.0		沈線文	16－4
7	A－7	縄文土器　鉢		盛土中			3.5	4.3	0.5		4条の平行沈線文	16－4
8	K－2	石器　スクレイパー			SK－1　2層		3.9	2.4	0.8	7.0		16－4
9	K－1	石器　剥片		旧表土			6.4	2.8	1.2	13.8	2次加工あり	16－4

第37図　出土遺物

３）出土遺物

遺物は、杉土手積土層中と旧表土層中から縄文土器と石器が出土している。

縄文土器は全て小破片で、表面が摩滅しているものが多い。文様のある破片のうち７点を図化した（第37図）。１は３条の平行する細隆帯で縦・横の区間と、その間を弧状に充填する模様を描く。２は直立する厚手の口縁部の破片で、へらによって横位の「ハ」字状の連続刺突文を描いている。３は強く外反する厚手の口縁部の破片で、半裁竹管による２段の押し引き連続刺突文がある。４は緩く外反する比較的薄手の口縁部の破片で、半裁竹管による横位・斜位の押し引き連続刺突文がある。５は半裁竹管による平行沈線の幾何学文様がある。６は端部が内湾する口縁部の破片で、口唇直下に横位沈線が１条引かれ、その線から横に連続して展開する縦位沈線による模様がある。７は、ＬＲ縄文を切って縦にのびる４条の平行沈線文がある。これらの縄文土器のうち、１～６は、１次調査の際に土坑等からまとまって出土した縄文時代前期末の土器群と同期のものと考えられる。また、７については中期中頃の土器と判断される。

石器は、図化した２点と、ＳＫ－１から出土した剥片のほか、積土と旧表土層からも各１点の剥片が出土している。８はＳＫ－１から出土したスクレイパーで、側面の片側の基端部寄りがやや抉られており石匙のような形態をとる。９は片側の側縁に２次加工のある縦長の剥片である。旧表土中から出土している。

９　調査成果のまとめ

１）杉土手の構築年代について

杉土手の構築年代について、北前遺跡１次調査においては、土手を切る溝からの出土遺物によって、江戸時代中期以前と推定されている（注１）。さらに杉土手１次調査においては、

１．『伊達治家記録』に仙台開府以来行われた山追いに際して、鹿除土手が必要と考えらえるので、開府当時構築された。

２．杉土手頂面にある杉の古株と同等の直径の杉の年輪測定結果と、戦時中の伐採記録にある年輪（240～300年）から、寛永の新田開発の頃に構築された。

３．古地図に描かれた杉土手が、元禄10年開山の大年寺惣門に切られているように描かれていることから、元禄10年以前に構築された。

４．『伊達治家記録』に文政のころから山追いの獲物の数が記録されておらず、この頃には鹿・猪が減少し、鹿除土手の必要がなくなっていたと考えられることから文政以前に構築されていた。

という、江戸時代中期をさかのぼる４時期の構築年代が推定され、さらに、土手は２回の補修がなされていることから、長期にわたる使用が考えられている（注２）。杉土手２次調査では、構築年代に係わる新たな資料は発見されなかった。

このような状況にあって相原陽三氏は、

１．『仙台藩家臣録』中に、三瓶伝右衛門という侍が鹿除土手の構築に携わった功績により、明暦２年（1656）８月15日に壱貫三百五十九文の知行地を加増されたという記録がある。

２．仙台市太白区秋保湯本佐勘温泉に伝わる「御山守・湯守佐藤勘三郎家文書」に、御山守をしていた同家に対して明暦２年に、「ほけ」と呼ばれる長さ５尺の棒を、鹿除土手の忍び返しの構築のために50荷提出せよという指示文書がある。

ということから、杉土手の構築年代を二代藩主伊達忠宗治世の明暦２年（1656）頃と考察している（注３）。

今回の調査では、杉土手の構築時期にかかわる新たな考古学的資料は発見できなかったが、上記の２つの論考から、構築時期については、明暦２年以前の年代に絞り込むことが可能となった。ただし、相原氏の提示した文献資料につ

いては、杉土手の３期の構築時期のⅠ期に当たるものか、或いはその後の補修整備としてⅡ期またはⅢ期の可能性がないのかの検討が必要と考えられる。Ⅱ期またはⅢ期に係わる場合は、土手の構築年代はさらに逆上る可能性も考えられる。

２）北前遺跡の調査成果

北前遺跡１次調査区の北側では、縄文時代前期末を中心とする時期の土坑が多数発見されているが、今回の調査で、この時期の土坑がさらに遺跡北東部まで広がっていることが確認された。ただ、今回の調査地点の北側は急な上昇斜面となることと関係するのか、土坑の分布密度は低く１基だけが発見された。

注　記

注１　佐藤　洋（1982）：「北前遺跡」『仙台市文化財調査報告書第36集』Ｐ．157

注２　小川淳一（1987）：「北前遺跡」『仙台市文化財調査報告書第105集』Ｐ．25～30

注３　相原陽三（1995）：「鹿除土手の構築について」『仙臺郷土研究』復刊第20巻２号（通巻251号）Ｐ．９～12

参考文献（上記以外）

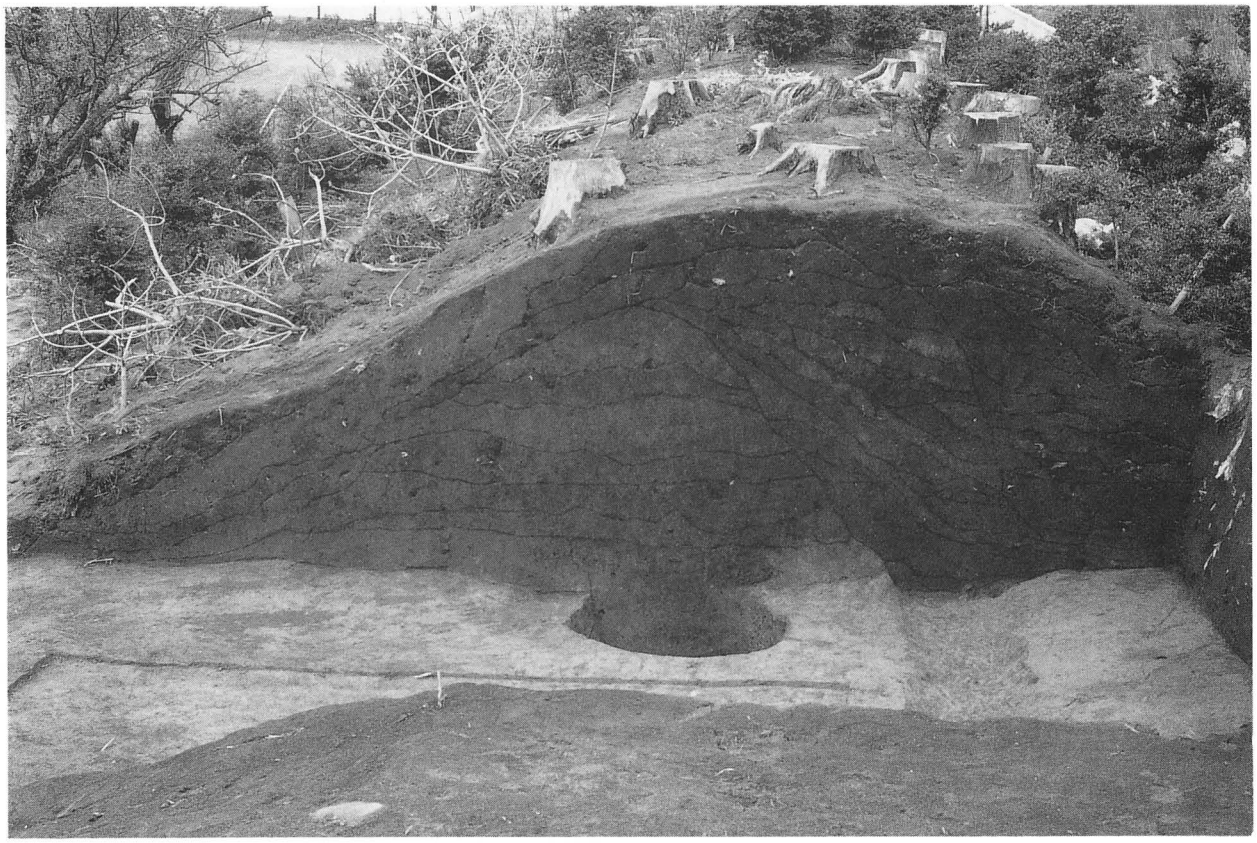
渡部　紀（1989）：「北前遺跡」『仙台市文化財調査報告書第129集』

太田昭夫（1992）：「杉土手・北前遺跡」『仙台市文化財調査報告書第157集』

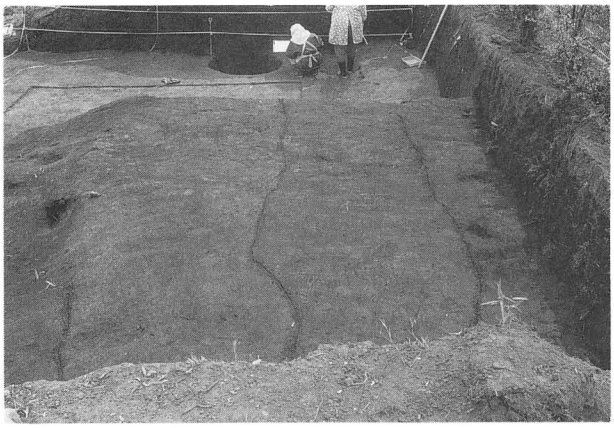
1　調査区全景（西より）

2　調査区全景（東より）

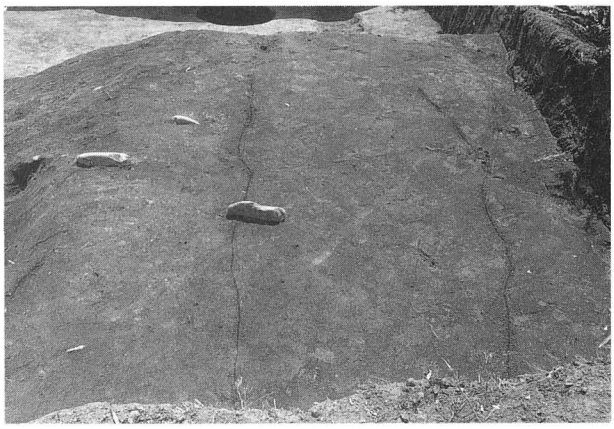
図版14　杉土手全景



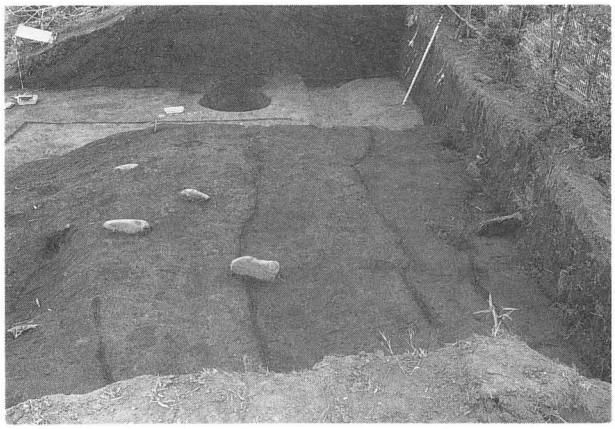
1　杉土手土層断面（西壁）



2　土手積土調査状況①



3　土手積土調査状況②

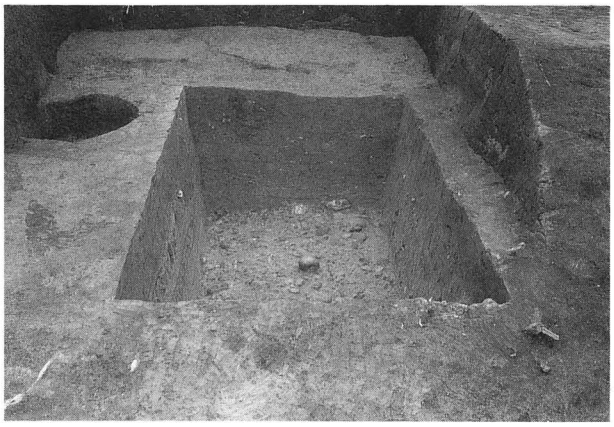


4　土手積土調査状況③

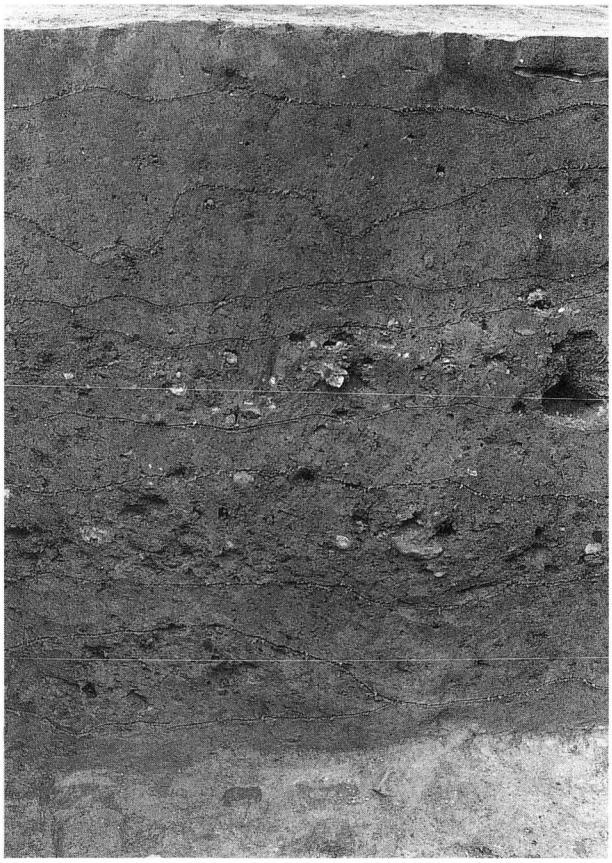
5　ＳＤ－１溝跡

図版15　杉土手断面・調査状況・溝跡

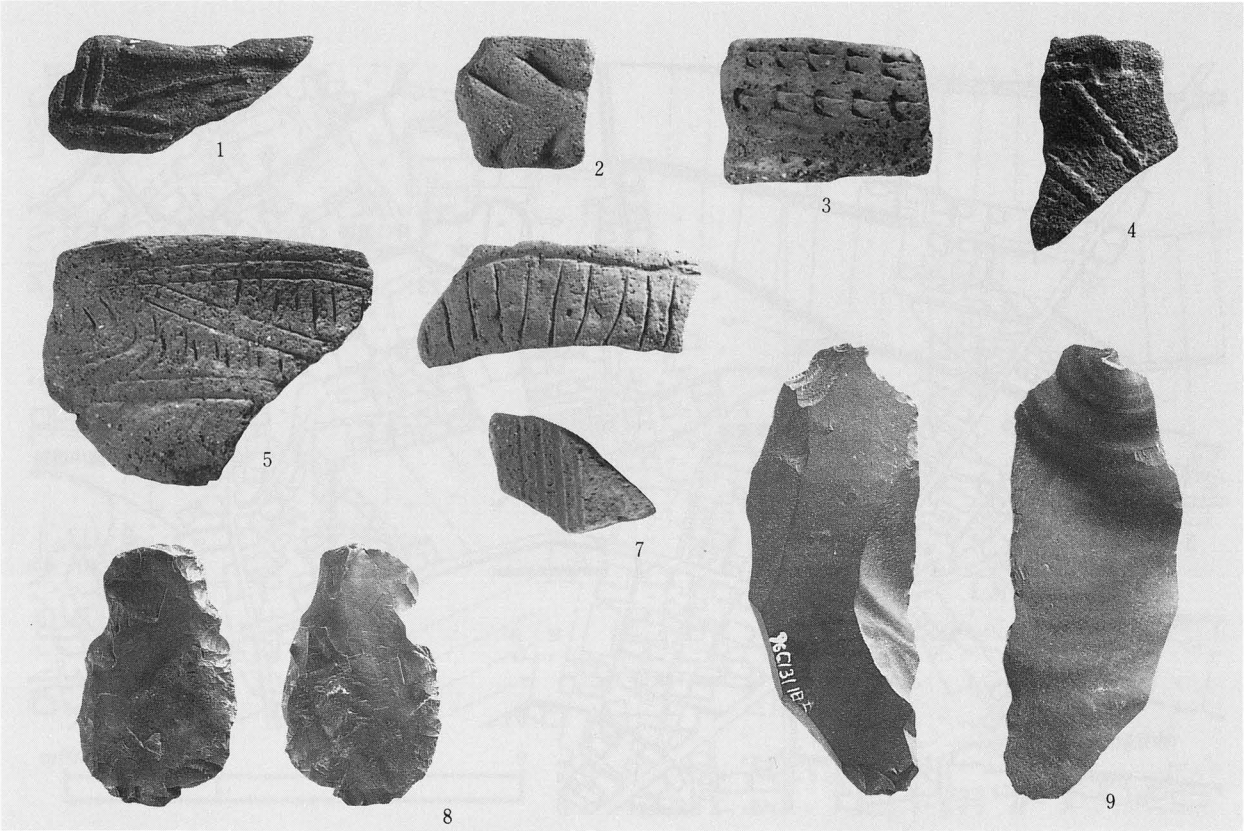
1　ＳＫ－１土坑



2　基盤層調査トレンチ



3　基盤層断面



1縄文土器 鉢 Ａ－１（盛土中・第37図１）　2縄文土器 鉢 Ａ－２（旧表土・第37図２）　3縄文土器 鉢 Ａ－３（盛土中・第37図３）
4縄文土器 鉢 Ａ－４（旧表土・第37図４）　5縄文土器 鉢 Ａ－５（旧表土・第37図５）　6縄文土器 鉢 Ａ－６（盛土中・第37図６）
7縄文土器 鉢 Ａ－７（盛土中・第37図７）　8石器 スクレイパー Ｋ－２（ＳＫ－12層・第27図８）　9石器 2次加工剥片 Ｋ－１（旧表土・第27図９）

4　縄文土器・石器

図版16　土坑・基盤層調査・出土遺物

Ⅴ　押口遺跡（２次）調査報告書

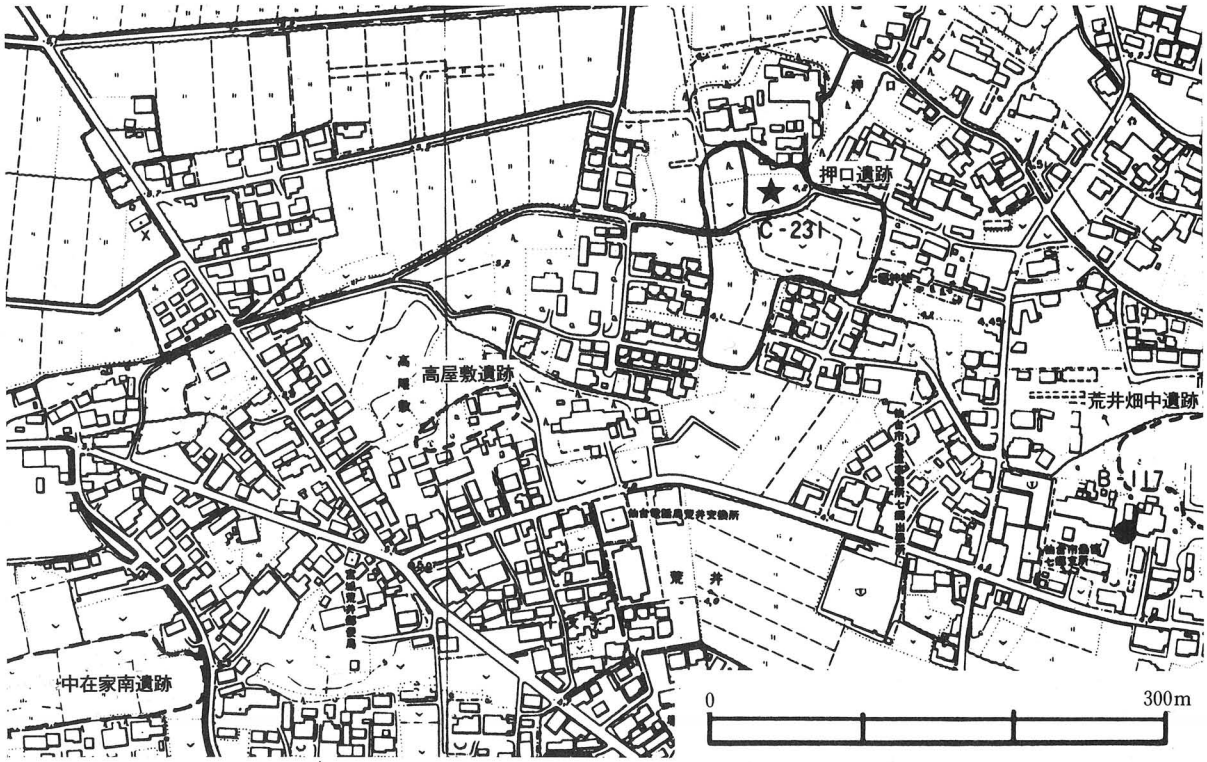
１　調査要項

遺跡名	押口遺跡（宮城県遺跡番号　０１３１２）
調査地点	仙台市若林区荒井字押口28番地
調査原因	共同住宅建設
調査対象面積	400㎡
調査面積	110㎡
調査期間	平成８年５月27日～５月28日
調査主体	仙台市教育委員会
調査担当	仙台市教育委員会文化財課
担当職員	篠原信彦　竹田幸司
調査参加者	佐々木瑞枝　鈴木由美

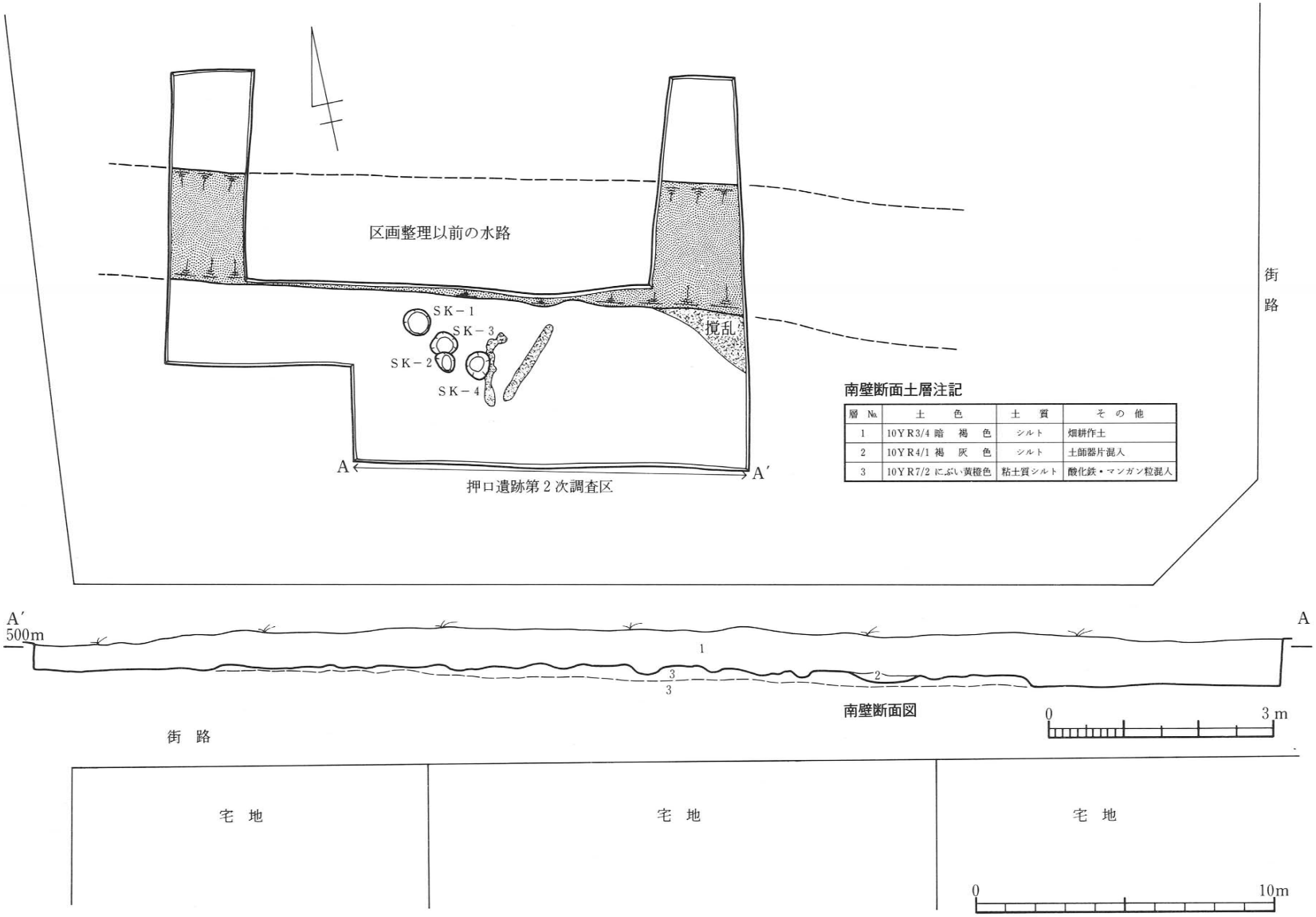
２　遺跡の位置と環境

押口遺跡はＪＲ仙台駅の東南東約5.5㎞の若林区荒井字押口・大場伝に位置し、宮城野海岸平野と呼ばれる沖積平野の標高約4.5ｍの自然堤防上及び河川跡に立地している。

遺跡周辺には、南西約500ｍに中在家南遺跡が位置しており、弥生時代の土壙墓５基、土器棺墓２基、古墳時代前期の方形周溝基３基、土坑、弥生時代中期中頃から近世の期間にかけて埋没した河川跡など発見されている。河川跡



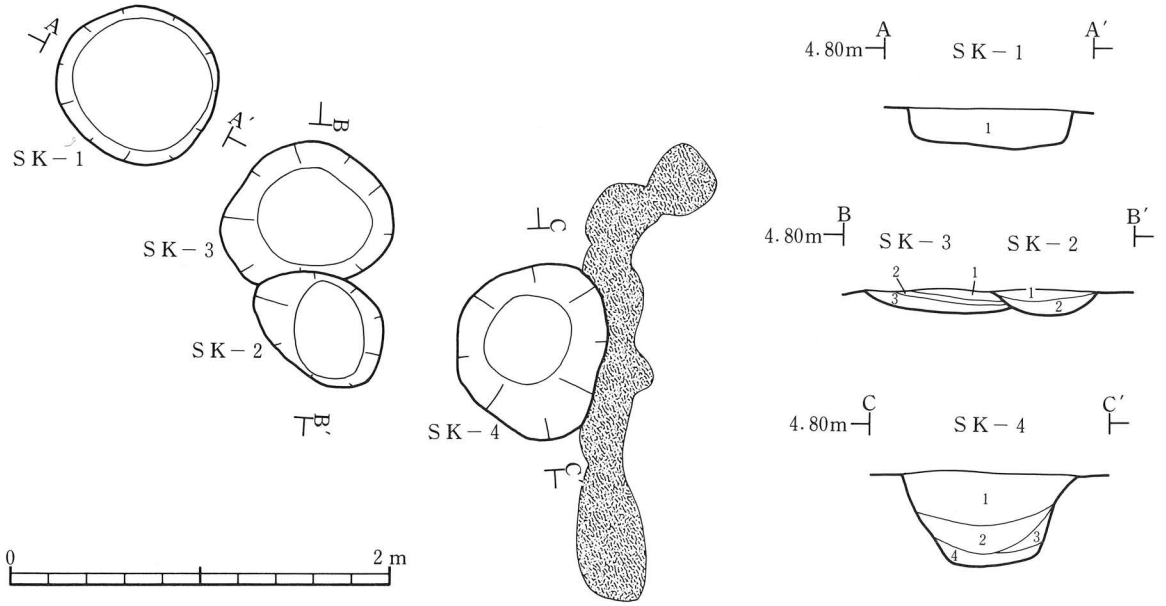
第38図　調査地点と周辺の地形



南壁断面土層注記

層 No.	土色	土質	その他
1	10YR3/4 暗褐色	シルト	畑耕作土
2	10YR4/1 褐灰色	シルト	土師器片混入
3	10YR7/2 にぶい黄橙色	粘土質シルト	酸化鉄・マンガン粒混入

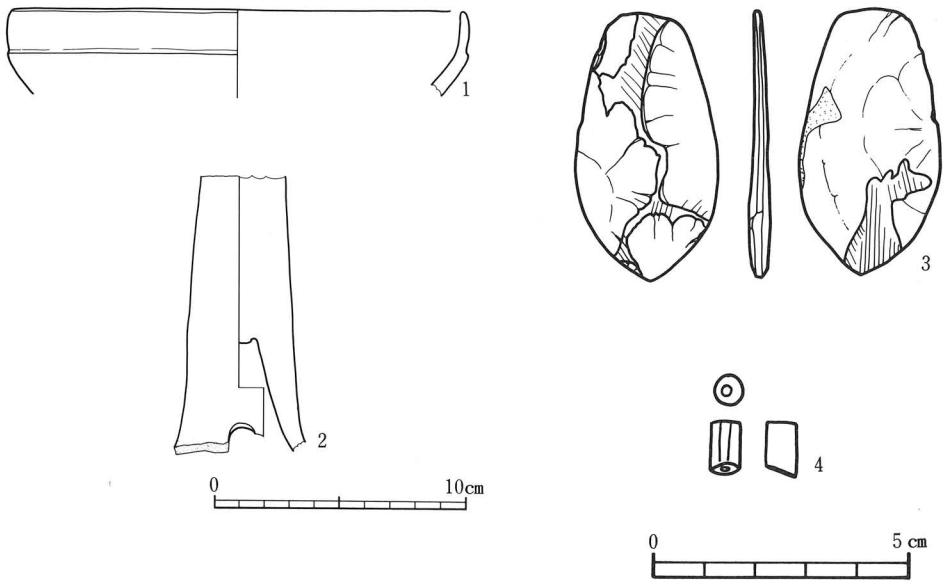
第39図　調査区配置と基本層位



層	No.	土色	土質	その他
SK－1	1	10YR3/1 黒褐色	粘土質シルト	黒色粘土とにぶい黄橙色粘土のブロックを含む(人為堆積)
SK－2	1	10YR4/1 褐灰色	シルト	黒褐色シルト・にぶい黄橙色粘土の小粒子を含む
	2	10YR3/1 黒褐色	シルト	褐灰色シルト・にぶい黄橙色粘土の小粒子を含む
SK－3	1	10YR3/1 黒褐色	シルト	
	2	10YR2/1 黒色	灰	水分を多く含む
	3	10YR7/2 にぶい黄橙色	粘土質シルト	黒色シルト・褐灰色シルトを薄い縞状に含む

層	No.	土色	土質	その他
SK－4	1	10YR3/1 黒褐色	シルト	土師器片・炭化物・酸化鉄粒を含む
	2	10YR2/1 黒色	粘土	にぶい黄橙色粘土のブロックを含む
	3	10YR7/2 にぶい黄橙色	粘土	黒色粘土を含むブロック状の堆積土
	4	10YR2/1 黒色	粘土	にぶい黄橙色粘土を含む、粘性強い

第40図　遺構実測図



図中番号	登録番号	種別・器種	出土地区	基本層位	出土遺構・層	取上番号	器高・長	口径・幅	底径・厚	重量	特徴	写真図版
1	C－1	非ロクロ土師器　杯			SK－3　埋土		(3.4)	17.8				17－7
2	C－2	非ロクロ土師器　高杯			SK－4　埋土		(11.2)				脚下部３個所に円窓	17－7
3	K－1	石製模造品			SK－2　埋土		5.3	2.8	0.4	6.8		17－7
4	K－2	石製品　管玉			SK－4　埋土		1.1	0.6		0.6	孔径0.2	17－7

第41図　出土遺物

からは、弥生時代中期中頃の弥生土器、鍬・鋤などの木製農耕具、扉・梯子などの建築材、刺突具・装身具などの骨角器、太型蛤刃石斧・片刃石斧・石庖丁などの石器・石製品、古墳時代前期から中期にかけては土師器、鍬、鋤などの木製農耕具、鉄製品、土製品、石製品などが多量に出土している。

南西約200mには古墳時代の竪穴住居跡１軒、掘立柱建物跡１棟などが検出されている高屋敷遺跡があり、南方約500mには中世の館跡である長喜城館跡、南東約200mには古墳時代から中世の荒井畑中遺跡、東方約500mには中世から近世の屋敷跡である荒井館跡などが存在している。

押口遺跡１次調査は、仙台市荒井土地区画整理事業に伴って平成２年に発掘調査が実施され、弥生時代中期中頃から近世の期間に埋没した河川跡が発見されている。河川跡は幅約20m、深さ2.8mの規模で、主に弥生時代中期中頃と古墳時代前期の遺物が出土している。弥生時代には、中期中頃の桝形囲式期の土器、鍬の泥除け・有柄木製品・斧の直柄などの木製品が出土し、古墳時代には土師器のほか、広鍬、横鍬、曲柄二又鍬などの木製農耕具、弓・矢などの木製品が出土している。この河川跡は中在家南遺跡発見の河川跡と同一の河川跡であると考えられ、両遺跡を結ぶ間は、どの地区でも遺物が包含されている可能性が極めて高い。

3　調査方法と基本層位

共同住宅建設部分を対象に調査区を設定して確認調査を実施した。その結果、土坑が検出されたため調査区を拡張して本調査へと移行した。建設予定地の中央部北側は、土地区画整理事業に伴って埋められた近年までの水路が幅約3.5～４mで東西方向に走っている。

基本層は３層認められた。１層は畑の耕作土であり、２層は褐灰色シルトで一部にのみ分布する層である。３層はにぶい黄橙色粘土質シルトの地山である。この層上面で土坑が検出されたが畑の耕作土が深く入り込んでおり、撹乱が著しい。

4　発見遺構と出土遺物

１）土　　坑

調査区中央部に４基の土坑が集中して検出されている。

ＳＫ－１土坑　検出された土坑の中で西側に位置し、平面形は直径約85cmの円形を呈し、断面形は皿形で深さ20cmを測る。壁は底面よりほぼ垂直ぎみに立ち上がる。堆積土は１層であり、黒褐色粘土質シルトで黄橙色粘土と混じり合っている。埋土より土師器の破片が出土している。

ＳＫ－２土坑　ＳＫ－１土坑の南東に隣接して検出され、ＳＫ－３土坑を切っている。平面形は長軸74cm、短軸54cmの楕円形を呈し、断面形は浅いＵ字形で深さ10cmを測る。堆積土は２層に分けられ、褐灰色・黒褐色シルトである。埋土より剣形の石製模造品（第41図３）が出土している。

ＳＫ－３土坑　ＳＫ－２土坑に切られており、平面形は長軸90cm、短軸80cmのほぼ円形を呈し、断面形は浅いＵ字形で深さ10cmを測る。堆積土は３層に分けられ、２層に黒色の灰が薄く堆積している。埋土より土師器坏（第41図１）が出土している。

ＳＫ－４土坑　ＳＫ－３土坑の南東に隣接して検出され、平面形は長軸90cm、短軸76cmのほぼ円形を呈し、断面形はＵ字形で深さ50cmを測る。壁は底面よりやや傾斜をもって立ち上がる。堆積土は４層あり、１層は黒褐色シルト、２～４層は黒色・にぶい黄褐色の粘土である。埋土より土師器高坏の脚部（第41図２）、碧玉製管玉（第41図４）が出土している。

土坑出土の遺物は、第41図に示されている。１は土師器坏で口縁部から体部にかけて残存し、内湾ぎみに立ち上がる。器面が荒れているため調整は不明であるが、器形より南小泉式に相当するものと考えられる。２は土師器高坏脚

部の破片で、坏部は欠損しているため不明である。脚部は柱状で、裾部は円錐台状に開くものと考えられ、脚部中央に３個の円窓が穿孔されており、塩釜式の新しい段階のものに相当すると考えられる。３は剣形の石製模造品で長さ5.3㎝、幅2.8㎝、厚さ0.4㎝を測る。４は欠損している碧玉製管玉で、残存長11㎜、幅６㎜で、径２㎜の孔があけられている。

5　調査成果のまとめ

① 押口遺跡は沖積平野の標高約4.5mに立地する弥生時代から近世にかけての集落跡、河川跡が発見されている遺跡である。

② 今回の調査によって発見された遺構は、土坑４基であり、調査区中央付近に集中して検出されている。出土遺物には土師器坏・高坏の脚部、石製模造品、管玉がある。

③ 発見された土坑は、古墳時代前期の塩釜式期のものと南小泉式期のものである。

④ 竪穴住居跡については発見されなかったが、周辺の自然堤防上で発見されることが期待される。

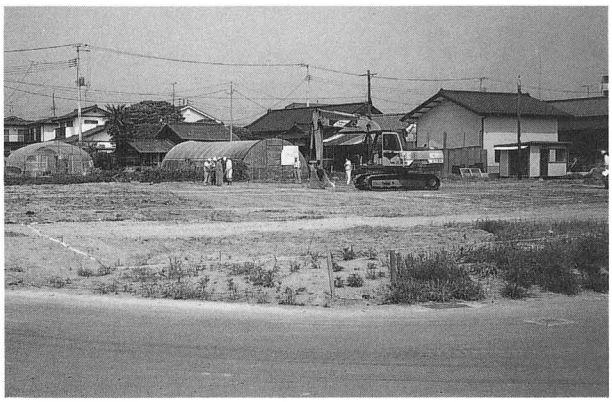
参考文献

氏家和典（1957）：「東北土師器の型式分類とその編年」『歴史』第14輯

丹羽　茂（1981）：「宮前遺跡」『宮城県文化財調査報告書第96集』宮城県教育委員会

工藤哲司（1995）：「押口遺跡―仙台市史特別編２　考古資料」『仙台市史編さん委員会纂』仙台市

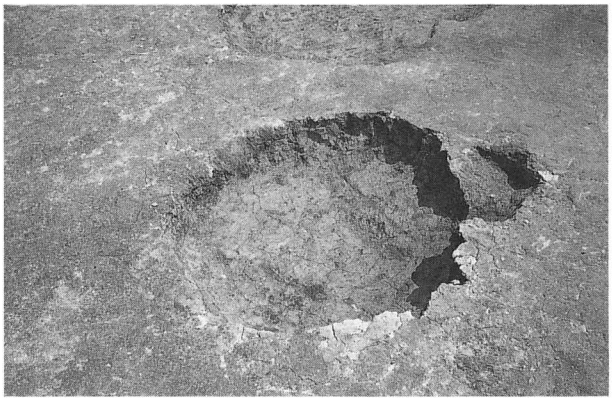
工藤哲司（1997）：「中在家南遺跡他　第５部押口遺跡」『仙台市文化財調査報告書第213集』



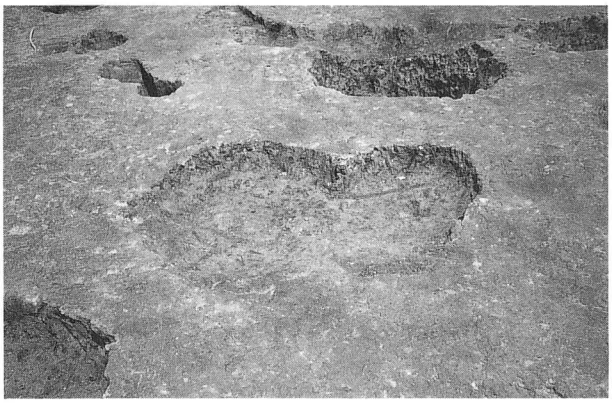
1　調査区遠景

2　調査区全景

3　遺構調査状況

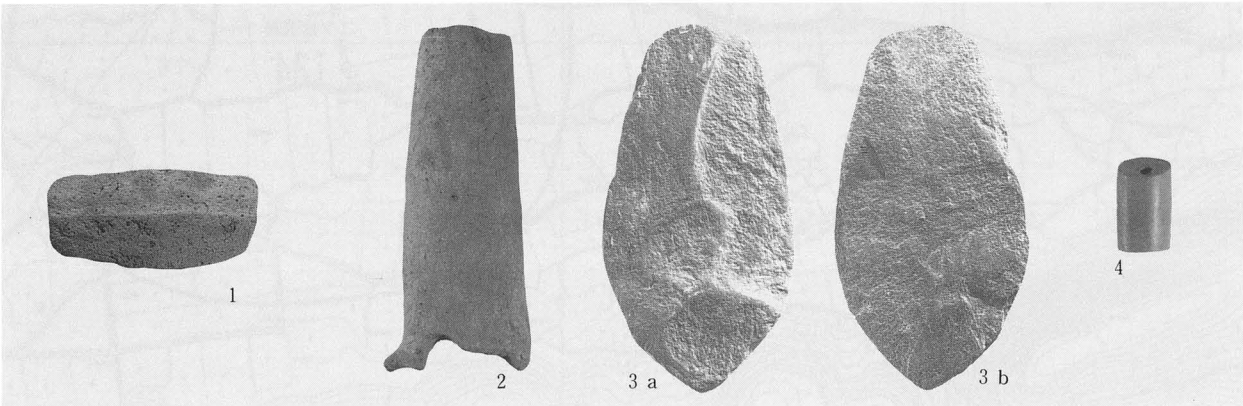


4　ＳＫ－１土坑



5　ＳＫ－２・３土坑（右ＳＫ－２）

6　ＳＫ－４土坑



1非ロクロ土師器 坏　Ｃ－１（ＳＫ－３埋土・第41図１）
2非ロクロ土師器 坏　Ｃ－２（ＳＫ－４埋土・第41図２）
3石製模造品　　Ｋ－１（ＳＫ－２埋土・第41図３）
4石製品 管玉　　Ｋ－２（ＳＫ－４埋土・第41図４）

7　出土遺物

図版17　押口遺跡調査状況・出土遺物

Ⅵ　平治遺跡調査報告書

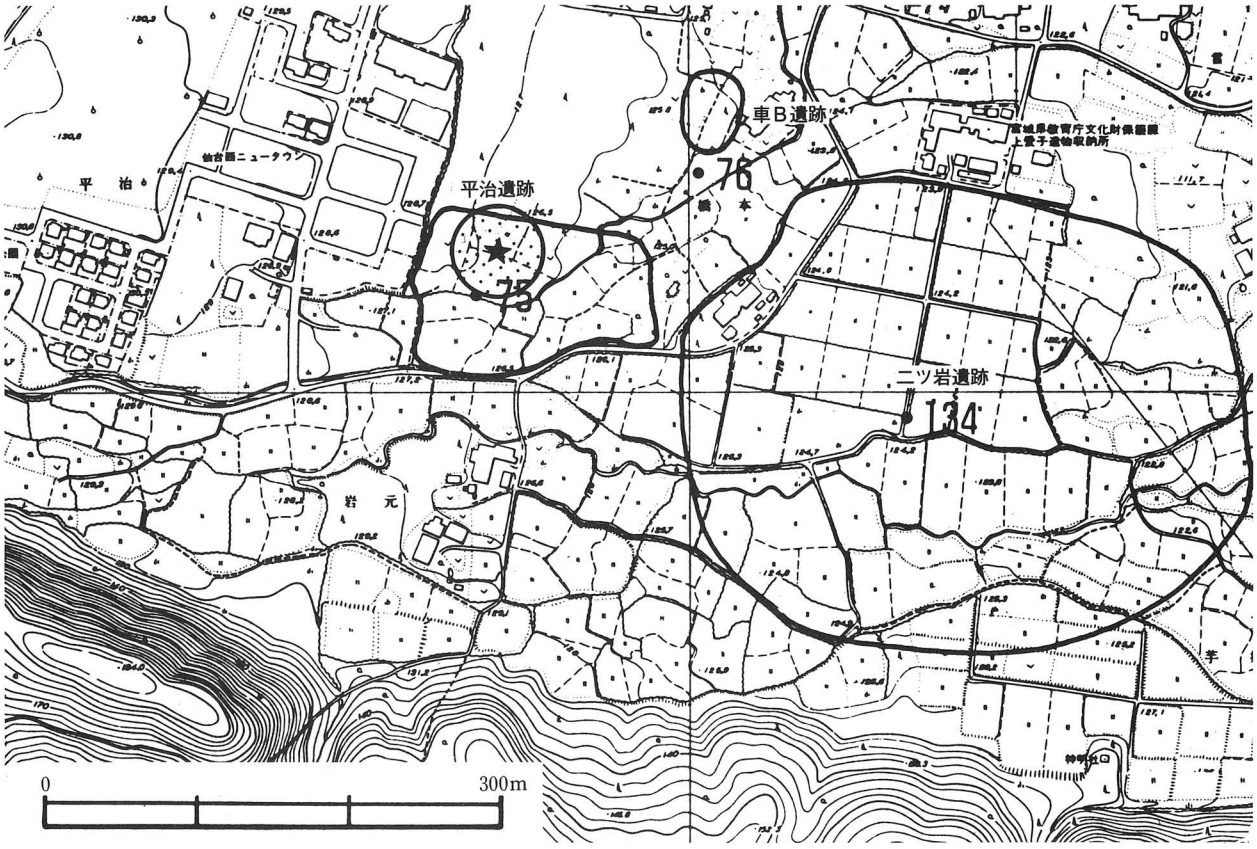
1　調査要項

遺跡名	平治遺跡（宮城県遺跡番号　２１０７５）
調査地点	仙台市青葉区上愛子字平治１他
調査原因	仙台宅地造成
調査対象面積	7,920㎡
調査面積	306㎡
調査期間	平成８年４月22日～４月24日
調査主体	仙台市教育委員会
調査担当	仙台市教育委員会文化財課
担当職員	結城慎一・篠原信彦・竹田幸司

2　遺跡の位置と環境

平治遺跡は、ＪＲ仙台駅の西約12㎞に位置し、広瀬川が形成した標高126ｍ前後の河岸段丘に立地する。現在の広瀬川は遺跡の約500ｍ北側を東流し、段丘面との標高差は30ｍ前後である。また、遺跡の南側200ｍには青葉山丘陵の山群が230ｍ前後の標高で迫っている。遺跡の現状は畑地で、土師器・須恵器・縄文土器が散布している。

周辺の遺跡としては、車Ｂ遺跡（縄文・古代）、二ツ岩遺跡（縄文）、車Ａ遺跡（古代）、雷神Ａ遺跡（古代）、雷神Ｂ遺跡（古代）、堰内遺跡（縄文）など縄文時代と古代の遺跡の存在が知られているが、本格的な発掘調査が行われたことがなく、同地区における遺跡の実態は不明な点が多い。

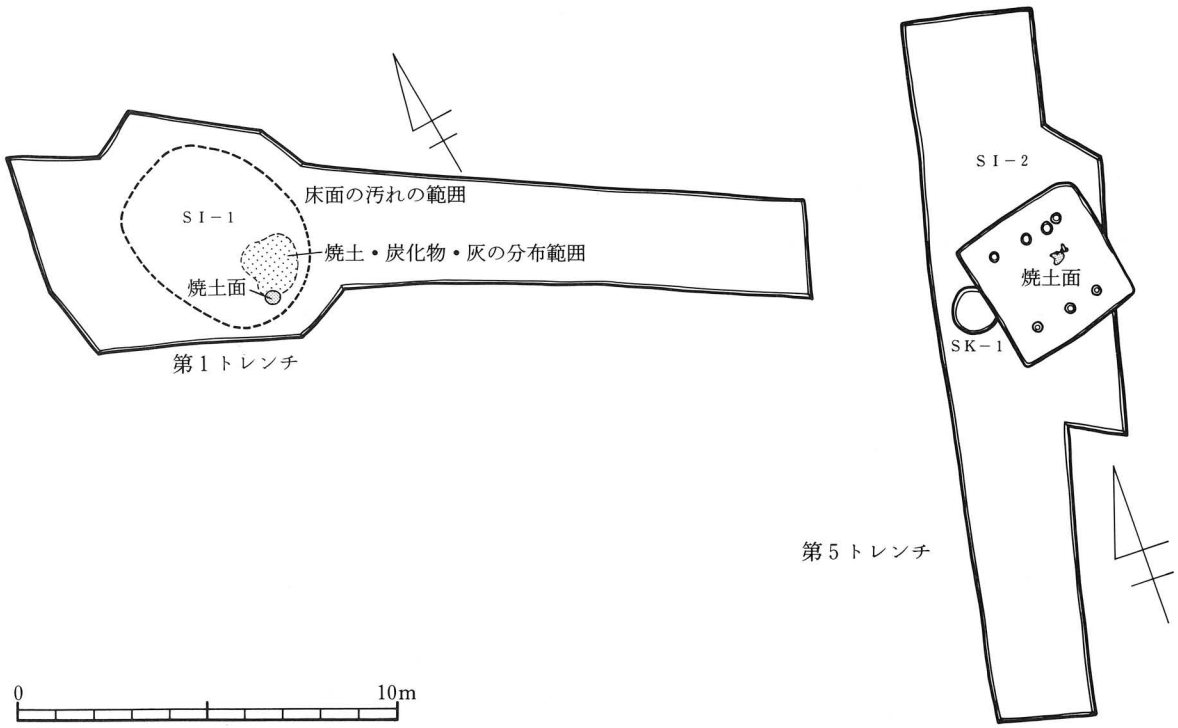


第42図　調査地点と周辺の地形

3　調査方法

調査は、開発の土地利用計画を考慮し、はじめに造成地内の街路予定部分を主体として、第１トレンチから第５トレンチを設定して確認調査を実施した。その結果、若干の遺構の残存が確認されたので、その部分につき引き続いて本調査を実施した。表土の排除は重機で行い、その後人力により遺構の検出作業を行った。

第43図　調査区配置図



第44図　第１・５トレンチ遺構配置図

4　基本層位

表土（Ⅰ層）は、黒色のシルト質粘土の現耕作土層で、層厚は30cm前後である。表土の下層は黄褐色のシルト質粘土層（Ⅱ層）となり、この面で遺構が検出された。Ⅱ層は、黄褐色のシルト質粘土層だけが分布している部分と、直径が数cm～十数cmの礫が混入している場所がある。

5　トレンチと発見遺構の概要

1）トレンチの状況

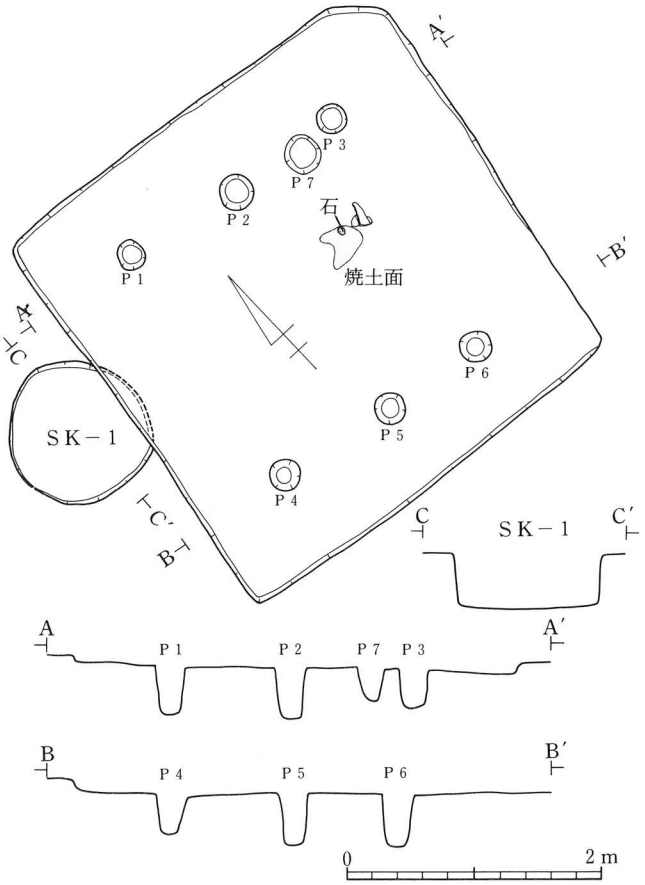
第1トレンチ　幅3mで、東西に19mの長さで設定した。耕作による削平が著しく、礫混じりのⅡ層が遺構確認面となる。トレンチの西部で焼土面とその周囲に焼土・炭化物・灰が分布する部分があり、さらにその周辺は東西4m・南北5.2mの範囲でⅡ層上面が汚れているのが確認された。ここからは須恵器や土師器も出土したので、この部分を1号竪穴住居跡（ＳＩ－1）とした。

第2トレンチ　幅3mで、東西に24mの長さで設定した。風倒木痕と考えられる土層の変化が認められたが、遺構は検出されず、遺物も出土していない。

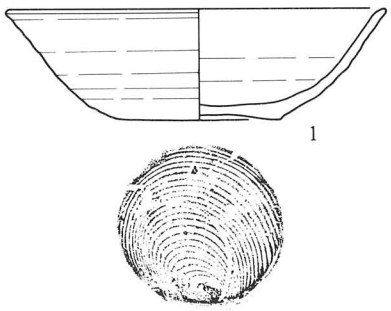
第3トレンチ　幅3.5mで、南北に16mの長さで設定した。遺構・遺物は発見されなかった。

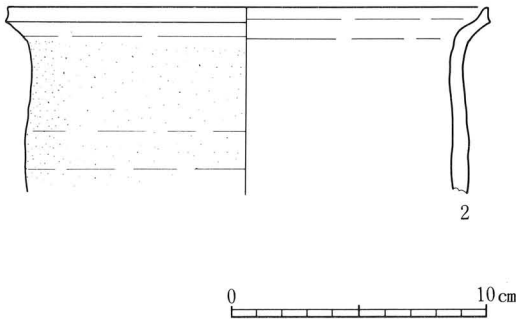
第4トレンチ　幅3mで、東西に11mの長さで設定した。風倒木痕の他は、遺構・遺物は発見されなかった。

第5トレンチ　幅3mで、南北に18.5mの長さで設定した。トレンチの北側で竪穴住居跡が1棟（ＳＩ－2）と住居跡に切られる土坑1基（ＳＫ－1）が検出されたので、この部分のトレンチを長さ約8mの範囲で東側に1.5m拡張して調査した。



第45図　ＳＩ－2竪穴住居跡・ＳＫ－1土坑実測図





図中番号	登録番号	種別・器種	出土地区	基本層位	出土遺構・層	取上番号	器高・長	口径・幅	底径・厚	重量	特徴	写真図版
1	E－1	須恵器　杯	1トレンチ		ＳＩ－1		4.5	15.1	6.5		底部回転糸切り	19－3
2	D－1	ロクロ土師器　甕	1トレンチ		ＳＩ－1		(7.5)	19.1			外面の表面が剥落している	19－3

第46図　出土遺物

2）発見遺構と出土遺物

ＳＩ－１竪穴住居跡　先に記したように東西４ｍ・南北5.2ｍの範囲でⅡ層上面が汚れているのが確認されたが、壁面は既に失われているために規模は不明である。焼土面とその周囲の焼土・炭化物・灰の分布範囲は、検出部の南端に寄っているので、南壁にカマドが存在した可能性が考えられる。柱穴は発見できなかった。

遺物は、第46図１に示した底部回転糸切り無調整の須恵器坏と、２のロクロ調整された土師器の甕などが出土している。須恵器坏は多賀城跡出土土器のＥ群土器に類似することから、10世紀前半頃のものと考えられる。

ＳＩ－２竪穴住居跡　東西3.6ｍ・南北3.6ｍの正方形の住居跡で、検出面が床面ないし掘り方の埋土に達している。南北軸はほぼ磁北方向である。住居中央やや東寄りに、東西・南北30㎝の範囲で焼土面が確認されている。住居の掘り方埋土は、黒色シルト・黒褐色シルト・黄褐色粘土質シルトがブロック状に混合した層で、検出面から５～10㎝の厚さがある。掘り方底面では、北壁に沿って４個のピット（Ｐ１・２・７・３）と、南壁に沿って３個のピット（Ｐ４・５・６）が検出された。このうちＰ１・２・３・４・５・６の６本は柱穴と考えられる。北列のＰ１－２とＰ２－３の間隔が100㎝と95㎝で、総長は195㎝である。南列は、Ｐ４－５とＰ５－６の間隔が100㎝と84㎝で、総長は184㎝である。南北の柱間隔は、Ｐ１－４が220㎝、とＰ２－５が215㎝、Ｐ３－６が217㎝である。掘り方底面からの柱穴の深さは、Ｐ１が37㎝、Ｐ２が43㎝、Ｐ３が35㎝、Ｐ４が34㎝、Ｐ５が43㎝、Ｐ６が43㎝である。

遺物は、掘り方埋土から縄文土器１点と時期不明の土器片２点が出土している。時期決定資料が無いため、遺構の時期は不明である。

ＳＫ－１土坑　ＳＩ－２竪穴住居跡に東側を一部切られている。平面形は円形で直径は115㎝である。深さは約40㎝あり、断面形は箱形を呈する。堆積土は黒色シルト１層である。出土遺物はない。

6　調査成果のまとめ

① はじめて平治遺跡が調査され、竪穴住居跡２棟と土坑１棟が検出された。

② 竪穴住居跡のうち、ＳＩ－１は平安時代の10世紀前半頃に位置付けられるが、ＳＩ－２は時期決定資料が得られなかった。

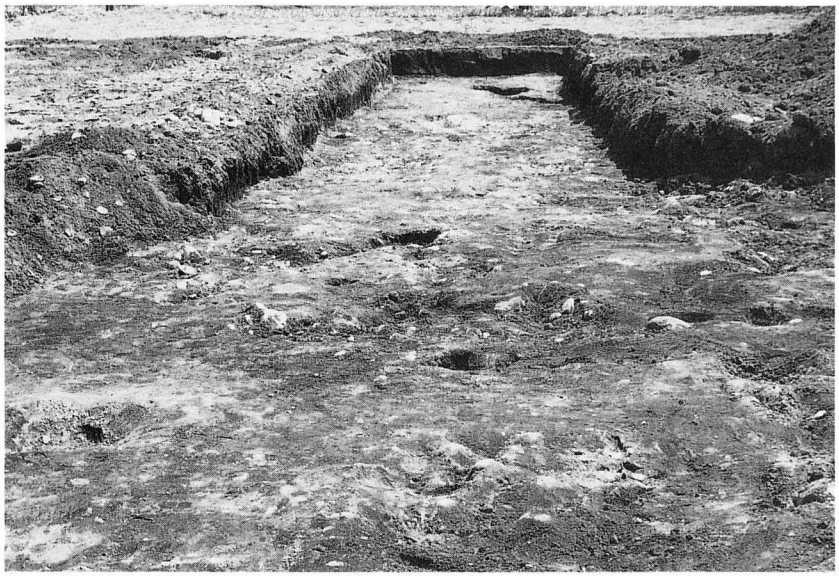
③ ＳＩ－２は、住居の規模が１辺3.6ｍと比較的小規模であるにもかかわらず、６本の主柱穴をもつ点で注目される。

④ 遺跡全体としては、耕作による削平が著しく、今回調査した以外にも竪穴住居跡が存在したとしても、保存状態はきわめて悪いと推定される。

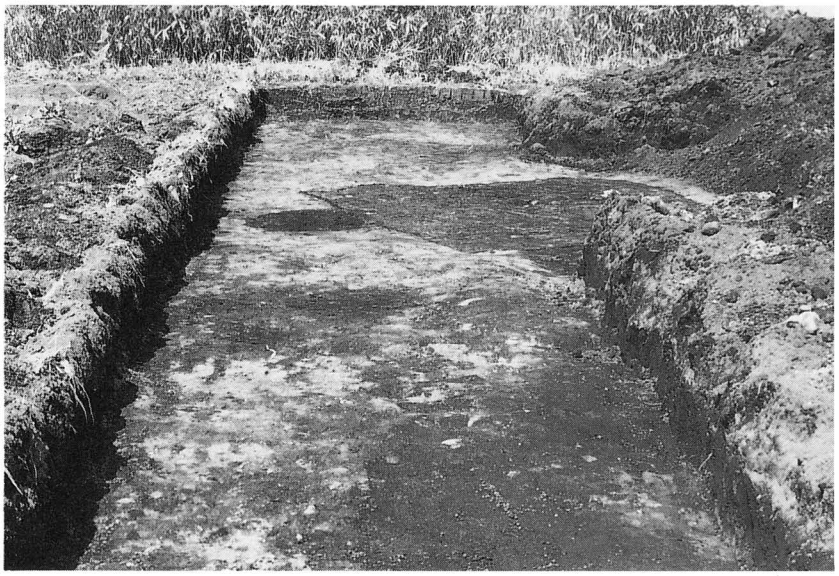
参考文献

白鳥良一（1982）：「土器」『多賀城跡　政庁跡本文編』宮城県多賀城跡調査研究所

1　調査区遠景

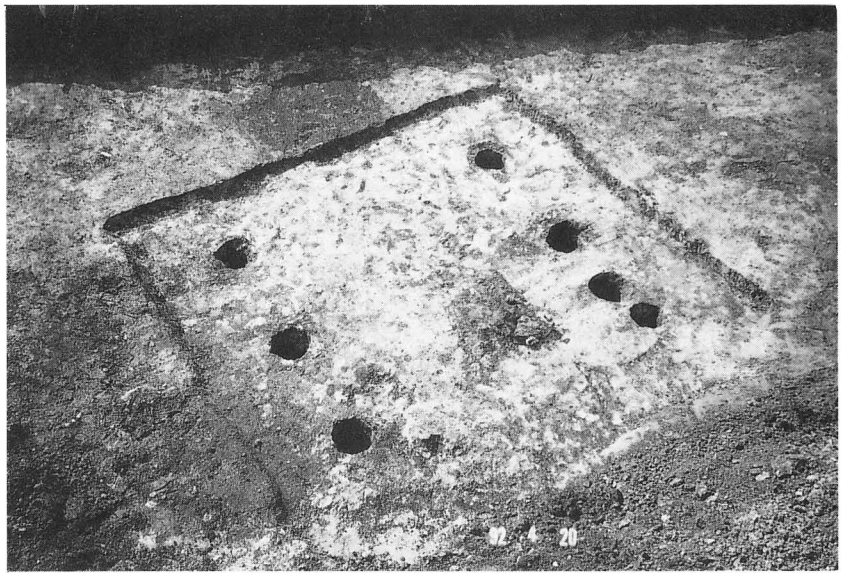


2　1号竪穴住居跡検出状況



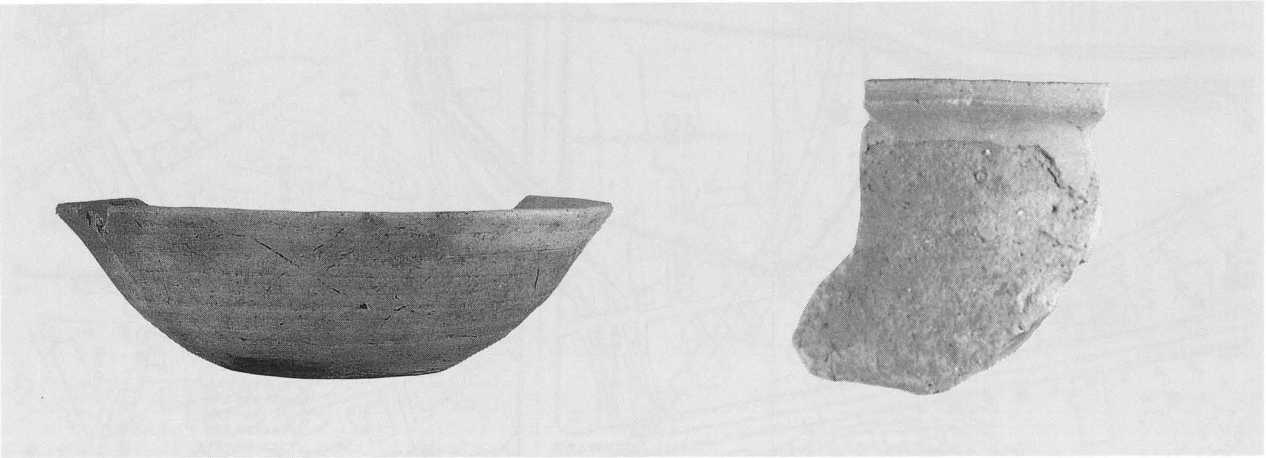
3　2号竪穴住居跡検出状況

図版18　調査区遠景・1・2号竪穴住居跡



1　２号竪穴住居跡完掘状況

ＳＫ－１土坑



1　須恵器 杯 Ｅ－１（第46図１）　　2　ロクロ土師器 甕 Ｄ－１（第46図２）

3　１号竪穴住居跡出土土器

図版19　２号竪穴住居跡・１号土坑・出土遺物

Ⅶ　高柳遺跡（２次）調査報告書

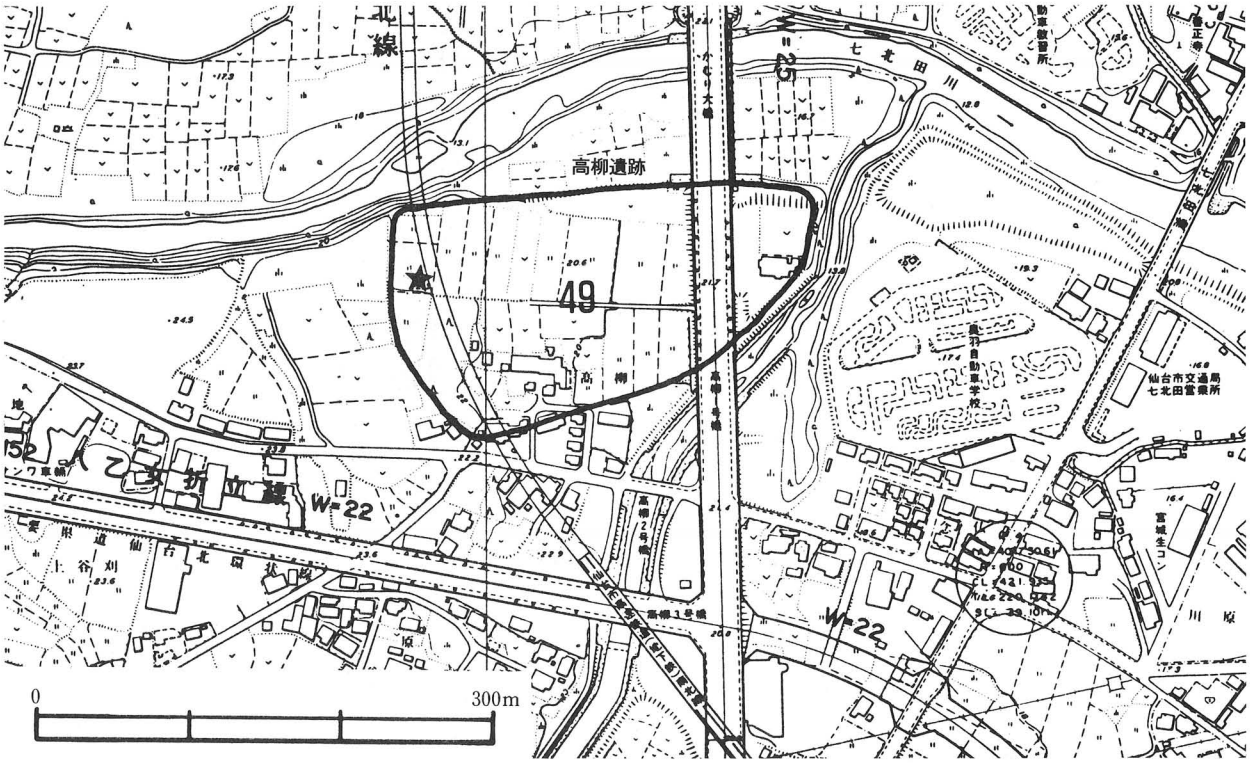
1　調査要項

遺跡名	高柳遺跡（宮城県遺跡番号　１９０４９）
調査地点	仙台市泉区七北田字高柳地内
調査原因	土地区画整理事業
調査対象面積	120㎡
調査面積	86㎡
調査期間	平成８年５月29日～６月12日
調査主体	仙台市教育委員会
調査担当	仙台市教育委員会文化財課
担当職員	篠原信彦
調査参加者	大友節子　小嶋登喜子　菅家婦美子　小池房子　高橋ヨシ子　千田あや子
調査協力	仙台市都市整備局区画整理指導課

2　遺跡の位置と環境

高柳遺跡は仙台市高速鉄道南北線八乙女駅の北西約500m、泉区七北田字高柳地内に位置し、七北田川右岸で高瀬川と合流する標高約22m程の低位河岸段丘上に立地している。

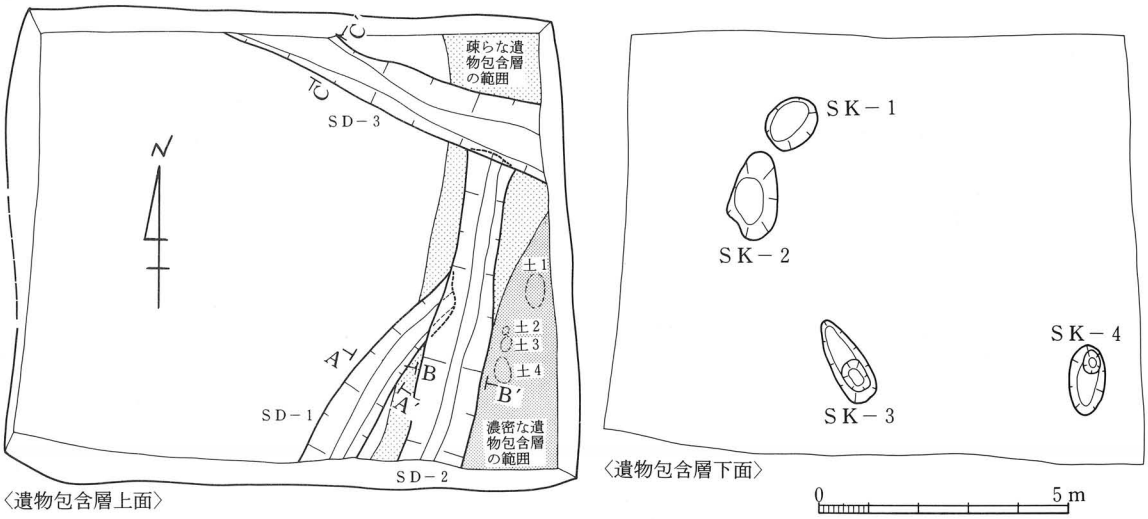
遺跡周辺の七北田川河岸段丘上には幾つかの遺跡が点在しており、西方1.1㎞の七北田川右岸には縄文時代中期末葉の竪穴住居跡８軒、遺物包含層などが発見された沼遺跡が位置している。北方の七北田川左岸には、縄文時代晩期



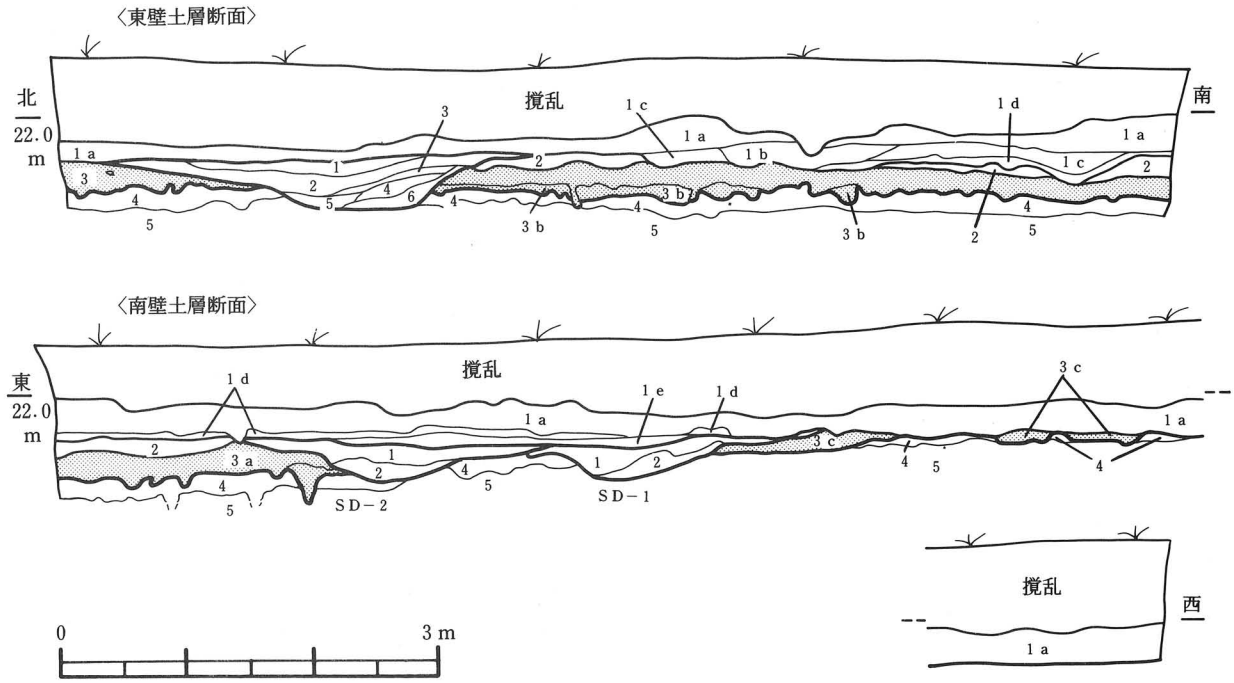
第47図　調査地点と周辺の地形

の遺物包含層や平安時代の水田跡が発見された赤生津遺跡、古代の遺跡である柳遺跡などがある。

高柳遺跡１次調査は、高速鉄道南北線が八乙女駅から泉中央駅まで延伸されるのに伴って、平成元年度に路線敷を対象に発掘調査が実施され、縄文時代中期中葉の遺物包含層・列石・配石遺構・土坑、平安時代の竪穴住居跡・土坑、



第48図　検出遺構平面図



層 No.	土　色	土　質	そ　の　他
1 a	7.5GY5/1緑　灰　色	粘土質シルト	水田耕作土。(現代)
1 b	7.5GY5/1緑　灰　色	粘土質シルト	水田耕作土。(現代)
1 c	7.5GY4/1暗 緑 灰 色	粘土質シルト	水田耕作土。酸化鉄粒を斑状に含む。
1 d	5G4/1　暗 緑 灰 色	粘土質シルト	水田耕作土。酸化鉄を含む。
1 e	10YR2/3 黒　褐　色	シルト	焼土・炭化物を含む。
2	10YR2/2 黒　褐　色	シルト	焼土・炭化物を含む。
3 a	10YR2/2 黒　褐　色	粘土シルト	包含層。(部分的に砂質シルトが分布)
3 b	10YR2/3 黒　褐　色	粘土シルト	炭化物を含む。
3 c	10YR2/2 黒　褐　色	シルト	褐色シルトを小ブロック状に含む。
4	10YR5/4 にぶい黄褐色	砂質シルト	マンガン粒を多量に含む。(地山)
5	10YR6/6 明 黄 褐 色	粘土シルト	マンガン粒を少量含む。(地山)

層 No.	土　色	土　質	そ　の　他
SD－1　1	10YR2/2 黒　褐　色	シルト	土器片・炭化物を少量含む。
2	10TR2/3 黒　褐　色	シルト	にぶい黄褐色シルトをブロック状に含む。
SD－2　1	10YR2/2 黒　褐　色	シルト	土器片・炭化物を少量含む。
2	10YR2/2 黒　褐　色	シルト	黄褐色土を粒状に含む。
SD－3　1	10YR4/2 灰 黄 褐 色	砂質シルト	炭化物・焼土を含む。粗砂のブロックを含む。
2	10YR3/2 黒　褐　色	シルト	炭化物・明黄褐色粘土質シルトをブロック状に含む。
3	10YR3/2 黒　褐　色	シルト	炭化物を２層より多く含む。
4	10YR3/2 黒　褐　色	粗砂	
5	10YR3/1 黒　褐　色	シルト	マンガン粒を少量含む。
6	10YR2/2 黒　褐　色	粘土質シルト	焼土・炭化物・マンガン粒・明黄褐色土を含む。

第49図　調査区土層断面図

平安時代以降の遺構、江戸時代前半の屋敷墓などが検出されている。

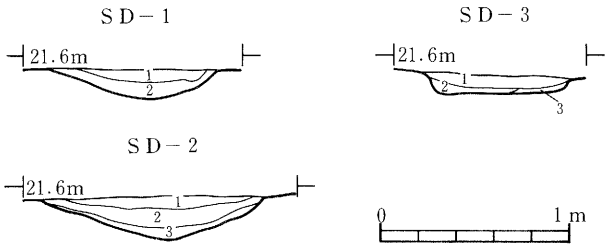
遺物包含層は東西15m、南北50mの範囲で、東西両側がやや高い小さな沢状のところに形成されたもので、膨大な量の縄文土器のほか、土偶・土笛などの土製品、石鏃・石錐などの剝片石器、凹石・磨石などの礫石器が出土している。

3　調査方法

今回は仙台市高柳土地区画整理事業に伴う発掘調査である。平成４年度には、遺跡周辺において区画整理地内を対象として確認調査が実施され、高速鉄道路線西側に平行するように遺物包含層の広がりが確認された。当該地にも遺物包含層がのびていると予想されたことから本調査が必要であると判断された。その後の協議により、路線敷西側は、公園として盛土保存されることが決定したので、東西に走る道路部分の一部約120㎡が本調査の対象となった。調査区は道路建設予定の部分に設定し、重機により盛土・表土の除去を行った。

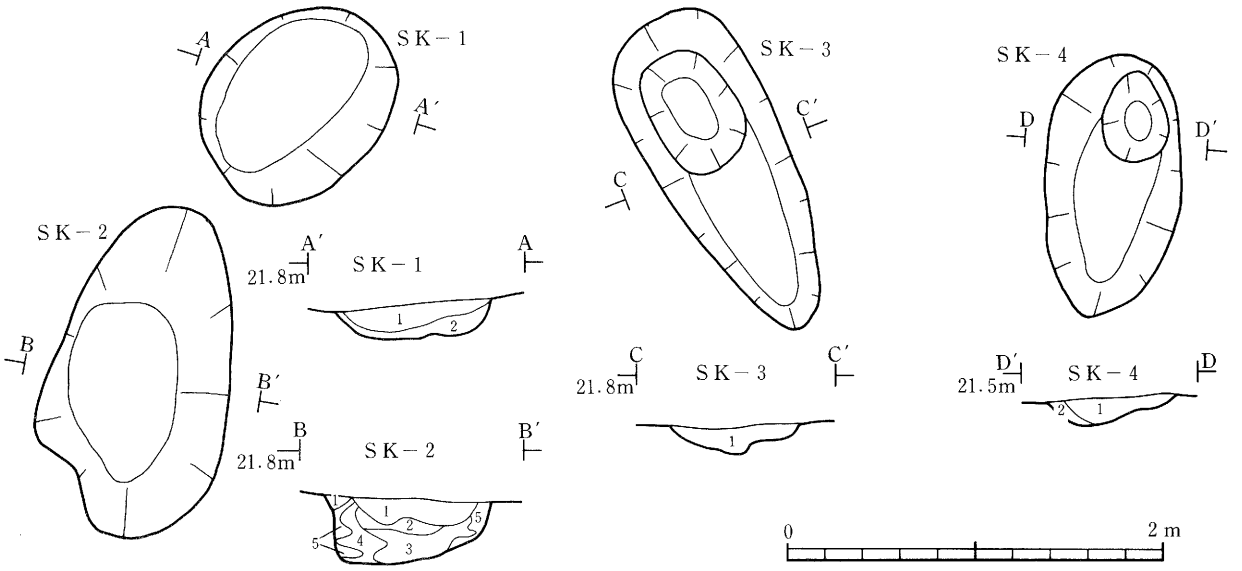
4　基本層位

調査区内で確認された基本層は５層認められた。１層は現代の水田耕作土であり、層の厚さは約20cmを測る。２層



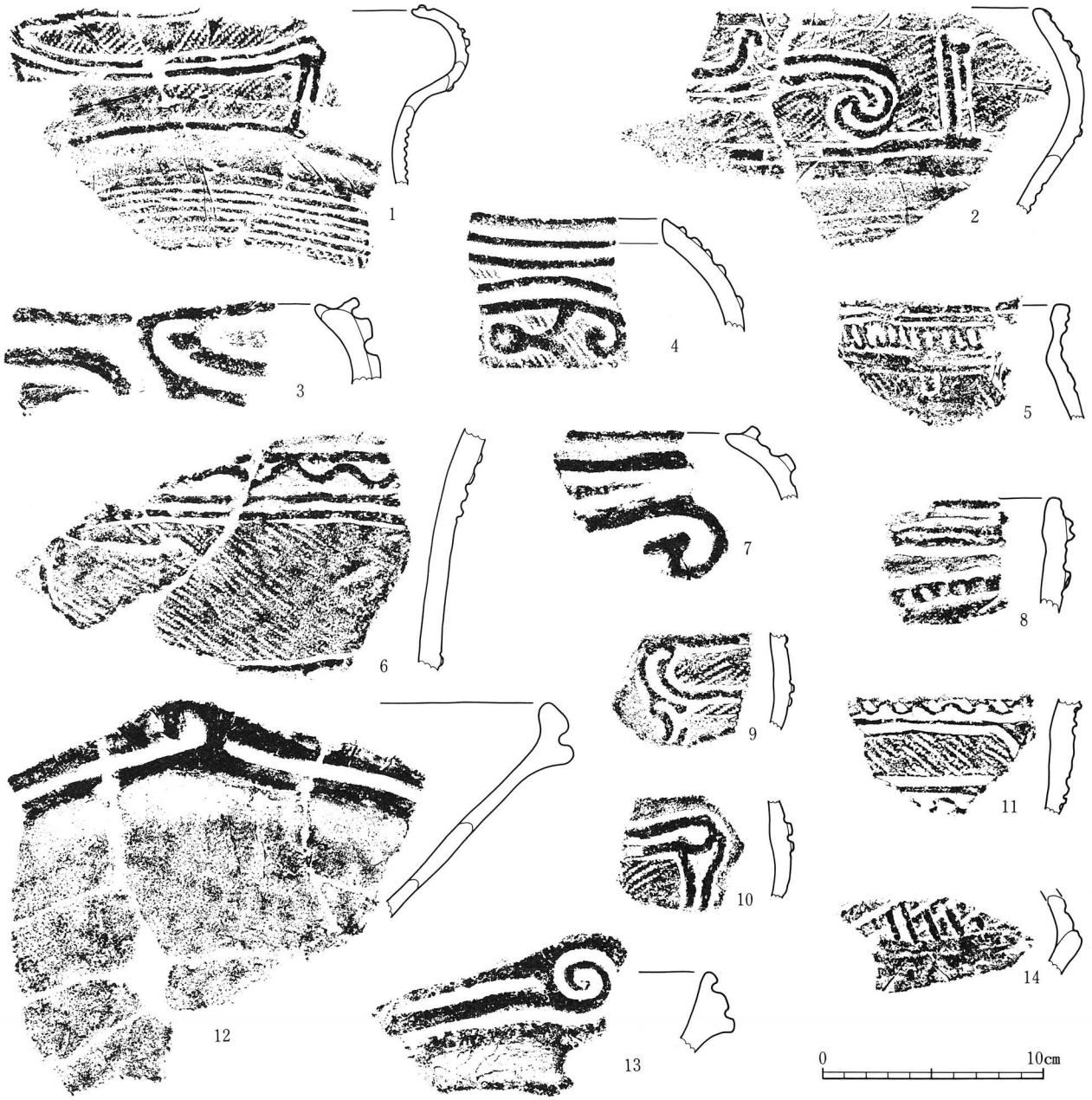
層 No.	土　色	土　質	そ の 他
SD－1　1	10YR3/2 黒　褐　色	シルト	土器片・小礫を含む。褐色粘土質シルトを粒状に含む。
2	10YR3/2 黒　褐　色	シルト	褐色粘土質シルトをブロック状に含む。
SD－2　1	10YR3/2 黒　褐　色	シルト	
2	10YR3/2 黒　褐　色	シルト	炭化物を少量含む。
3	10YR3/2 黒　褐　色	シルト	土器片を含む。酸化マンガン粒を含む。
SD－3　1	10YR3/2 黒　褐　色	シルト	土器片を含む。炭化物・酸化鉄を微量含む。
2	10YR2/2 黒　褐　色	粘土質シルト	褐色シルトをブロック状に含む。
3	10YR4/4 褐　色	シルト	酸化鉄を含む。

第50図　溝跡断面図



層 No.	土　色	土　質	そ の 他	層 No.	土　色	土　質	そ の 他
SK－1　1	10YR3/3 黒　褐　色	シルト	土器片・酸化鉄・炭化物を少量含む。	4	10YR4/3 にぶい黄褐色	シルト	マンガン粒を多量に含む。
2	10YR3/2 黒　褐　色	シルト	マンガン粒を多量に含む。	5	10YR5/4 にぶい黄褐色	シルト質粘土	にぶい黄褐色粘土を斑状に含む。酸化鉄を多量に含む。
SK－2　1	10YR2/3 黒　褐　色	シルト質粘土	土器片・礫を含む。酸化鉄・炭化物を少量含む。	SK－3　1	10YR2/2 黒　褐　色	シルト質粘土	にぶい黄褐色シルトを粒状に含む。
2	10YR3/3 黒　褐　色	シルト質粘土	酸化鉄を含む。	SK－4　1	10YR2/2 黒　褐　色	シルト	炭化物・土器片・パミスを含む。
3	10YR3/3 黒　褐　色	シルト質粘土	黄褐色シルトをブロック状に含む。	2	10YR3/3 暗　褐　色	シルト	炭化物を少量含む。

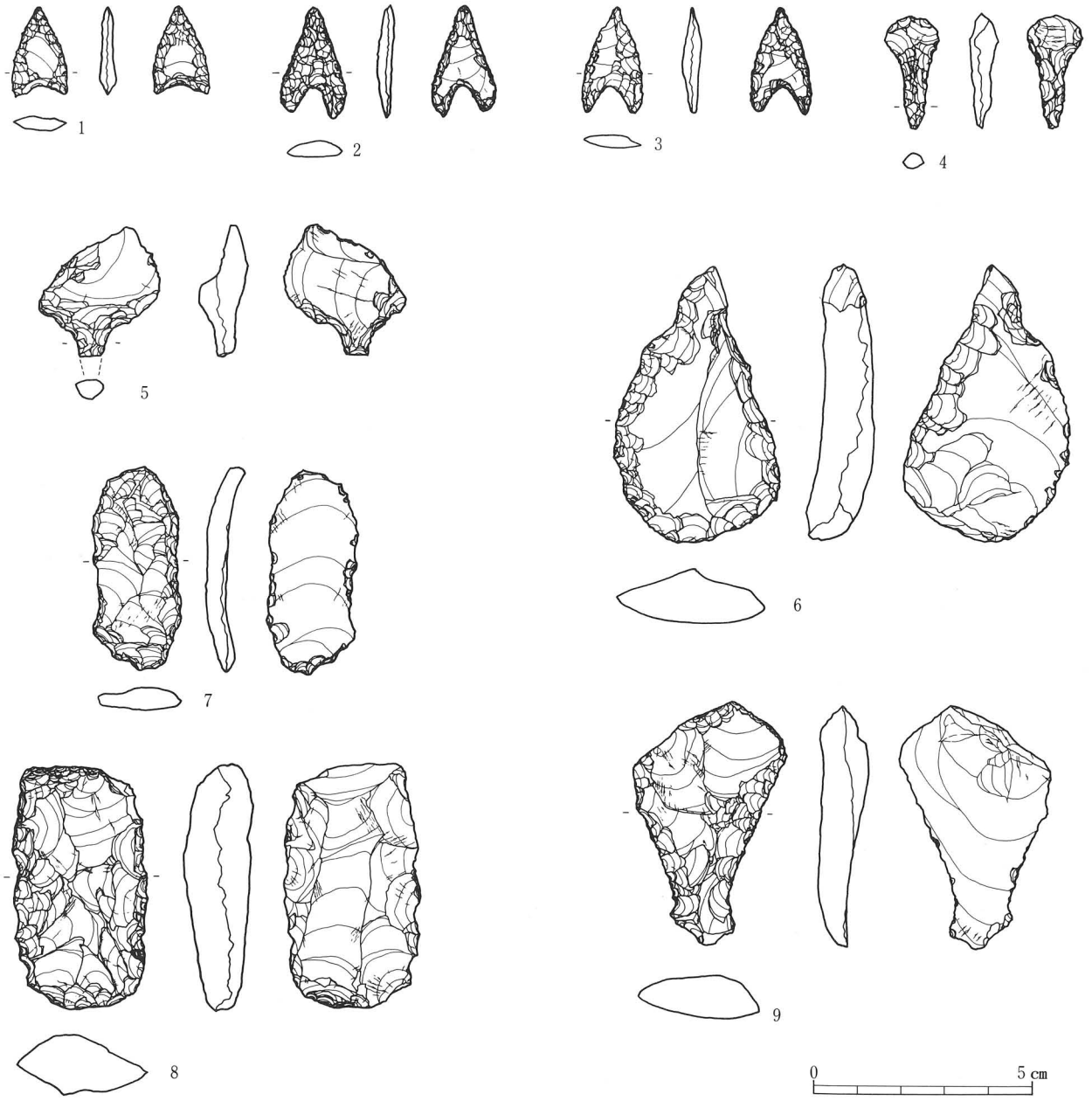
第51図　土坑実測図



番号	登録番号	種別・器種	出土地区	基本層位	出土遺構・層	取上番号	器高・長	口径・幅	底径・厚	重　量	特　　徴	写真図版
1	A－2	縄文土器・深鉢		3層		№2					口縁部：渦巻隆沈文、頸部：平行沈線文、地文：RL縄文	23－1
2	A－3	縄文土器・深鉢		3層		№5					口縁部：渦巻隆沈文、頸部：平行沈線文、地文：RL縄文	23－2
3	A－6	縄文土器・深鉢		3層		№5					渦巻隆沈文、LR縄文	23－3
4	A－5	縄文土器・深鉢		3層							横位隆線文、渦巻・円形隆線文、LR縄文	23－4
5	A－13	縄文土器・深鉢		3層		№1					横位隆線文、縦位刺突文、縄文（摩滅のため原体不明）	23－5
6	A－4	縄文土器・深鉢		3層		№5					横位・波状隆線文、隆沈文、LR縄文	23－6
7	A－12	縄文土器・深鉢		3層							渦巻隆沈文、PL縄文	23－7
8	A－16	縄文土器・深鉢		3層							LR撚糸圧痕沈線文、沈線文、刻目隆線文	23－8
9	A－10	縄文土器・深鉢			SK－4埋土						隆沈文、RL縄文	23－9
10	A－11	縄文土器・深鉢			SK－4埋土						渦巻隆沈文、RL縄文	23－10
11	A－15	縄文土器・深鉢		3層		№1					沈線文、交互刺突文、LR縄文	23－11
12	A－1	縄文土器・浅鉢		3層		№1					口縁部：横位・渦巻隆沈文	23－12
13	A－7	縄文土器・浅鉢		3層							口縁部：横位・渦巻隆沈文	23－13
14	A－14	縄文土器・深鉢？		3層							沈線文、隆沈文	23－14

第52図　出土土器

は黒褐色シルトで、調査区の東側隅にのみ分布し、層の厚さは約10cmを測る。この層の上面でＳＤ１～３溝跡が検出されている。３層は調査区の東側半分に分布し、さらに３層に細分される。3a 層は東側半分に分布する黒褐色粘土質シルトで、縄文土器や石器などが出土する遺物包含層である。層の厚さは約15～25cmを測る。3b 層は東側の一部



番号	登録番号	種別・器種	出土地区	基本層位	出土遺構・層	取上番号	器高・長	口径・幅	底径・厚	重　量	特　　徴	写真図版
1	Ｋ－１	石鏃		３層		№1	2.1	1.3	0.4	0.7	珪質頁岩	24－１
2	Ｋ－２	石鏃			ＳＫ－２　埋土		2.6	1.5	0.3	0.7	〃	24－３
3	Ｋ－３	石鏃		３層			2.5	1.4	0.4	0.7	〃	24－２
4	Ｋ－５	石錐			ＳＤ－１　埋土		2.6	1.2	0.7	1.0	珪化凝灰岩	24－４
5	Ｋ－４	石錐		２層			3.0	2.7	1.0	4.9	尖頭部先端欠損　玉髄	24－５
6	Ｋ－６	石匙		３層		№5	6.4	3.7	1.2,	21.9	珪質頁岩	24－７
7	Ｋ－８	スクレイパー		２層			4.7	2.0	0.5	5.0	〃	24－６
8	Ｋ－７	ピエス・エスキーユ		３層	ＳＤ－２　埋土		5.6	3.1	1.5	25.3	〃	24－８
9	Ｋ－９	スクレイパー		３層			5.6	3.0	1.0	13.0	〃	24－９

第53図　出土石器

にだけ分布する黒褐色粘土質シルトで、3a 層と同様に遺物包含層である。3c 層は調査区南側に部分的に分布する黒褐色シルトで、直下の黄褐色シルトと混じり合う。４層は調査区東側端に分布するにぶい黄褐色砂質シルトで、この上面でＳＫ－４土坑が検出されている。５層は調査区全体に分布する黄褐色シルトで、北西から南東方向に傾斜している。調査区西側では５層が薄く、下層の砂礫層の一部が露出している。

5　発見遺構と出土遺物

1）遺物包含層

調査区の東側に分布し、１次調査で検出された遺物包含層の北西端にあたる。包含層は第48図に示した範囲であり、比較的遺物が集中する範囲は調査区東端で、西側に向かって徐々に希薄となる。出土した遺物は縄文時代中期中葉の縄文土器・石器で平箱に３箱出土した。大部分は縄文土器の破片である。

第52図は主に遺物包含層出土の縄文土器拓本資料で、器形は深鉢と浅鉢とがある。１～４・７はキャリパー形を呈する深鉢の口縁部資料である。１・２は曲流する渦巻隆沈文で頚部に横位の平行沈線文が施され、地文としてＲＬ縄文が施文されている。４は横位の沈線文と渦巻・円形の隆線文が施され、地文としてＬＲ縄文が施文されている。６は深鉢の体部資料で、隆沈線文により区画され、さらに横位・波状の隆線文が施され、地文としてＬＲ縄文が施文されている。12・13は浅鉢の口縁部から体部にかけての資料で、口縁部には横位・渦巻隆沈線文が巡ぐる。５・８・11は刺突文が施されている深鉢の口縁部・体部資料である。８は横位の隆線にＬＲ撚糸が圧痕され、さらに体部には刻目のある横位の隆線がある。11は交互刺突文が施される。14は深鉢の体部資料で、沈線文と隆線文により鋸歯状の文様を施している。これらの縄文土器は大木 7b 式・大木 8a 式・大木 8b 式に比定されるものであり、出土量は少ないが前回の調査結果とも符号している。

石器は石鏃・石錐・石匙・スクレイパーなどの剥片石器（第53図１・３・４～８）の他、凹石・磨石などの礫石器が少量出土している。

１・３は無茎の石鏃で、いずれも二等辺三角形を呈する。５は尖頭部が欠損する石錐で、尖頭部と基部が明瞭なものである。６は縦型の石匙でつまみ部は両側から抉りを入れて作り出している。７は縦型の剥片を素材として両側縁に加工されたスクレイパーであり、８は「ピエス・エスキーユ」である。

2）溝　　跡

ＳＤ－１溝跡　調査区東側の第２層上面で検出された南北方向に走る溝跡で、北側はＳＤ－２溝跡に切られている。溝跡は上幅70～100cmで直線状に走り、断面形は浅いＵ字形で深さ15～20cmを測る。堆積土から縄文土器、石錐（第53図４）が出土している。

ＳＤ－２溝跡　第２層上面で検出された南北方向に走る溝跡で、ＳＤ－１溝跡を切り、北側はＳＤ－３溝跡に合流している。溝跡は上幅80～120cmでほぼ直線状に走り、断面形は浅いＵ字形で深さ20cmを測る。堆積土から縄文土器、スクレイパー（第53図９）、近世～近代の陶磁器などが出土している。

ＳＤ－３溝跡　調査区北側の第２層上面で検出された東西方向に走る溝跡で、ＳＤ－２溝跡と合流している。溝跡は上幅80～140cmで直線状に走り、断面形は皿形で深さ10～30cmを測る。

3）土　　坑

ＳＫ－１土坑　調査区北西の第５層上面で検出され、平面形は長軸110cm、短軸90cmの楕円形を呈し、断面形は浅いＵ字形で深さ25cmを測る。壁は底面より緩やかに立ち上がる。堆積土は黒褐色シルトで２層に分けられる。埋土より縄文土器片が少量出土している。

ＳＫ－２土坑　ＳＫ－１土坑の南隣の５層上面で検出され、平面形は長軸176cm、短軸100cmの不整楕円形を呈し、断面形はＵ字形で深さ35cmを測る。壁は底面より垂直ぎみに立ち上がる。堆積土は５層に分けられ、黒褐色シルト粘土、

黄褐色シルトで、埋土より石鏃（第53図２）、縄文土器片が出土している。

ＳＫ－３土坑　調査区中央部南側の第５層上面で検出され、平面形は長軸180cm、短軸74cmの楕円形を呈し、断面形は浅いＵ字形で深さ10cmを測る。底面は平坦であるが、南側はピット状となり、壁は緩やかに立ち上がる。堆積土は黒褐色シルト質粘土で、埋土より縄文土器片が少量出土している。

ＳＫ－４土坑　調査区南東隅の第４層上面で検出され、平面形は長軸90cm、短軸70cmの楕円形を呈し、断面形は浅いＵ字形で深さ10cmを測る。壁は底面より緩やかに立ち上がる。堆積土は２層に分けられ、黒褐色シルト、暗褐色シルトで、埋土より縄文土器片が少量出土している。第52図９・10は深鉢の拓本資料で渦巻隆沈文が施され、地文としてＲＬ縄文が施文されている。

6　調査成果のまとめ

①　高柳遺跡は七北田川によって形成された標高22m程の低位河岸段丘上に立地し、縄文時代中期中葉の遺物包含層・列石・配石遺構・土坑や、平安時代の集落跡、近世の屋敷墓から構成される遺跡である。

②　今回の発掘調査により発見された遺構は、縄文時代中期中葉の遺物包含層・土坑、近世から近代の溝跡である。

③　今回の調査で出土した遺物は、縄文時代中期中葉の縄文土器・石鏃・石匙・石錐などの剥片石器、凹石、磨石などの礫石器がある。

④　遺物包含層は、平成元年度に調査された縄文時代中期中葉の遺物包含層と同一の包含層で、その北西端を検出したものである。

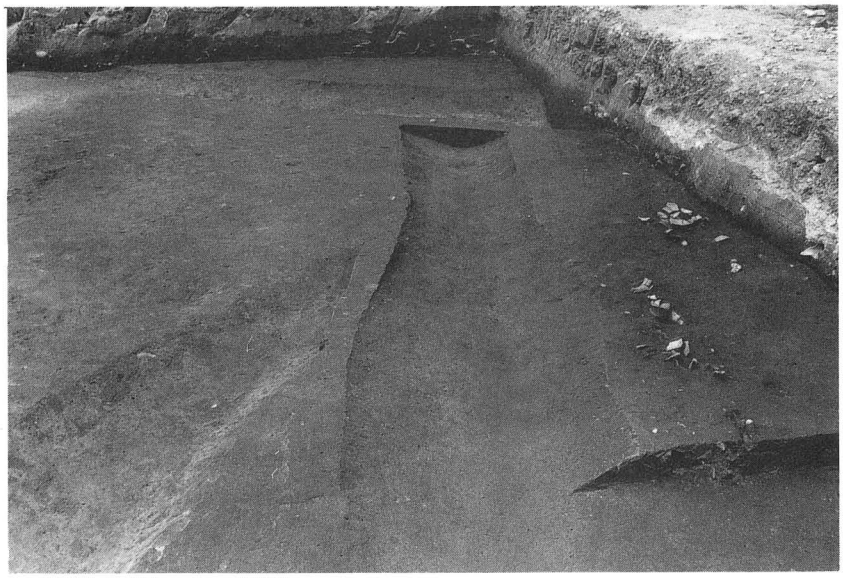
参考文献

佐藤好一、工藤信一郎（1990）：「年報11」『仙台市文化財調査報告書第143集』仙台市教育委員会

佐藤好一（1995）：「高柳遺跡」『仙台市文化財調査報告書第190集』仙台市教育委員会

佐藤好一（1995）：「高柳遺跡～仙台市史特別編２　考古資料」『仙台市史編さん委員会』

1　調査区全景



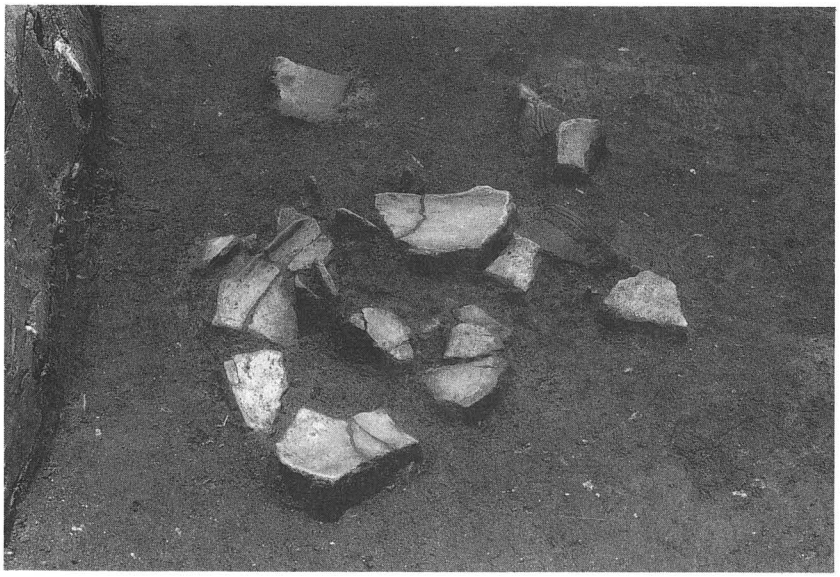
2　ＳＤ－１・２溝跡

3　ＳＤ－３溝跡

図版20　調査状況・溝跡

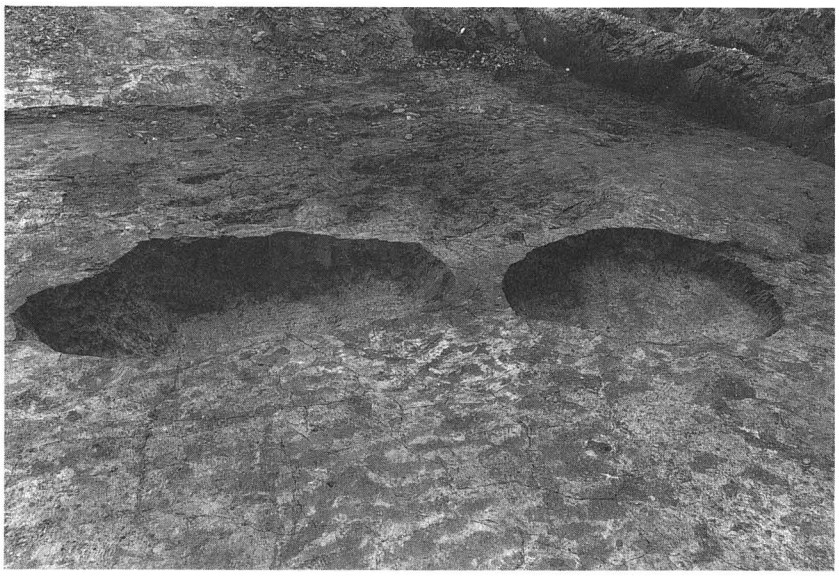
1　調査区全景

2　遺物出土状況１



3　遺物出土状況２

図版21　調査状況

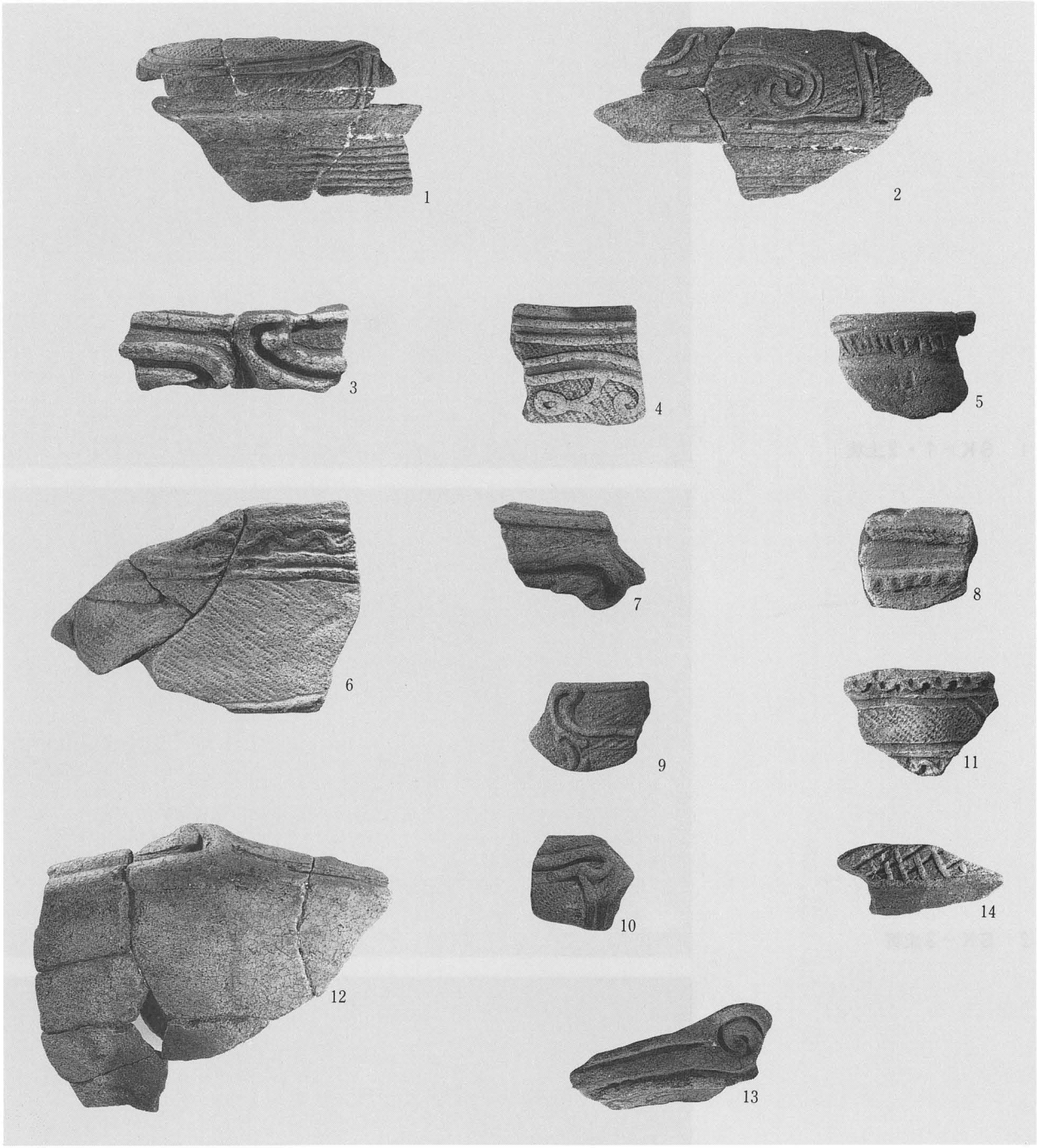


1　ＳＫ－１・２土坑

2　ＳＫ－３土坑

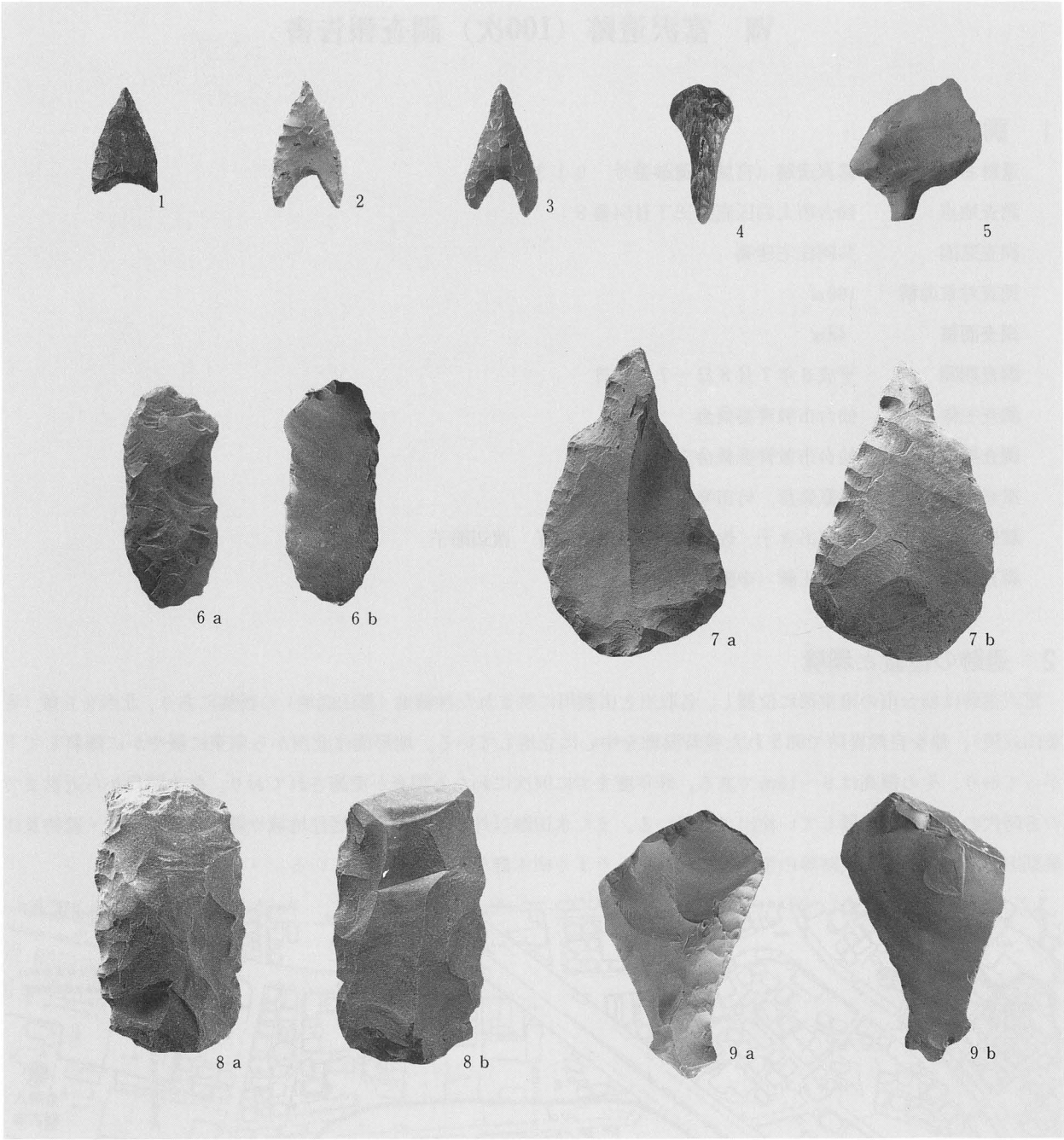
3　ＳＫ－４土坑

図版22　ＳＫ－１～４土坑



1縄文土器 深鉢　Ａ－２（３層・第52図１）
2縄文土器 深鉢　Ａ－３（３層・第52図２）
3縄文土器 深鉢　Ａ－６（３層・第52図３）
4縄文土器 深鉢　Ａ－５（３層・第52図４）
5縄文土器 深鉢　Ａ－13（３層・第52図５）
6縄文土器 深鉢　Ａ－４（３層・第52図６）
7縄文土器 深鉢　Ａ－12（３層・第52図７）
8縄文土器 深鉢　Ａ－16（３層・第52図８）
9縄文土器 深鉢　Ａ－10（ＳＫ－４埋土・第52図９）
10縄文土器 深鉢　Ａ－11（ＳＫ－４埋土・第52図10）
11縄文土器 深鉢　Ａ－15（３層・第52図11）
12縄文土器 浅鉢　Ａ－１（３層・第52図12）
13縄文土器 浅鉢　Ａ－７（３層・第52図13）
14縄文土器 深鉢？Ａ－14（３層・第52図14）

図版23　出土遺物１（縄文土器）



1 石鏃	K－1（3層・第53図1）	2 石鏃	K－3（3層・第53図3）
3 石鏃	K－2（SK－2埋土・第53図2）	4 石錐	K－5（SD－1埋土・第53図4）
5 石錐	K－4（2層・第53図5）	6 スクレイパー	K－8（2層・第53図7）
7 石匙	K－6（3層・第53図6）	8 ピエス・エスキーユ	K－7（3層・第53図8）
9 スクレイパー	K－9（SD－2埋土・第53図9）		

図版24　出土遺物２（石器）

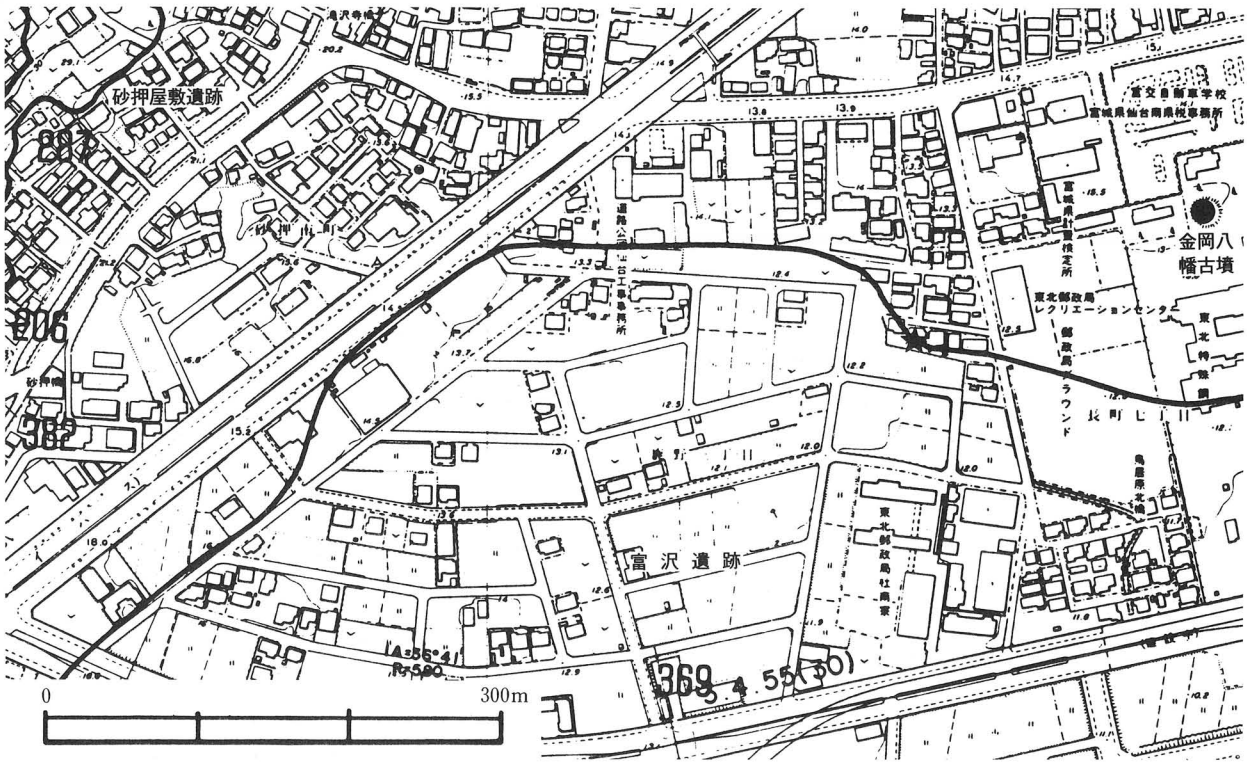
Ⅷ　富沢遺跡（100次）調査報告書

1　調査要項

遺跡名	富沢遺跡（宮城県遺跡番号　０１３６９）
調査地点	仙台市太白区鹿野三丁目54番８
調査原因	共同住宅建築
調査対象面積	100㎡
調査面積	48㎡
調査期間	平成８年７月８日～７月10日
調査主体	仙台市教育委員会
調査担当	仙台市教育委員会文化財課
担当職員	篠原信彦　竹田幸司
調査参加者	阿部あき子　佐々木瑞枝　菅井民子　渡辺節子
調査協力	佐藤正勝（申請者）

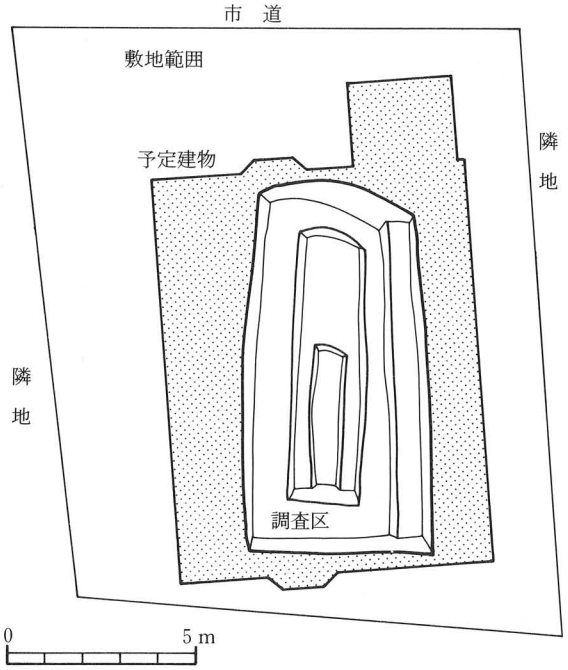
2　遺跡の位置と環境

富沢遺跡は仙台市の南東部に位置し、名取川と広瀬川に挟まれた沖積地（郡山低地）の西側にあり、北西を丘陵（青葉山丘陵）、他を自然堤防で囲まれた後背湿地を中心に立地している。地形面は北西から南東に緩やかに傾斜して下がっており、その標高は９～16mである。昨年度までに94次にわたる調査が実施されており、弥生時代から近世までの各時代の水田跡が重層してい検出されている。また水田跡以外では、中世の居住地域や縄文時代の遺構・遺物及び後期旧石器時代の焚き火跡等の生活跡とそれをとりまく樹木群などが発見されている。



第54図　調査地点と周辺の地形

本調査区は遺跡の北端に位置している。この付近は、青葉山丘陵から流れ込んでいる金洗沢や二ツ沢の影響下によって形成された扇状地の末端部に位置している。このため二つの沢の影響による堆積物の供給が微弱で泥炭集積が可能になった地点である。旧字名は八幡前の西端で上中谷地の東隣に当たり、地名からも低湿地的な状況を示している。



第55図　調査区配置図

3　調査概要

建築予定範囲内に５×10mの調査区を設定し、重機で掘り下げ、断面調査を実施した。約２m（標高約10m）掘り下げた段階で湧水が激しいため、それ以上の掘り下げを断念した。

基本層位は、盛土下から標高10mまで大別12層、細別13層が確認された。

１層　暗青灰色シルト質粘土。厚さは10～20cmである。層下面に厚さ１～２cmの酸化鉄集積層がある。下面は凹凸が少ない。下層への食い込みは２層で止まっている。

２層　青黒色粘土。厚さは５～15cmである。下面は凹凸が少ない。下層への食い込みは３・４ａ層で止まっている。

３層　灰白色火山灰。厚さは１～５cmである。４ａ層上面を覆うようにブロック状に堆積している。上層の撹拌によって部分的にしか残存していない。残存している部分は撹拌された痕跡はない。

４ａ層　青黒色粘土。厚さは20～25cmである。下面は凹凸がある。特に南半分が著しい。下層への食い込みは４ｂ・５層・一部６層まで達する。

４ｂ層　黒色粘土。厚さは平均５cmである。下面は凹凸が著しい。下層への食い込みは６層で止まっている。北半分には残存していない。

５層　オリーブ灰色粘土。厚さは平均10cmである。下面は凹凸が著しい。下層への食い込みは６層で止まっている。南側には残存していない。

６層　黄灰色泥炭。灰白色泥炭と黒色泥炭を縞状に含む。厚さは10～15cmである。下面は平坦である。上面は上層の撹拌によって凹凸が著しい。

７層　オリーブ黒色粘土。植物遺存体を含む。厚さは平均10cm程度で、下面は凹凸がある。下層への食い込みは８層で止まっている。

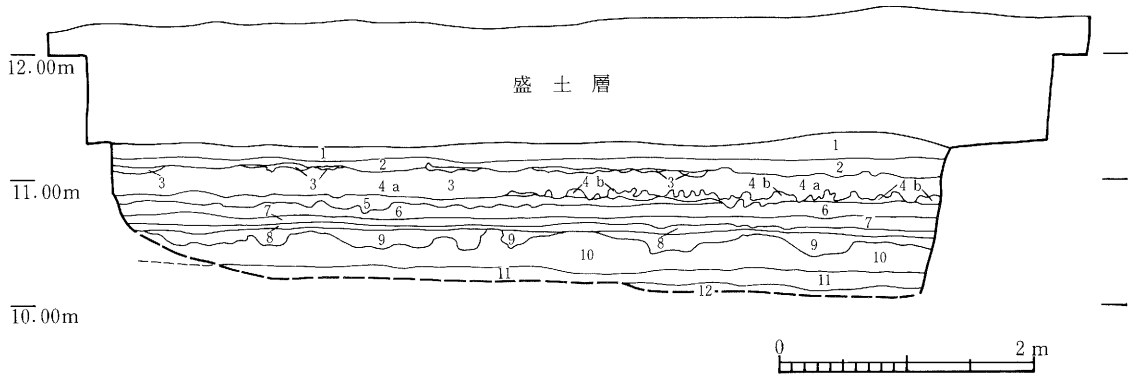
８層　黒色粘土。植物遺存体を含む。厚さは平均５cm程度で、下面は平坦である。上面は上層の撹拌によって凹凸がある。

９層　灰色泥炭質粘土。植物遺存体を含む。厚さは５～20cmで、下面は凹凸が著しい。下層の巻き上げはない。

10層　灰色泥炭質粘土。にぶい黄色粘土を縞状に含む。厚さは15～30cmで、下面は平坦である。上面は上層の影響によって凹凸がある。

11層　灰色粘土。にぶい黄色粘土と黒色泥炭を縞状に含む。厚さは15cmで、下面は平坦である。

12層　灰色粘土。にぶい黄色粘土を縞状に含む。



層No.	土　色	土　質	その他
1	5BG4/1 暗青灰色	シルト質粘土	層下部に厚さ1～2cmの酸化鉄集積層あり
2	10BG2/1 青黒色	粘土	粘性強い。しまり強い。
3	10YR7/1 灰白色	火山灰	「灰白色火山灰」1～5cmの厚さでブロック状に堆積
4a	10BG2/1 青黒色	粘土	粘性が非常に強い。
4b	10YR1.7/1黒色	粘土	6層を含む。
5	5GY5/1 オリーブ灰色	粘土	粘性が非常に強い。
6	2.5Y6/1 黄灰色	泥炭	灰白色泥炭と黒色泥炭を縞状に含む。
7	5Y3/1 オリーブ黒色	粘土	植物遺体を含む。
8	5Y2/1 黒色	粘土	7層より植物遺体の含有量が少ない。
9	10Y4/1 灰色	泥炭質粘土	植物遺体を含む。
10	10Y4/1 灰色	泥炭質粘土	にぶい黄色粘土を縞状に含む。
11	10Y4/1 灰色	粘土	にぶい黄色粘土と黒色泥炭層を含む。植物遺体を含む。
12	10Y4/1 灰色	粘土	にぶい黄色粘土を縞状に含む。

第56図　調査区東壁断面図

まとめると1層がシルト粘土質、2～5層が粘性の強い粘土、6層から植物遺存体を含む泥炭・泥炭質粘土・粘土になっている。富沢遺跡でよく見られる小河川や水路の氾濫による砂の供給はみられず、低湿地が発達し、それをもとに水田域にしている。3層は10世紀前半に降下したと考えられている灰白色火山灰の層となっている。

4　調査成果のまとめと考察

1）水田耕作土

断面からは明瞭な畦畔状の高まりは確認されなかったが、下面の凹凸と直下層を起源とするブロックが混在する状況から近・現代の水田耕作土の1層を除いて2・4a・4b・5・7層が水田耕作土の可能性がある。

2層は、10世紀前半以降近世以前の時代幅が考えられる。しかし、層中に灰白色火山灰を含まなく火山灰降下直後に復旧された水田耕作土ではないことと、76次調査の3層（近世）と93次調査の2a層・3層（近世後半）との対応が考えられることから、概ね近世頃の年代が推定される。

4a層は上面に3層をのせており、層中に灰白色火山灰を含まない。このことは、火山灰降下により耕作が中断されたことを示すものといえよう。また、下面の凹凸が南側で著しく北側では少ないが、南北両側で4b・5層及び南側で6層の巻き上げが観察されることから、区画の違いを示すものと考えられる。年代の上限は火山灰降下以前、下限は火山灰降下時あるいはその直前と推定され、10世紀前半以前の平安時代頃と考えられる。

4b層は南側だけで検出された。4a層の状況から北側にも4b層があったと判断され、4a層時の耕作のため残存しなかったと考えられる。4a層で想定した区画の違いとも矛盾しない。4a層との時期差は小さいと考えられるので、10世紀前半以前の平安時代頃と考えたい。4a・4b層は93次調査の7層（平安時代）に対応すると考えられる。

5層は北側だけで検出されている。4b層は北側で4a層時の耕作のため残存していないが、南側で残存しており、その状況は5層のみならず6層までも巻き上げている。つまり、4b層時の区画の違いによる残存状況の違いと考えられる。年代は4層と7層の時期から弥生時代～平安時代の時間幅が考えられる。93次の8a・8c層（古墳時代～奈良時代）と対応すると考えられる。

7層は色調・土性及び上層・下層の状況から76次調査6層（弥生時代十三塚式期）・93次調査10ａ層（弥生時代）に対応すると考えられることから、弥生時代の水田耕作土と考えられる。

9層は下面に凹凸が著しいが下層の巻き上げが観測されず、水田耕作土層とは断定できない。

2）まとめ

① 調査区は遺跡の北端に位置する低湿地がよく発達した地点である。

② 調査を実施した深さ約2ｍの地層は大別12層、細別13層に分けられた。

③ 現代の耕作土を除く水田耕作土の可能性のある層は2・4ａ・4ｂ・5・7層である。

④ 年代は2層が近世、4ａ・4ｂ層が10世紀前半以前の平安時代、5層が弥生時代～平安時代、7層が弥生時代（十三塚式期）が考えられる。

引用・参考文献

五十嵐康洋（1991）：「富沢遺跡76次調査報告書」『仙台平野遺跡群ＸＩ』仙台市文化財調査報告書第162集

太田　昭夫（1995）：「富沢遺跡93次調査報告書」『富沢・泉崎浦・山口遺跡（9）』仙台市文化財調査報告書第208集

太田昭夫他（1991）：「富沢遺跡30次調査報告書第1分冊（縄文～近世）」仙台市文化財調査報告書第149集

斎野　裕彦（1987）：「富沢―富沢遺跡15次発掘調査報告書」仙台市文化財調査報告書第98集

庄子貞雄・山田一郎（1980）：「宮城県北部に分布する灰白色火山灰について」『多賀城跡―昭和54年度発掘調査概報―』宮城県多賀城跡研究所

白鳥　良一（1980）：「多賀城跡出土土器の変遷」『研究紀要Ⅶ』宮城県多賀城跡研究所

豊島　正幸（1987）：「富沢遺跡周辺の地形と土地条件の変遷」『富沢―富沢遺跡15次発掘調査報告書』仙台市文化財調査報告書第98集

東日本の水田跡を考える会　（1990）：「水田跡の基本的理解―水田跡の検出と認定」『第3回　東日本の水田跡を考える会―資料集』

平間　亮輔（1989）：「富沢遺跡35次調査報告書」仙台市文化財調査報告書第150集

平間　亮輔（1995）：「仙台市における埋没条里」『条里制研究第11号』条里制研究会

町田　洋他（1984）：「テフラと日本考古学」『古文化財の自然科学的研究』古文化財編集委員会

1　調査区全景

2　東壁土層断面

3　東壁南半部土層断面

図版25　調査状況・土層断面

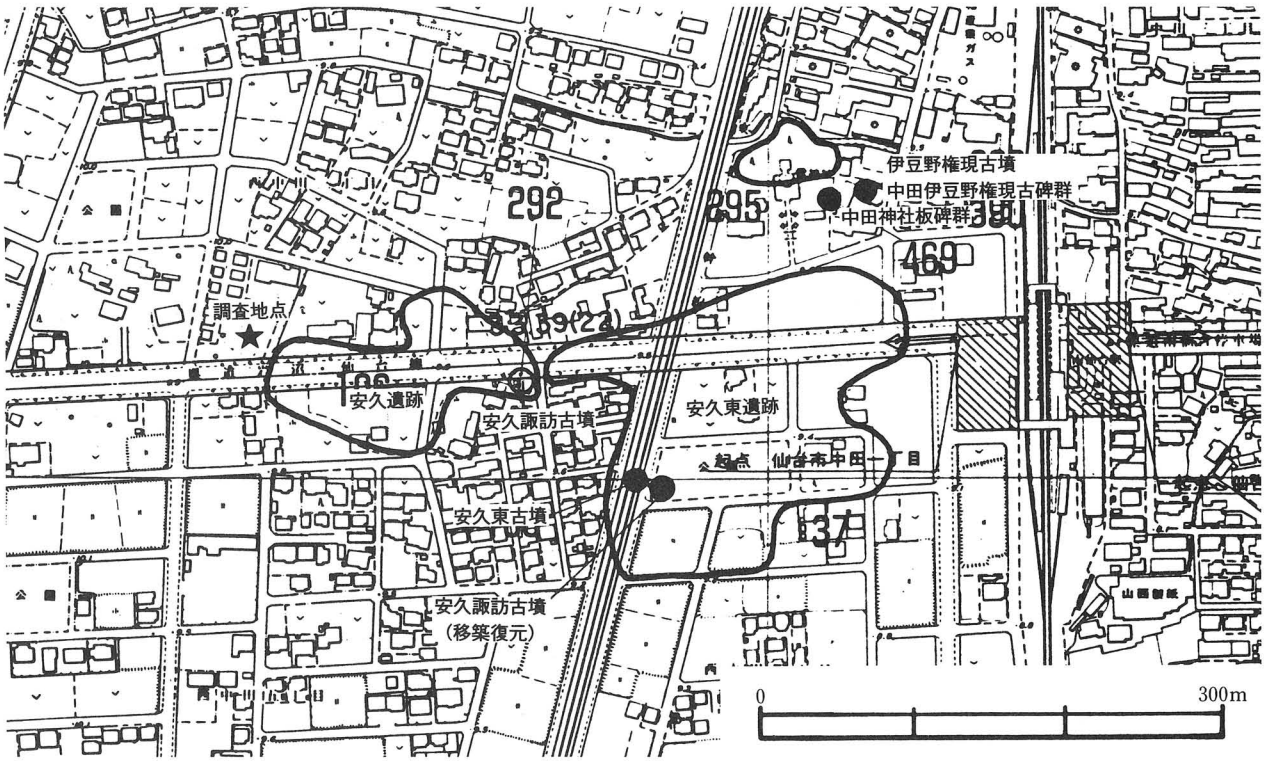
Ⅸ　安久遺跡（４次）調査報告書

１　調査要項

遺跡名	安久遺跡（宮城県遺跡番号　０１１０６）
調査地点	仙台市太白区西中田三丁目２－６
調査原因	共同住宅建築
調査対象面積	310㎡
調査面積	85㎡
調査期間	平成８年12月12日～12月18日
調査主体	仙台市教育委員会
調査担当	仙台市教育委員会文化財課
担当職員	篠原信彦　竹田幸司
調査参加者	小林国子　小松千代子
調査協力	鈴木敏（申請者）

２　遺跡の位置と環境

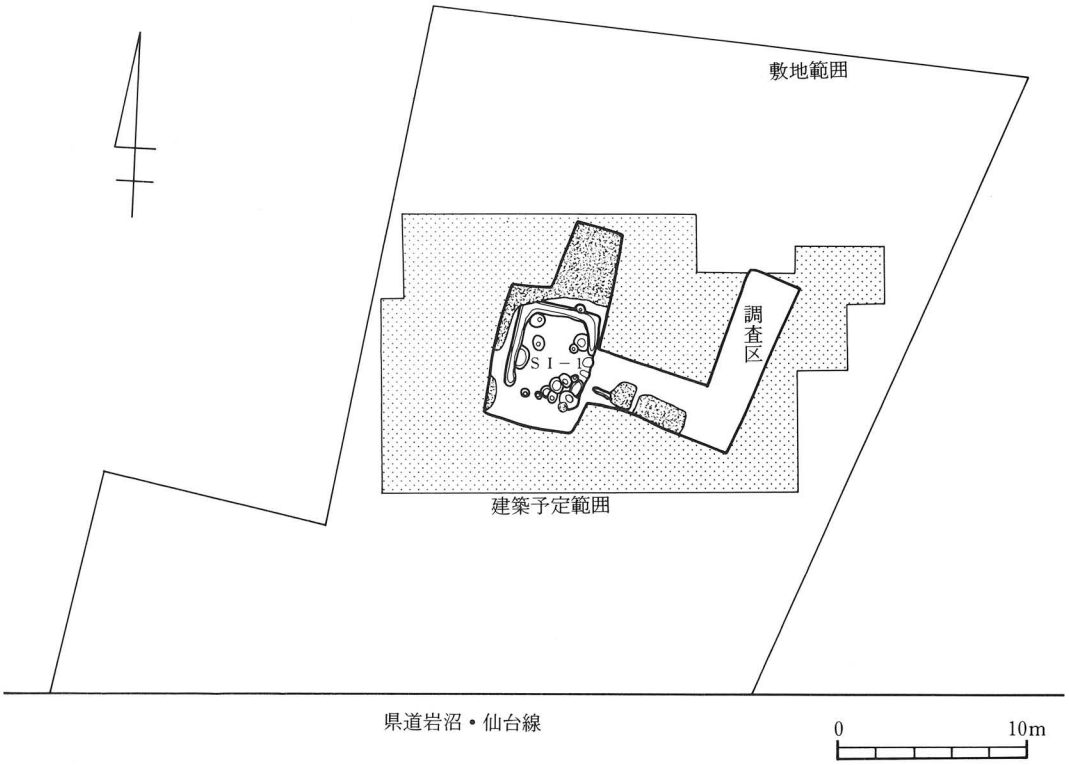
安久遺跡はＪＲ東北本線南仙台駅の西方約400m、名取川南岸800mの太白区西中田（旧字名安久）に位置する。周辺は名取川の旧河道とそれによって形成された自然堤防や後背湿地が複数に入り組んだ地形となっており、当遺跡は自然堤防上に立地している。標高は９～10mである。



第57図　調査地点と周辺の地形

遺跡の東隣に安久東遺跡が位置しており、古墳時代前期の竪穴住居跡と前方後方形の周溝墓、７～８世紀頃に築造された古墳の小型石室、平安時代の竪穴住居跡、中・近世の館跡に関連する溝跡や門跡などの遺構が確認されている。また、弥生時代以前の明確な遺構は発見されていないが、弥生時代前期の遠賀川系類似土器が出土している。500m南方には栗遺跡があり、古墳時代後期の集落跡が確認され、この時代の土器型式の標識になっている。西方１㎞には中・近世の屋敷跡が検出された松木遺跡がある。その他、約400m北東に伊豆野権現古墳がある。また、中田伊豆野権現古碑群、中田神社板碑群、日向古碑群などの中世の板碑も周辺で発見されている。

安久遺跡は過去に次の調査が行われている。１次調査は土地区画整理事業に伴って、昭和50年に実施され、平安時代の竪穴住居跡、古代～中世の溝状遺構が検出され、７世紀後半の安久諏訪古墳も調査されている。安久諏訪古墳の石室は移築され保存されている。２次調査は事務所建築に伴って、平成４年に実施され、灰白色火山灰降下後の平安時代の竪穴住居跡と窪地状遺構が検出されている。３次調査は共同住宅建築に伴って、平成８年に実施され、古代及び中・近世の溝跡が検出されている。



第58図　調査区配置図

3　調査方法

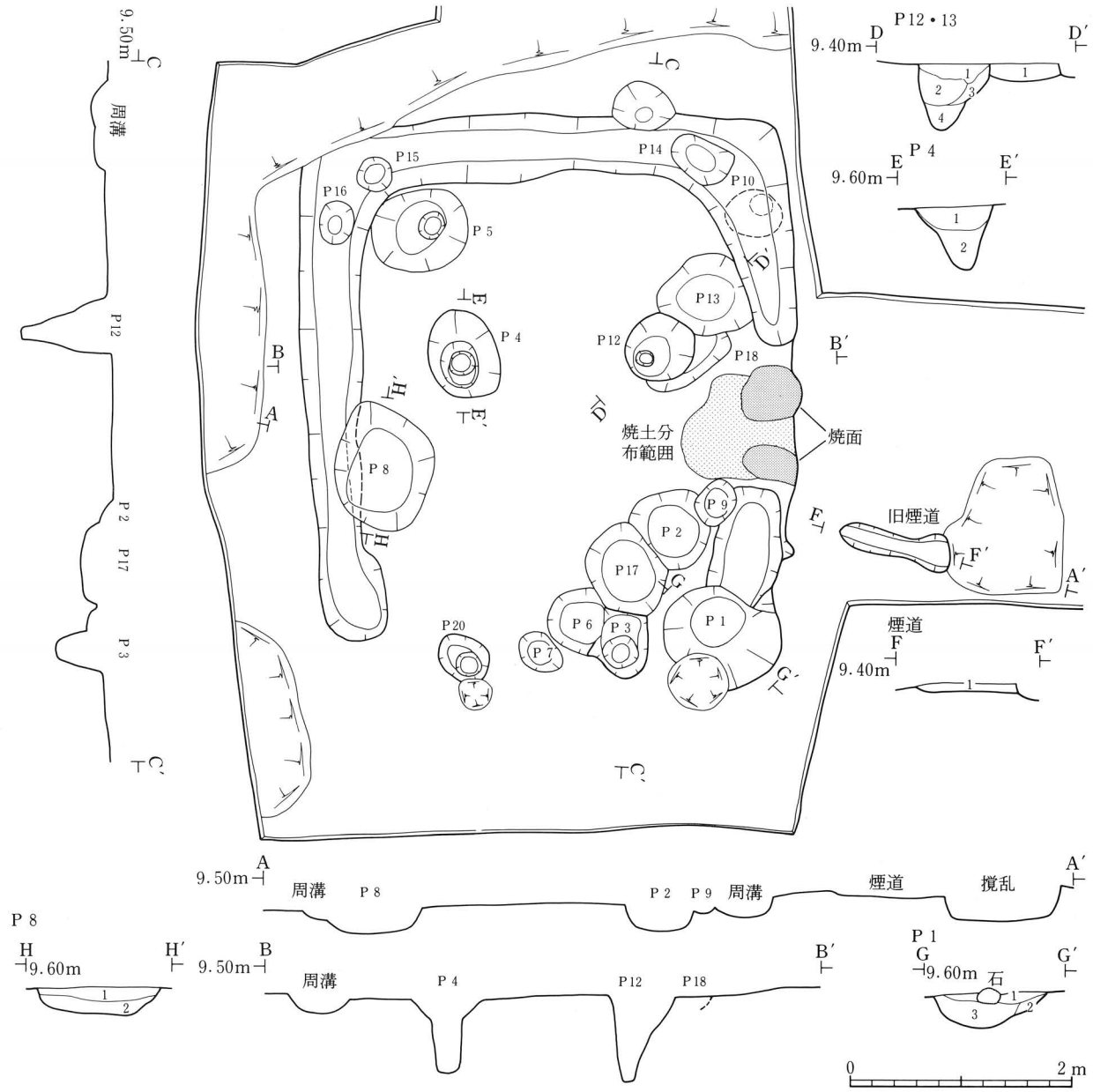
建築部分を対象に調査区を設定し確認調査を実施した。その結果、竪穴住居跡１軒が検出されたため、調査区を拡張して引き続き本調査を実施した。遺構は少なく、竪穴住居跡以外は近・現代の攪乱穴だけである。

盛土及び旧耕作土の直下が地山で遺構検出面となる。地山の土性は、にぶい黄褐色粘土質シルトである。

4　発見遺構と出土遺物

ＳＩ－１竪穴住居跡

調査区の西側で検出された。攪乱が著しく、壁は既に削平され、床面が残存する状態である。周溝内・ピット埋土・床面より灰白色火山灰が検出されている。



層 No.	土　色	土　質	そ　の　他
P12－1	10YR4/3 にぶい黄褐色	粘土質シルト	焼土・炭化物・灰白色火山灰を斑状に含む。
2	10YR3/3 暗　褐　色	シルト質粘土	炭化物・焼土を斑状に含む。黄色粘土をブロック状に含む。
3	10YR5/3 黄　褐　色	シルト質粘土	炭化物・焼土・にぶい黄褐色土を斑状に含む。
4	10YR4/3 にぶい黄褐色	粘土質シルト	炭化物をブロック状に含む。焼土塊を含む。
P13－1	10YR4/3 にぶい黄褐色	粘土質シルト	焼土・炭化物を斑状に含む。
P4－1	10YR3/3 暗　褐　色	粘土質シルト	
2	10YR5/4 にぶい黄褐色	粘土質シルト	暗褐色土・焼土を含む。

層 No.	土　色	土　質	そ　の　他
煙道 1	10YR4/3 にぶい黄褐色	粘土質シルト	暗赤褐色焼土の小ブロックを含む。
P1－1	10YR3/3 暗　褐　色	粘土質シルト	炭化物を含む。
2	10YR3/2 黒　褐　色	粘土質シルト	炭化物・焼土・にぶい黄褐色土を斑状に含む。
3	10YR5/4 にぶい黄褐色	粘土質シルト	暗褐色土を斑状に含む。
P8－1	10YR5/4 にぶい黄褐色	粘土質シルト	灰白色火山灰及び暗褐色土を斑状に含む。
2	10YR3/3 暗　褐　色	粘土質シルト	にぶい黄褐色土・焼土・炭化物を含む。
周溝埋土	10YR5/4 にぶい黄褐色	粘土質シルト	暗褐色土をブロック状に含む。炭化物・灰白色火山灰を斑状に含む。

第59図　竪穴住居跡実測図

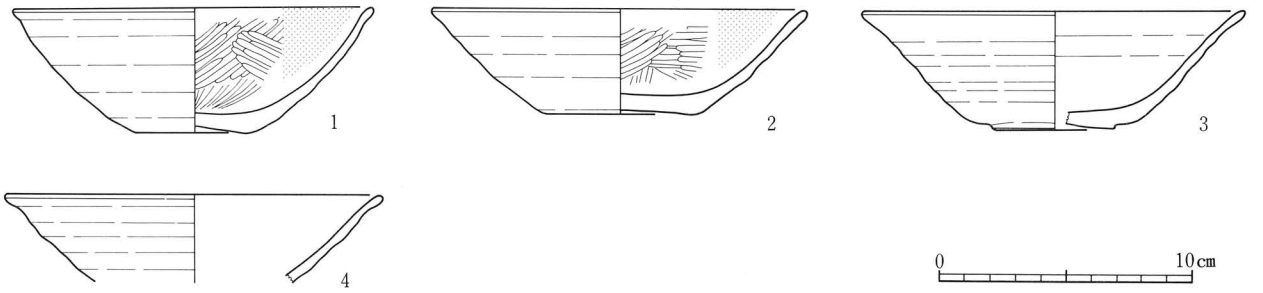
残存部の範囲は東西420cm、南北520cmほどで、磁北に対して南北軸は18度東に偏る。（註１）。

カマドは東側に新旧２時期のものが検出された。新しいカマドは東辺中央に構築されるが基底部が残存するだけである。径１ｍの範囲で焼土が分布しており、袖部分に焼面が確認された。煙道は検出されなかった。古いものは南側にあり、煙道のみ残存し、その規模は幅25cm・長さ100cmである。底面はほぼ平坦であり、深さは検出面より10cmである。住居跡の東西軸に対して約13度南に偏る。周溝は南辺以外ほぼ巡っており、50～80cmとやや幅が広く、深さ約

15cmを測る。

ピットは床面で20個が検出され、柱痕跡は確認されなかったが、形態・深さ・位置関係からＰ３・４・12・20が柱穴と考えられる。Ｐ４の底面から須恵器甕の底部から体部にかけての破片が、Ｐ12の底面から扁平な礫が出土している。礎盤として使用したと考えられる。その他のピットは住居の南東付近で多く検出され、堆積土中に焼土が詰まっているものが多い。その性格は不明だが、Ｐ１は出土遺物が多く、規模も径110cmと大きく、位置的に貯蔵穴と考えられる。また、Ｐ８もＰ１と同様に貯蔵穴と考えられる。

住居跡の床面・周溝内・ピット内・カマド周辺から土師器坏・甕、赤焼土器坏、須恵器坏・甕、焼けた石、礫などが出土している。



図中番号	登録番号	種別・器種	出土地区	基本層位	出土遺構・層	取上番号	器高・長	口径・幅	底径・厚	重量	特徴	写真図版
1	D－2	ロクロ土師器　坏			ＳＩ－１カマド焼土上		5.0	14.0	4.4		回転糸切り無調整	26－3
2	D－1	ロクロ土師器　坏			ＳＩ－１　Ｐ17		4.2	14.6	5.8		回転糸切り無調整	26－3
3	D－3	赤焼土器　坏			ＳＩ－１　Ｐ３１層		4.8	15.0	4.7		回転糸切り無調整	26－3
4	E－1	須恵器　坏			ＳＩ－１　Ｐ２		(3.5)	14.7			灰白色を呈する	26－3

第60図　出土遺物

土師器坏（第60図－１・２）：ロクロ使用のもので２点（Ｄ－１・２）図示された。２点とも底部の切り離しは回転糸切り無調整である。胎土は砂粒をあまり含まず赤色酸化土粒を含み緻密である。

１（Ｄ－２）は、底部から口縁部の資料で 1/6 の残存である。底部からやや丸みをもって立上がり、口縁部がやや外反する。底径と口径の比（以下「底口比」という。）が0.31で、器高と口径の比（以下「器口比」という。）が0.36で椀形を呈する（註２）。外面のロクロ目の凹凸は明瞭ではない。内面のヘラミガキは底部は放射状で、底部から体部上方にかけては斜め方向にしている。

２（Ｄ－１）は、底部から口縁部の資料で 1/3 の残存である。底部からやや丸みをもって立上がり直線的に外傾し、口縁部が外傾のままやや肥厚する。底口比が0.40で器口比が0.28で扁平な坏である（註２）。外面のロクロ目の凹凸は明瞭で、内面のヘラミガキは横方向にした後、底部から体部上方にかけて斜め方向にしている。再酸化のために黒色処理が部分的にとんでいる。

その他図示できなかったものも概ねＤ－１・２の特徴がある。底部資料が他に２点あるが、共に、回転糸切り無調整である。また、付け高台で断面形状が逆三角形を呈し、外面に２条の沈線を施している高台付坏も出土している。

赤焼土器坏（第60図－３）：ロクロ使用で内面はミガキ調整や黒色処理がされておらず、酸化焔焼成された坏である。１点（Ｄ－３）図示された。

３（Ｄ－３）は、底部から口縁部の資料で 1/4 の残存である。底部からやや丸みをもって立上がり直線的に外傾する。口縁部はさらに開き外傾する。底口比が0.31で器口比が0.32である（註２）。外面のロクロ目の凹凸は明瞭で幅が狭い。内面のロクロ目は不明瞭である。底部の切り離しは回転糸切り無調整である。胎土は砂粒が混じり荒く、白色針状物質を含む。

その他図示できなかったものも概ねＤ－３の特徴がある。底部資料は他に１点あり、回転糸切り無調整である。

須恵器坏（第60図－４）：１点（Ｅ－１）図示された。

４（Ｅ－１）は体部から口縁部にかけての資料で 1/8 の残存である。外面のロクロ目の凹凸は明瞭で、内面のロクロ目の凹凸は不明瞭で器面が滑らかである。焼きがあまく、内外面は灰白色を呈し、断面中央は灰色になっている。鴻ノ巣遺跡６次調査の第Ⅳ層上面検出遺構及び燕沢遺跡８次調査のＳＩ３から出土している灰白色を呈する土器に類似する（註３）。

その他、Ｅ－１と類似し黒斑のように黒くなっている体部の破片資料もある。また、Ｅ－１と違い焼きのしっかりした青灰色のものもある。底部の資料が２点あり回転糸切り無調整のものと回転糸切り後回転ヘラケズリ調整のものがある。

5　調査成果のまとめと考察

1）ＳＩ－１及び出土遺物の年代

ＳＩ－１は出土遺物の絶対数が少ないが、類似する土器群が出土している近くの遺跡としては中田畑中遺跡１・２号住居跡、安久東遺跡２号住居があげられる。それらの土器年代観を総合すると９世紀後半～10世紀前半になり、当遺構出土の土器についてもその範囲内で考えられる。

また、ＳＩ－１の周溝内・ピット埋土上層・床面からは10世紀前半頃に降下したとされる灰白色火山灰が斑点状に検出されている。この状況から、住居の廃絶が灰白色火山灰降下後で、その存続期間も灰白色火山灰降下前後の10世紀前半頃と考えられる。

土器の年代も火山灰の堆積状況と合わせて考えてみると前述の９世紀後半～10世紀前半の中でも、さらに10世紀前半と絞っておきたい。

2）まとめ

① 安久遺跡は沖積平野の標高９～10mに立地する古墳時代後期の古墳（安久諏訪古墳）、平安時代の集落跡、古代～中世の溝跡が発見されている遺跡である。

② 今回の調査によって竪穴住居跡が１軒発見された。出土遺物はロクロ土師器・赤焼土器・須恵器が出土している。

③ 竪穴住居跡の時期は、10世紀前半と考えられる。

（註１）　遺跡周辺では磁北方向は真北に対して約７度20分西に偏る。

（註２）　底口比・器口比を求めるにあたり、小破片であるためにロ径については、図上復元による数値を用いている。

（註３）　鴻ノ巣遺跡６次調査で「これらの灰白色の土器が時期的に限定され、器種や器形、法量などに須恵器と違ったまとまりがあれば、須恵器から分離してとらえた方が適切であると思われる」ことが指摘され、その見解もとに燕沢遺跡８次調査では、「その特徴として、底部切り離し後手持ちヘラケズリ調整されるものが存在すること、内面の器面においてロクロ目の凹凸がみられず滑らかなもの等何種類かの技法的な違いがあること、黒斑のように黒くなっている部分が認められることなどがあげられる」ことが指摘されている。また、報文では須恵器となっているが、同様のものは近辺の遺跡では安久東遺跡・四郎丸館跡で出土している。それらの土器は本遺跡のに比べさらに軟質である。器形・法量・調整だけでなく色調についても考慮にいれる必要があると考えられる。

引用・参考文献

荒井　　格（1991）：「鴻ノ巣遺跡―第６次発掘調査報告書―」仙台市文化財調査報告書第148集

伊東信雄他（1975）：「安久遺跡発掘調査略報」仙台市中田第一土地整理組合

小川　淳一（1987）：「五本松窯跡」仙台市文化財調査報告書第99集

熊谷・長島（1995）：「燕沢遺跡第８次調査」『仙台平野の遺跡群ＸⅣ』仙台市文化財調査報告書第195集

佐藤　甲二（1985）：「中田畑中遺跡―第２次発掘調査報告書―」仙台市文化財調査報告書第78集

白鳥　良一（1980）：「多賀城跡出土土器の変遷」『研究紀要Ⅶ』宮城県多賀城跡調査研究所

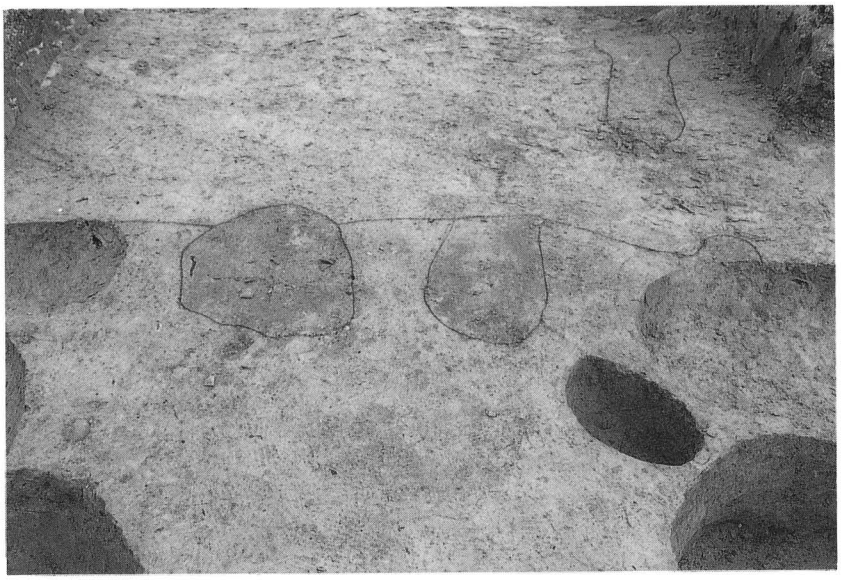
竹田・渡部（1995）：「四郎丸館跡」仙台市文化財調査報告書第200集

土岐山　武（1980）：「安久東遺跡」『東北新幹線関係遺跡調査報告書Ⅳ』宮城県文化財調査報告書第72集

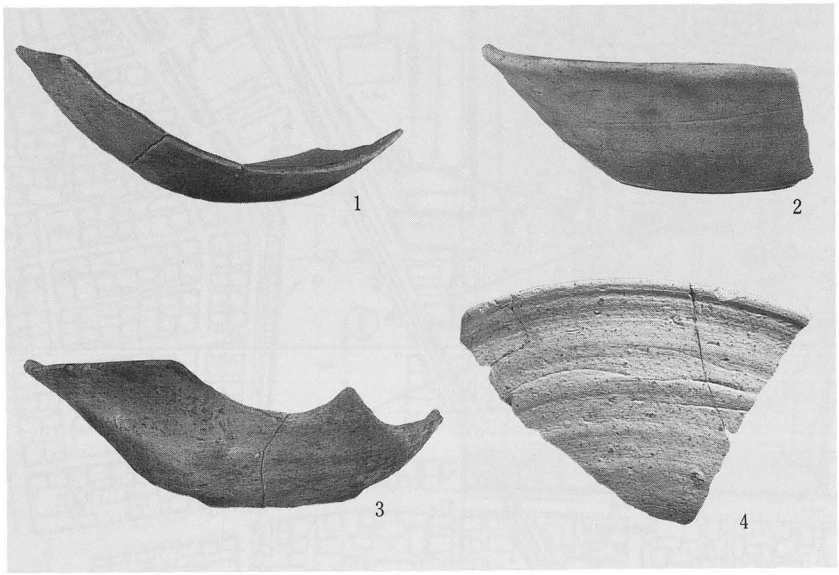
平間　亮輔（1993）：「安久東遺跡―第３次発掘調査報告書―」仙台市文化財調査報告書第174集

結城・木村（1993）：「安久遺跡」『年報14』仙台市文化財調査報告書第176集

1　ＳＩ－１竪穴住居跡全景



2　ＳＩ－１カマド周辺（西から）



1 ロクロ土師器 坏 Ｄ－２
（ＳＩ－１カマド焼土面・第60図１）
2 ロクロ土師器 坏 Ｄ－１
（ＳＩ－１Pit ９・第60図２）
3 赤焼土器　　坏 Ｄ－３
（ＳＩ－１Pit ３　１層・第60図３）
4 須恵器　　坏 Ｅ－１
（ＳＩ－１Pit ２・第60図４）

3　出土土器

図版26　１号竪穴住居跡・出土遺物

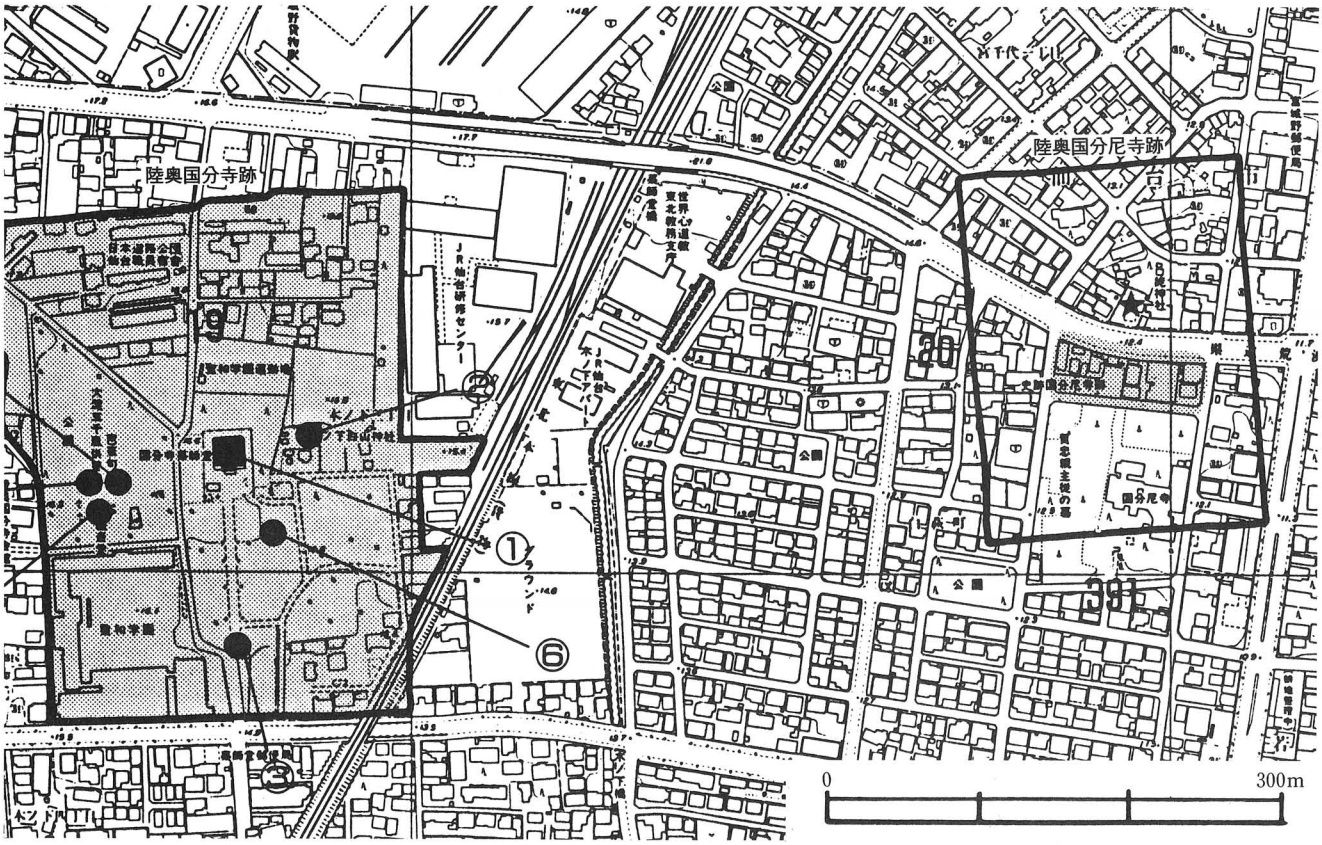
Ｘ　陸奥国分尼寺跡確認調査報告書

1　調査要項

遺跡名	陸奥国分尼寺跡（宮城県遺跡番号　０１０２０）
調査地点	仙台市宮城野区宮千代一丁目４番12号
調査原因	ＲＣ２階建事務所建設
調査対象面積	190㎡
調査面積	100㎡
調査期間	平成８年４月９日～４月12日
調査主体	仙台市教育委員会
調査担当	仙台市教育委員会文化財課
担当職員	木村浩二　篠原信彦　工藤哲司　長島榮一　竹田幸司　豊村幸宏　根本光一
調査参加者	森　剛男
調査協力	（有）中辰企業

2　遺跡の位置と環境

陸奥国分尼寺跡はＪＲ仙台駅の東南東約2.5㎞の若林区白萩町、宮城野区宮千代に位置し、市街地が広がる段丘から沖積平野へ移行する標高約11ｍの所に立地している。遺跡の中央部を県道荒浜・原町線が東西に貫いており、遺跡の南側は曹洞宗国分尼寺がある。寺院中心部と考えられる県道南側部分は昭和23年に国史跡に指定されている。

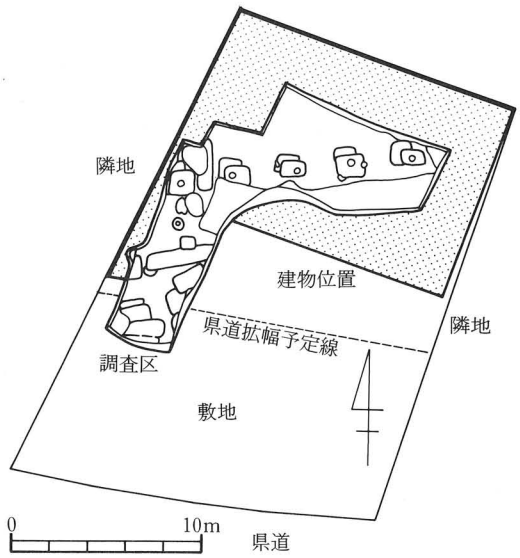


※アミは国指定史跡範囲

第61図　調査地点と周辺の地形

陸奥国分尼寺跡の西方500mには奈良時代後半に建立された陸奥国分寺跡が位置しており、東西800尺、南北800尺以上の築地塀で囲まれた大規模な寺院である。伽藍配置は中軸線上に南大門、中門、金堂、講堂、僧坊が並び、中門と金堂は回廊で結ばれている。金堂の東には回廊が巡る七重塔があり、金堂と講堂の間には東に鐘楼、西に経楼のある堂々たるものである。

南方約1.2kmには、弥生時代から近世にかけての複合遺跡である南小泉遺跡が位置し、その中心部には古墳時代前期末に築造された主軸長110mの前方後円墳である遠見塚古墳がある。東方500mには古代の志波遺跡、同約1kmには中世の谷地館跡がそれぞれ位置している。



第62図　調査区配置図

陸奥国分尼寺跡は、史跡指定された中心部で過去5次にわたり発掘調査が実施されている。昭和39年には、「観音塚」と呼ばれていた陸奥国分尼寺跡の中心建物と考えられる礎石が露出した土壇の一画で発掘調査が実施され、桁行5間、梁行4間の礎石建ちの建物跡が発見された。この建物は、金堂跡と考えられている。この金堂跡の周辺では、これまでにも数回の調査が実施されてきたが、関連する建物跡などは発見されていない。

3　調査方法と基本層位

今回の調査地点は、以前ガソリンスタンドとして使用されていたが、新たにＲＣ２階建事務所を建設するために、４月２日付けで発掘届が提出された。この場所は陸奥国分尼寺跡のほぼ中軸線上に当たり、東西に走る県道荒浜・原町線を挟んで金堂跡の北側に位置している。ガソリンスタンドの地下タンク・建物の基礎等によって、かなり撹乱されていると考えられたが、陸奥国分尼寺跡に関連する遺構が検出される可能性が高いので、申請者と協議して確認調査を実施した。調査は建物建設予定地に５×５ｍの調査区を設定し、黄褐色砂質シルトまで掘り下げて実施した。その結果、掘立柱建物跡の掘り方が検出されたため、地下タンク等による撹乱部分を除いて調査区を最大限拡張して調査を実施した。

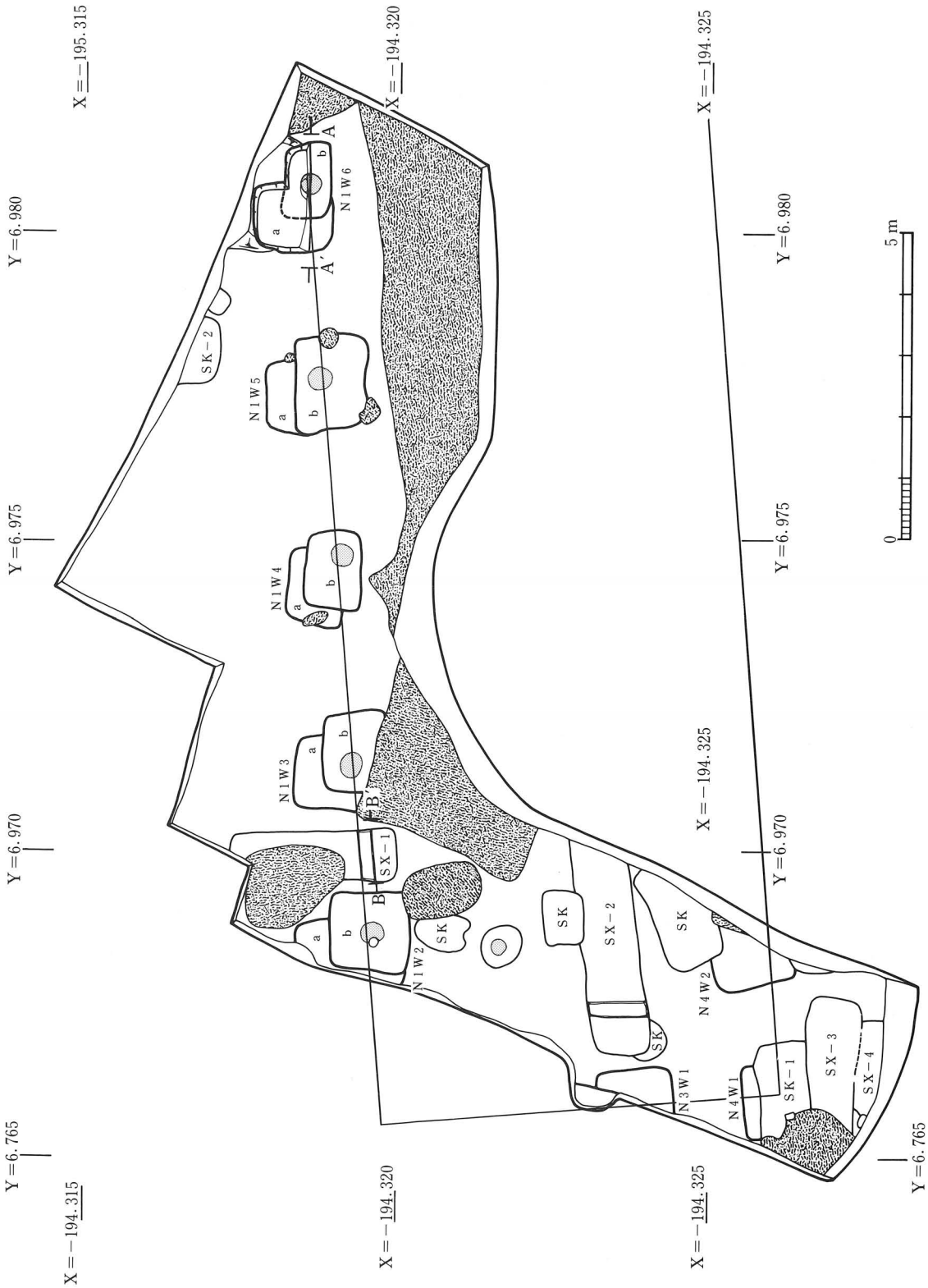
調査により陸奥国分尼寺跡の中心的な建物跡が検出されたことから、事業主体者である中辰企業代表取締役・中村譲治氏と協議した結果、建物の基礎を設計変更し、検出された遺構の保存について協力を得ることができたので、遺構の全面的な掘り込み作業は実施せず、遺構データを記録する上で最低限の調査を実施した。また、確認調査ではあるが、陸奥国分尼寺跡の主要遺構と考えられるため、宮城県文化財保護課、宮城県多賀城跡調査研究所、郡山遺跡調査指導委員等に連絡し、ご意見をいただいた。

基本層は３層認められた。１層は黒褐色シルトで盛土以前の畑の耕作土である。層の厚さは25～30cmを測る。２層は黒褐色シルトと黄褐色シルトの混じり合った層で、層の厚さは約20cmを測る。３層は黄褐色砂質シルト・粘土質シルトの地山である。撹乱が著しく、深いものは下層の砂礫層に達している所もある。

4　発見遺構と出土遺物

1）掘立柱建物跡

ＳＢ－１Ａ建物跡　桁行は５間又はそれ以上、梁行は３間と考えられる東西棟の掘立柱建物跡である。建物跡の規模は、北側の柱列で桁行残存長13m以上で、柱間寸法は桁行の西より3.2＋2.9＋3.4＋2.9＋3.2m間隔で中央の柱間寸


X＝－195.315
X＝－194.320
X＝－194.325
Y＝6.980
Y＝6.975
Y＝6.970
Y＝6.765
X＝－194.315
X＝－194.320
X＝－194.325
Y＝6.980
Y＝6.975
Y＝6.970
Y＝6.765
A
A′
B
B′
N1W6
N1W5
N1W4
N1W3
N1W2
N3W1
N4W1
N4W2
SK－2
SK－1
SK－3
SK－4
SX－1
SX－2
SX－3
SX－4
SK
a
b
0
5m

第63図　遺構配置図

法が広い。梁行の規模は全長6.3mと推定され、柱間寸法は2.1m等間と考えられる。建物跡の主軸方向は北側柱列で真北を基準としてE－10°－Nである。掘り方の平面形は、大きさ90～150cmの方形・長方形を呈し、柱痕跡は直径35～40cmの円形の柱である。東端の掘り方を半裁して土層を観察した結果、検出面からの深さは80cmを測り、底面は砂礫層まで掘り込んでいる。掘り方の堆積土は黄褐色粘土と黒褐色粘土を突き固めており、互層となっている。

ＳＢ－１Ｂ建物跡　ＳＢ－１Ａ建物跡とほぼ同じ規模と考えられる建物跡で、ＳＢ－１Ａ建物跡の北側柱列の掘り方と重複している。掘り方の平面形は大きさ60～120cmの方形・長方形を呈する。柱痕跡は抜き取られているため検出されていない。東端の掘り方は大きく抜き取りが観察され、他の掘り方も同様に柱を抜き取っていると考えられる。

ＳＢ－１建物跡は、ほぼ同一場所に建て替えをしたもので、金堂跡の中心より北側に44.7m（150尺）、南北中軸線より東側に６ｍ（20尺）東寄りの位置で発見された。陸奥国分尼寺跡の主要な建物跡の一つであると考えられる。

２）その他の遺構

ＳＸ－１不明遺構　幅90cm、長さ3.5m以上で東西方向に検出された布掘状のもので、断面形は逆台形で深さ約40cmを測る。堆積土は２層あり、１層は暗褐色粘土質シルトで、黄褐色粘土質シルトを斑点状に含む人為的に埋められた層である。部分的に断面を観察したため、所属時期・性格は不明である。

ＳＸ－２不明遺構　幅80cm、長さ2.7mの南北方向に検出された布掘状のもので、断面形は逆台形で、深さ約30cmを測る。これもＳＸ－１同様に人為的に埋められていると考えられる。

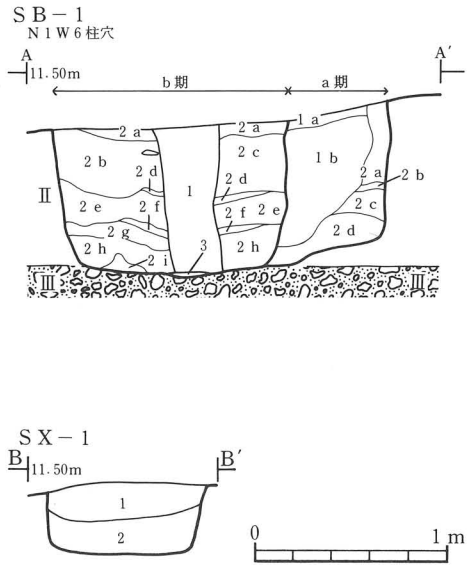
その他の遺構としては土坑などが検出されている。

出土遺物は瓦が少量出土しただけである。実測されたものは拓本資料４点（第65図）で、単弧文軒平瓦１点、平瓦２点、熨斗瓦１点がある。

5　調査成果のまとめ

①　今回の確認調査によって発見された遺構は掘立柱建物跡１棟、性格不明な遺構３基、土坑などがあり、出土遺物は単弧文軒平瓦、平瓦がある。

②　掘立柱建物跡は桁行５間またはそれ以上、梁間３間の東西棟建物跡であり、同一場所に建て替えをしている。



第64図　遺構断面図

ＳＢ－１　ＮＩＷ６

層 No.	土　色	土　質	そ　の　他
a－1a	10YR3/1 黒　褐　色	粘土	粘性・しまりなし〕抜き取り穴埋土
1b	10YR3/3 暗　褐　色	シルト質粘土	粘性・しまりなし
2a	10YR3/3 暗　褐　色	シルト質粘土	黄色粘土を少量含む。
2b	10YR2/1 黒　　色	粘土	
2c	10YR4/4 褐　　色	シルト質粘土	黒色粘土を少量含む。
2d	10YR2/3 黒　褐　色	粘土	黒色粘土を多量に含む。
b－1	10YR3/3 暗　褐　色	シルト質粘土	褐色粘土粒を斑状に含む。柱痕跡
2a	10YR2/2 黒　　色	シルト質粘土	黄色粘土を少量含む。
2b	10YR4/4 褐　　色	シルト質粘土	黄色粘土を微量含む。
2c	10YR4/4 褐　　色	シルト質粘土	黄色粘土を斑状に含む。
2d	10YR2/3 黒　褐　色	粘土	
2e	10YR4/4 褐　　色	シルト質粘土	黄色粘土を少量含む。
2f	10YR2/2 黒　褐　色	粘土	
2g	10YR4/4 褐　　色	シルト質粘土	黒色粘土を少量含む。
2h	10YR4/4 褐　　色	シルト質粘土	黒色粘土を微量含む。
2i	10YR4/4 褐　　色	シルト質粘土	
3	10YR6/4 にぶい黄橙色	シルト質粘土	周囲に酸化鉄が集積。
Ⅱ	10YR4/4 褐　　色	シルト質粘土	層上部は粒子が細かいが下部程粗粒となる。
Ⅲ	10YR4/3 にぶい黄褐色	砂礫	径0.5～10ｃｍ

ＳＸ－１

層 No.	土　色	土　質	そ　の　他
1	10YR2/3 暗　褐　色	粘土質シルト	黄褐色粘土シルトを斑状に含む。
2	10YR6/6 明 黄 褐 色	粘土質シルト	

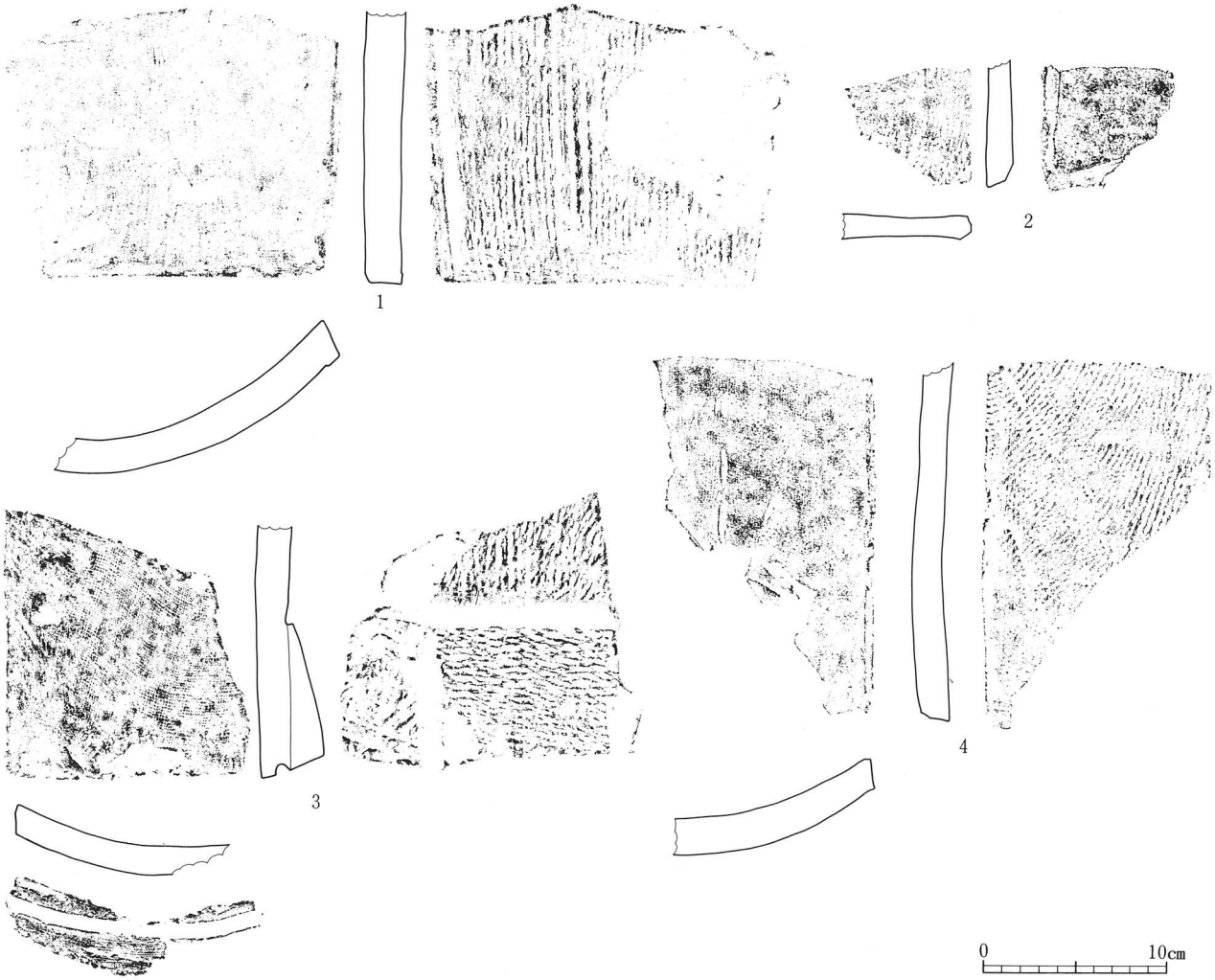
③　陸奥国分尼寺跡では、これまで金堂跡以外にほとんど関連する遺構は発見されていなかったが、今回の発見で金堂跡の北側に主要な建物跡が発見された。

④　陸奥国分尼寺跡を東西に貫く県道荒浜・原町線拡幅工事に伴い、今後実施される発掘調査で主要な遺構の発見が期待される。

参考文献

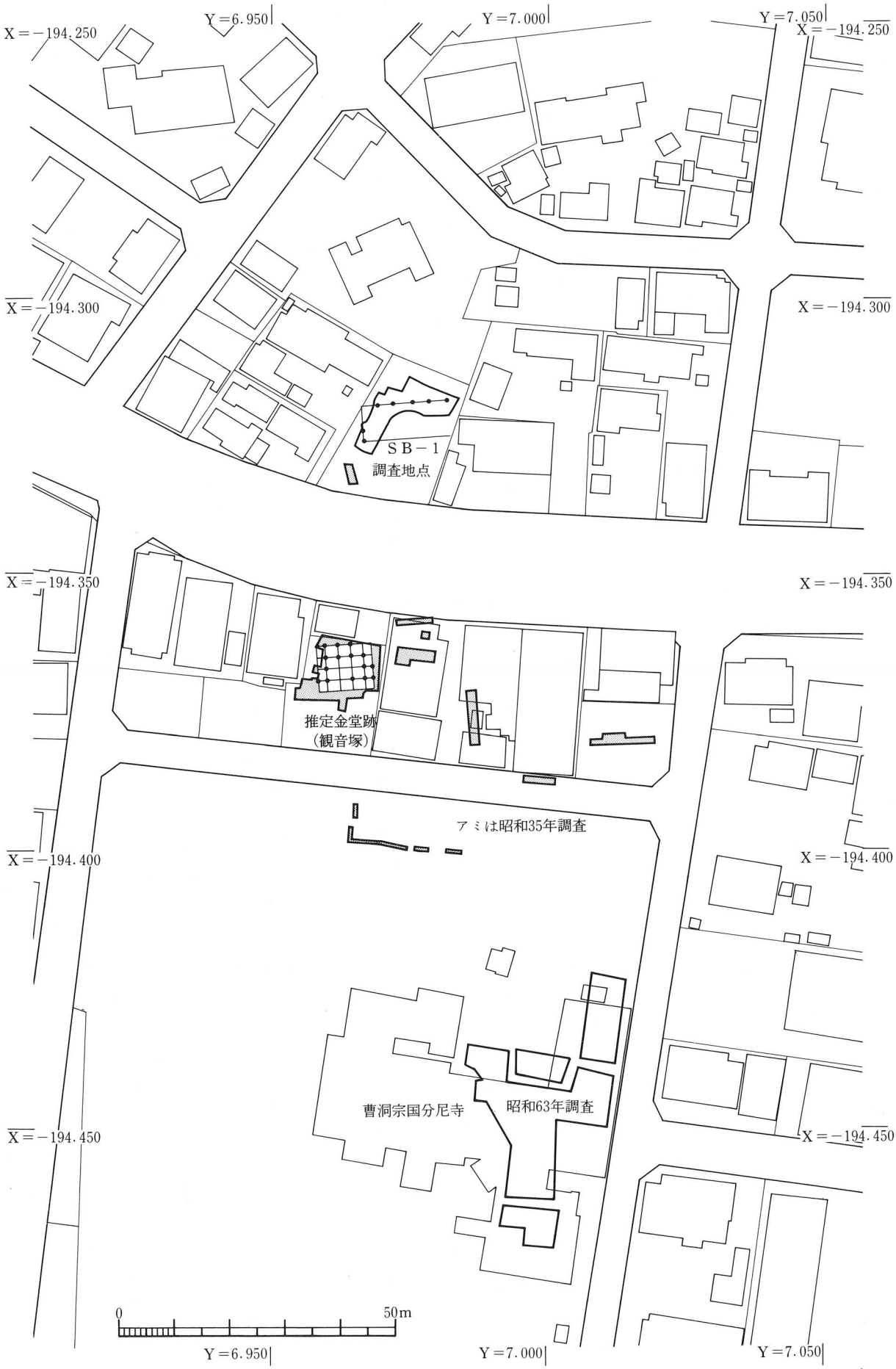
仙台市教育委員会　(1969)：「史跡陸奥国分尼寺環境整備並びに調査報告書」『仙台市文化財調査報告書第４集』

木村浩二　(1995)：「陸奥国分尼寺跡―仙台市史特別編２　考古資料」『仙台市史編さん委員会』仙台市



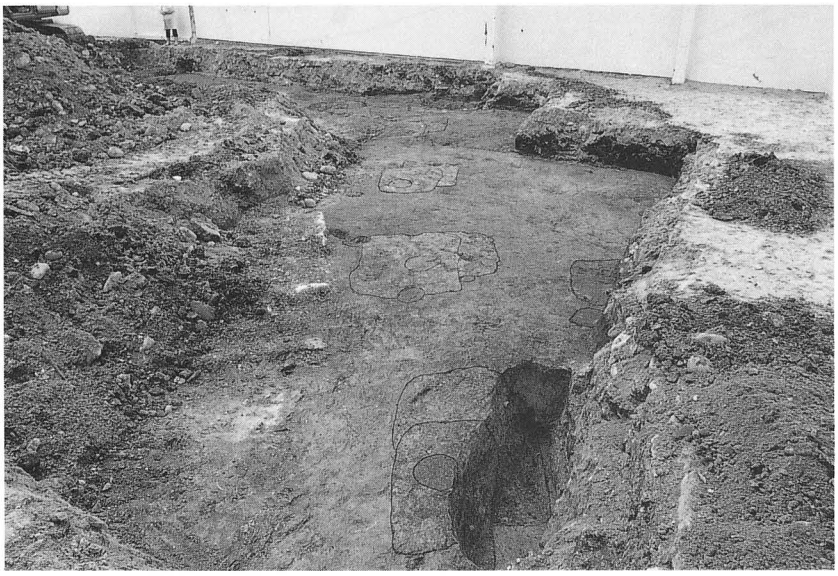
図中番号	登録番号	種別・器種	出土地区	基本層位	出土遺構・層	取上番号	器高・長	口径・幅	底径・厚	重量	特徴	写真図版
1	G－2	瓦類　平瓦			SK－1		(15.2)	(15.7)	2.3		凹面布目、凸面縄叩き、凹形台圧痕	28－2
2	G－4	瓦類　熨斗瓦			2層上面		(7.1)	(7.1)	1.5		凹面布目後ナデ、凸面縄叩き後ナデ	28－4
3	G－1	瓦類　単弧文軒平瓦			SK－1		(14.1)	(11.8)	3.5		単弧文軒平瓦、凹面布目、凸面縄叩き	28－1
4	G－3	瓦類　平瓦			2層上面		(20.0)	(11.1)	2.1		凹面布目、凸面縄叩き	28－3

第65図　出土遺物

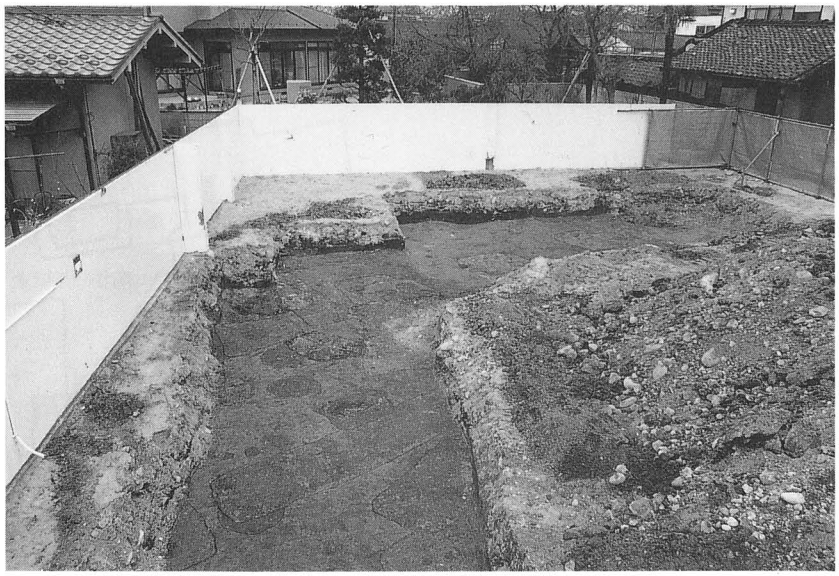


第66図　陸奥国分尼寺跡建物配置図

1　調査区全景

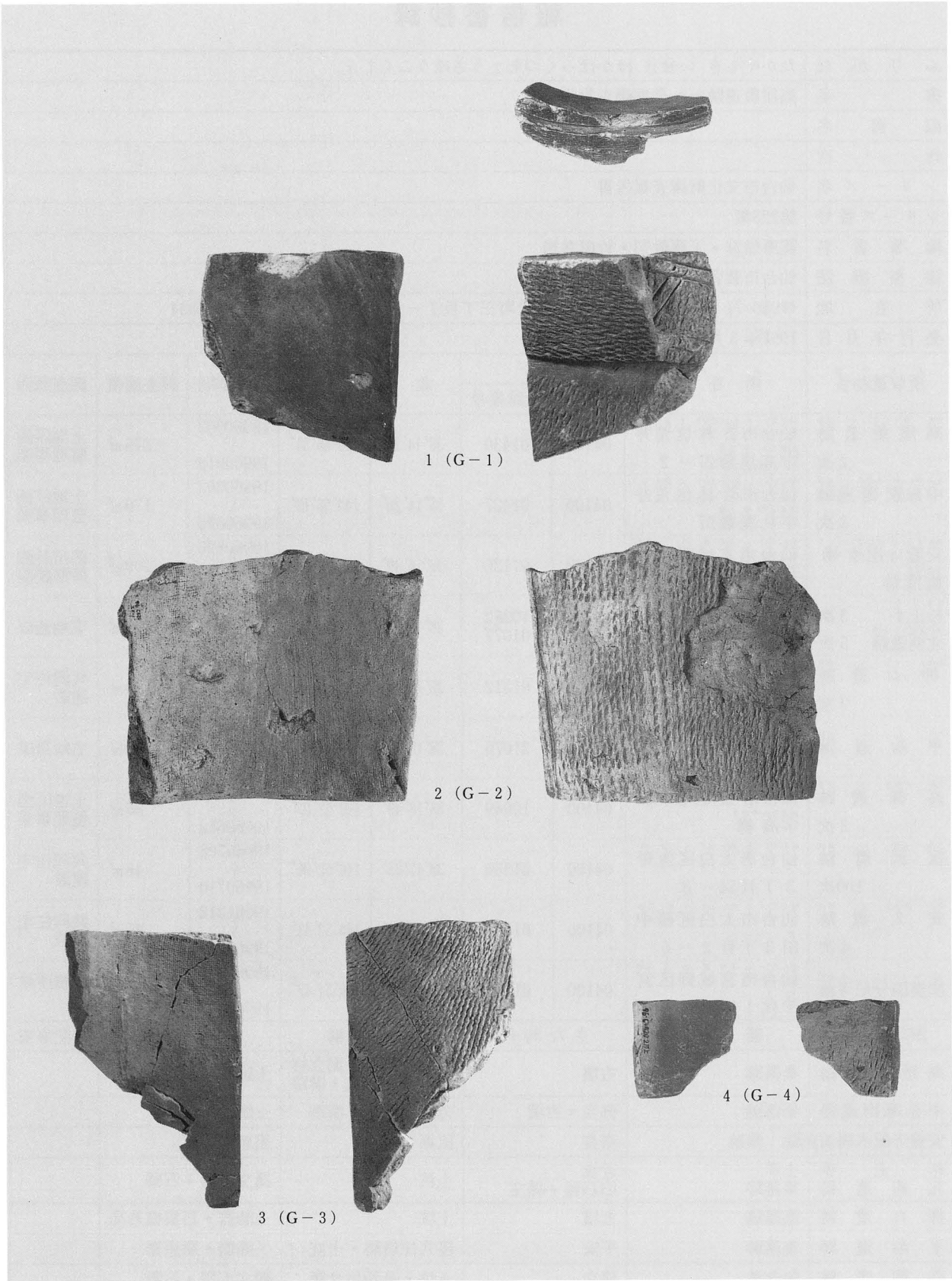


2　ＳＢ－１掘立柱建物跡（東より）



3　ＳＢ－１掘立柱建物跡（南より）

図版27　調査状況



1瓦類 単弧文軒平瓦 G－1（SK－1・第65図3）
2瓦類 平瓦 G－2（SK－1・第65図1）
3瓦類 平瓦 G－3（2層上面・第65図4）
4瓦類 熨斗瓦 G－4（2層上面・第65図2）

図版28　出土遺物

報告書抄録

ふりがな	たかやしき いせき ほかはっくつちょうさほうこくしょ
書名	高屋敷遺跡ほか発掘調査報告書
副書名	
巻次	
シリーズ名	仙台市文化財調査報告書
シリーズ番号	第223集
編著者名	篠原信彦・工藤哲司・竹田幸司
編集機関	仙台市教育委員会
所在地	〒980-71 宮城県仙台市青葉区国分町三丁目7－1 ☎022－214－8893～8894
発行年月日	1997年3月31日

所収遺跡名	所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
高屋敷遺跡 2次	仙台市若林区荒井字高屋敷27－2	04100	01430	38°14′27″	140°56′31″	19960902～19960919	375㎡	土地区画整理事業
中在家南遺跡 2次	仙台市若林区荒井字札屋敷57	04100	01427	38°14′20″	140°56′12″	19960603～19960620	170㎡	土地区画整理事業
安養寺配水場前窯跡	仙台市宮城野区安養寺3丁目地内	04100	01135	38°16′49″	140°54′32″	19960826～19960829	100㎡	都市計画街路建設
杉土手 3次 北前遺跡 5次	仙台市太白区山田北前町1046－12	04100	10382 01077	38°13′23″	140°50′06″	19960513～19960524	85㎡	宅地造成
押口遺跡 2次	仙台市若林区荒井字押口28	04100	01312	38°14′29″	140°56′38″	19960527～19960528	110㎡	共同住宅建設
平治遺跡	仙台市青葉区上愛子字平治1	04100	21075	38°15′59″	140°44′46″	19960422～19960424	306㎡	宅地造成
高柳遺跡 2次	仙台市泉区七北田字高柳	04100	19049	38°18′49″	140°53′03″	19960529～19960612	86㎡	土地区画整理事業
富沢遺跡 100次	仙台市太白区鹿野3丁目54－8	04100	01369	38°13′23″	140°52′36″	19960708～19960710	48㎡	共同住宅建設
安久遺跡 4次	仙台市太白区西中田3丁目2－6	04100	01106	38°11′40″	140°52′51″	19961212～19961218	85㎡	共同住宅建設
陸奥国分尼寺跡	仙台市宮城野区宮千代1丁目4－12	04100	01020	38°14′57″	140°54′47″	19960409～19960412	100㎡	事務所建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
高屋敷遺跡	集落跡	古墳	竪穴住居跡・掘立柱建物跡・土坑・溝跡	土師器・須恵器	
中在家南遺跡	集落跡	弥生・古墳	方形周溝墓・溝跡	土師器・石器	
安養寺配水場前窯跡	窯跡	奈良	灰原	須恵器・瓦	
杉土手 北前遺跡	土手 集落跡	近世 旧石器・縄文	土坑	縄文土器・石器	
押口遺跡	集落跡	古墳	土坑	土師器・石製模造品	
平治遺跡	集落跡	平安	竪穴住居跡・土坑	土師器・須恵器	
高柳遺跡	包含地	縄文	土坑・遺物包含層	縄文土器・石器	
富沢遺跡	水田跡	弥生～近世	水田耕作土	なし	
安久遺跡	集落跡	平安	竪穴住居跡	土師器・須恵器	
陸奥国分尼寺跡	寺院跡	奈良・平安	掘立柱建物跡	土師器・須恵器・瓦	

仙台市文化財調査報告書第223集
高　屋　敷　遺　跡ほか
発掘調査報告書
1997年３月
発行　仙台市教育委員会
仙台市青葉区国分町三丁目７－１
文化財課　TEL　022(214)8893
印刷　針生印刷株式会社
仙台市若林区六丁の目西町１－38
TEL　022(288)5011